

下山門敷町遺跡

—下山門敷町遺跡第3次調査報告—

下山門乙女田遺跡

—下山門乙女田遺跡第2次調査報告—

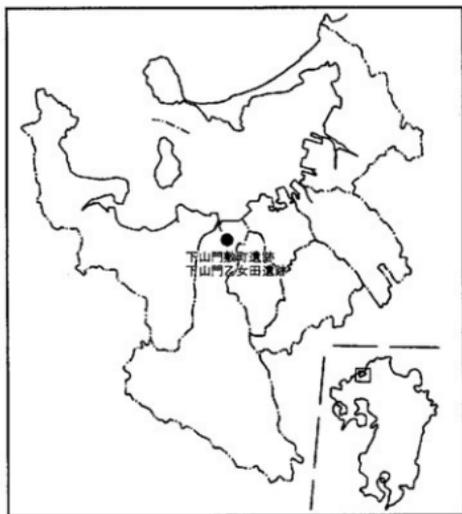
福岡市埋蔵文化財調査報告書第727集

2002

福岡市教育委員会

下山門敷町遺跡 下山門乙女田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第727集



遺跡番号	調査番号
SYS-3	9950
SOM-2	9966

2002

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、数多くの遺跡が残されています。福岡市の西部に広がる早良平野は、近年開発の増加が著しく、それらが次第に失われつつあります。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は民間の分譲マンション建設に伴い実施された下山門敷町遺跡第3次調査・下山門乙女田遺跡第2次調査の記録を報告するものです。調査では弥生時代から中世にいたる遺構・遺物が発見されました。今回の調査によって該地の歴史を解明する上での数多くの貴重な資料を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、ご理解とご協力を賜りました土斐崎泰浩氏、新栄住宅株式会社をはじめとする数多くの方々に対しまして、心からの謝意を表します。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が西区下山門3丁目地内における分譲マンション建設に伴い、発掘調査を実施した下山門敷町遺跡第3次調査、下山門乙女田遺跡第2次調査の報告書である。
2. 本書で報告する各調査の細目は以下の通りである。

調査回数	調査番号	遺跡略号	所在地	調査面積	調査期間
下山門敷町第3次調査	9950	SYS3	西区下山門3丁目431-1	1450㎡	991108~000107
下山門乙女田第2次調査	9966	SOM2	西区下山門3丁目464・465	770㎡	000106~000226

3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は星野恵美、名取さつき、蔵富士寛、倉光京子、栗木和子、辻筋子、三谷明子が行った。
4. 本書に掲載した遺物実測図の作成は下原幸裕、濱石正子、撫養久美子、犬丸陽子、星野が行った。
5. 本書に掲載した遺構・遺物写真の撮影は星野が行った。
6. 本書に掲載した挿図の製図は林由紀子、山口朱美、撫養、星野が行った。
7. 本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21′西偏する。
8. 遺構の呼称は竪穴住居跡をSC、掘立柱建物をSB、井戸をSE、溝をSD、土坑をSK、ピットをSPと略号化した。
9. 本書で記述する輸入磁器の分類、説明については以下の文献を参考とした。
 横山賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について-型式分類と編年を中心として-」
 【九州歴史資料館研究論集4】1978年
 森田 勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982年
 上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No.2』1982年
 小野正敏「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No.2』1982年
 森田 勉「北部九州出土の高麗陶磁器-編年試案-」『貿易陶磁研究No.5』1985年
10. 遺構・遺物番号は各調査ごとに通し番号とした。なお、挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
11. 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
12. 本書の執筆は付編を除いて星野が行った。
13. 付編の植物珪酸体、珪藻分析、樹種同定は古環境研究所に委託した。
14. 本書の下山門乙女田遺跡出土の金属器の分析は福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎が行い、動物遺体については屋山洋が行った。
15. 本書の編集は星野が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地と環境	2
III. 下山門敷町遺跡第3次調査の記録	6
1. 調査の概要	6
2. 上面の調査記録	7
1) 上面の調査概要	7
2) 遺構と遺物	8
① 竪穴住居 (SC)	8
② 土坑 (SK)	11
③ 溝 (SD)	11
④ ビット出土遺物	13
3. 下面の調査記録	14
1) 下面の調査概要	14
2) 遺構と遺物	14
① 竪穴住居 (SC)	14
② 掘立柱建物 (SB)	17
③ 土坑 (SK)	18
④ 溝 (SD)	39
⑤ ビット出土遺物	41
4. 包含層の遺物	42
1) 上層の包含層	42
2) 下層の包含層	43
5. まとめ	60
IV. 下山門乙女田遺跡第2次調査の記録	65
1. 調査の概要	65
2. 遺構と遺物	66
① 井戸 (SE)	66
② 溝 (SD)	68
③ 土坑 (SK)	86
④ その他の遺物	94
3. まとめ	103
付編	105
I. 下山門敷町遺跡における植物珪酸体分析	105
II. 下山門敷町遺跡における珪藻分析	109
III. 下山門敷町遺跡における樹種同定	111

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/50,000)	3
第2図	下山門敷町遺跡・乙女田遺跡位置図 (1/2,500)	4
第3図	下山門敷町遺跡第3次調査・乙女田遺跡第2次調査位置図 (1/1,000)	5
第4図	調査区概略図 (1/500)	6
第5図	調査区西壁上層図 (1/80)	7
第6図	第3次調査上面遺構配置図 (1/300)	8
第7図	SC41実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4・1/3・2/3)	9
第8図	SK01~08実測図 (1/40)	10
第9図	SK02出土遺物実測図 (1/4)	11
第10図	SD35・39土層図 (1/40) およびSD28・33・35・39出土遺物実測図 (1/4)	12
第11図	SP出土遺物 (1/4)	13
第12図	第3次調査下面遺構配置図 (1/300)	14
第13図	SC64実測図 (1/60)	15
第14図	SC78実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)	16
第15図	SC64・78出土遺物実測図 (1/4・1/3)	17
第16図	SB58・77実測図 (1/100・1/40) および出土遺物実測図 (1/4)	18
第17図	SK42~45実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/3)	19
第18図	SK46・47・48実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/3)	22
第19図	SK49実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/4)	23
第20図	SK50・51実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4)	24
第21図	SK52~55実測図 (1/20・1/40) および出土遺物実測図 (1/4)	25
第22図	SK56・57実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)	27
第23図	SK59実測図 (1/40)	28
第24図	SK59出土遺物実測図① (1/4)	29
第25図	SK59出土遺物実測図② (1/3・2/3)	30
第26図	SK60・61・63実測図 (1/20・1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/2)	32
第27図	SK65実測図 (1/20)	34
第28図	SK65出土遺物実測図① (1/4)	35
第29図	SK65出土遺物実測図② (1/4)	36
第30図	SK67・73・74・75・80・81実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4)	38
第31図	SD66土層図 (1/40) およびSD出土遺物実測図 (1/4)	40
第32図	SP出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2・2/3)	41
第33図	上層の包含層出土遺物実測図 (1/4)	42
第34図	下層の包含層出土遺物実測図① (1/4)	43
第35図	下層の包含層出土遺物実測図② (1/4)	44
第36図	下層の包含層出土遺物実測図③ (1/4)	46
第37図	下層の包含層出土遺物実測図④ (1/4)	47
第38図	下層の包含層出土遺物実測図⑤ (1/4)	48
第39図	下層の包含層出土遺物実測図⑥ (1/4)	49
第40図	下層の包含層出土遺物実測図⑦ (1/4)	50
第41図	下層の包含層出土遺物実測図⑧ (1/4)	51

第42図	下層の包含層出土遺物実測図⑨ (1/2・2/3)	52
第43図	下層の包含層出土遺物実測図⑩ (2/3)	53
第44図	下層の包含層出土遺物実測図⑪ (1/3)	54
第45図	下層の包含層出土遺物実測図⑫ (1/3)	56
第46図	下層の包含層出土遺物実測図⑬ (1/3)	57
第47図	下層の包含層出土遺物実測図⑭ (1/3)	58
第48図	下層の包含層出土遺物実測図⑮ (1/3)	59
第49図	遺構変遷図	61
第50図	石器集中範囲図	63
第51図	第2次調査遺構配置図 (1/300)・調査区東壁土層図 (1/80)	65
第52図	SE04実測図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)	66
第53図	SE04出土遺物実測図② (1/8・1/4)	67
第54図	SE111実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	68
第55図	SD01土層図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3・1/2)	69
第56図	SD01出土遺物実測図② (1/2・1/3)	70
第57図	SD02土層図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)	71
第58図	SD03上層図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)	72
第59図	SD03出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/4)	73
第60図	SD05上層図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)	74
第61図	SD05出土遺物実測図② (1/3)	75
第62図	SD05出土遺物実測図③ (1/3)	76
第63図	SD05出土遺物実測図④ (1/3)	77
第64図	SD05出土遺物実測図⑤ (1/2)	78
第65図	SD05出土遺物実測図⑥ (1/4)	79
第66図	SD39・61・73・90・93土層図 (1/40) およびSD28・30・39・40出土遺物実測図 (1/3)	80
第67図	SD73・74・75出土遺物実測図 (1/3)	81
第68図	SD90・91・93・98・99出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/2)	82
第69図	SD101・104・113出土遺物実測図 (1/3・1/2)	85
第70図	SD101出土遺物実測図 (1/4)	86
第71図	SK11・17・21・25・31・32・35・36実測図(1/40)およびSK11・17・20・25出土遺物実測図(1/3・1/2)	88
第72図	SK38・41・45・48~52・57・60実測図 (1/40)	90
第73図	SK64~66・70~72実測図 (1/40) およびSK57・60・64~66・69~71・78・83・87・96出土遺物実測図 (1/3・1/1)	92
第74図	SK77・78・83・87・96・103実測図 (1/40)	93
第75図	SP出土遺物実測図① (1/3)	95
第76図	SP出土遺物実測図② (1/3)	96
第77図	SP出土遺物実測図③ (1/2・1/1)	97
第78図	SP1371実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)	98
第79図	北側包含層出土遺物実測図 (1/3・1/2)	99
第80図	包含層出土遺物実測図① (1/3)	100
第81図	包含層出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)	101
第82図	その他の出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)	102
第83図	中世遺構配置図 (1/400)	104

図版目次

下山門敷町遺跡第3次調査図版

- 図版1 (1)上面調査区全景(東から)
図版2 (1)SK01~08(北から)
(3)SC41(北西から)
- 図版3 (1)SK01(西から)
(3)SK03(東から)
(5)SK06・07(北から)
- 図版4 (1)SD22~26(北から)
(3)SD30~32(北東から)
(5)SD35(北から)
- 図版5 (1)下面調査区全景(東から)
- 図版6 (1)SC64(西から)
(3)SC78-1(南から)
- 図版7 (1)SB58(北から)
(3)SK42(北から)
(5)SK44(南から)
- 図版8 (1)SK46(南から)
(3)SK48(東から)
(5)SK51(北から)
- 図版9 (1)SK49(東から)
- 図版10 (1)SK54(南から)
(3)SK56(南から)
(5)SK63(南から)
- 図版11 (1)SK59(北西から)
- 図版12 (1)SK60(北から)
(3)SK60海綿出土状況(北東から)
- 図版13 (1)SK65(南東から)
- 図版14 (1)SK73(東から)
(3)SK75(西から)
(5)SD72(北から)
- 図版15 出土遺物Ⅰ
- 図版16 出土遺物Ⅱ
- 図版17 出土遺物Ⅲ
- 図版18 出土遺物Ⅳ
- 図版19 出土遺物Ⅴ
- 図版20 出土遺物Ⅵ
- 図版21 出土遺物Ⅶ
- (2)上面調査区西側全景(北東から)
(2)SC41炭化物出土状況(東から)
(2)SK02(西から)
(4)SK04・05(北から)
(6)SK08(北から)
(2)SD28(北東から)
(4)SD33(北東から)
(6)SD39(北から)
(2)下面調査区中央全景(東から)
(2)SC78(北から)
(4)SC78-2-1(南から)
(2)SB77(北西から)
(4)SK43(西から)
(6)SK45・52(南から)
(2)SK47(北東から)
(4)SK50(南から)
(6)SK53(東から)
(2)SK49遺物出土状況(西から)
(2)SK55(南から)
(4)SK57(北から)
(6)SK67(東から)
(2)SK59遺物出土状況(南から)
(2)SK61(南から)
(4)SK61管玉出土状況(南から)
(2)SK65(北東から)
(2)SK74(北から)
(4)SK74・75・80・81周辺(北から)
(6)SD72付近足跡出土状況(北から)

下山門乙女田遺跡第2次調査図版

- | | | |
|------|-------------------------|----------------------|
| 図版22 | (1)調査区全景 (南から) | (2)調査区全景 (東から) |
| 図版23 | (1)調査区東側全景 (南から) | (2)調査区中央東側全景 (南から) |
| | (3)調査区中央西側全景 (南から) | (4)調査区西側全景 (南東から) |
| | (5)SE04 (北から) | (6)SE111 (南から) |
| 図版24 | (1)SD01・02全景 (南から) | (2)SD02土層 (南から) |
| | (3)SD01下駄出土状況 (北から) | |
| 図版25 | (1)SD03遺物出土状況 (東から) | (2)SD03 (東から) |
| | (3)SD03遺物出土状況 (北から) | |
| 図版26 | (1)SD05 (南東から) | (2)SD05遺物出土状況 (北から) |
| | (3)SD39 (南から) | |
| 図版27 | (1)SD73 (東から) | (2)SD90 (南から) |
| | (3)SD93 (南から) | (4)SD90土層 (南から) |
| | (5)SD101 (東から) | (6)SD112 (北から) |
| 図版28 | (1)SK66 (東から) | (2)SK71 (西から) |
| | (3)SK72・91・96・97 (北西から) | (4)SK77 (北から) |
| | (5)SK72 (北から) | (6)SK91・96・97 (東から) |
| 図版29 | (1)SP1042 (北から) | (2)SP1305柱出土状況 (西から) |
| | (3)SP1371土層 (西から) | (4)SP1371 (西から) |
| | (5)SP1336 (南から) | (6)北側包含層出土漆器碗 (西から) |
| 図版30 | 出土遺物 I | |
| 図版31 | 出土遺物 II | |
| 図版32 | 出土遺物 III | |
| 図版33 | 出土遺物 IV | |
| 図版34 | 出土遺物 V | |

表目次

石器組成一覧表 63

付図目次

下山門乙女田遺跡第2次調査遺構配置図

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1999年5月26日、土斐崎泰浩氏より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に西区下山門3丁目470外（面積：11,685㎡）における分譲マンション建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では、1999年6月7日に試掘調査を行った。その結果、溝・土坑・ピットが検出され、弥生時代の遺物を含む包含層を確認した。その後、両者で協議を行った結果、建物建築部分の2,220㎡を対象として記録保存のための発掘調査を実施することとなった。下山門敷町遺跡第3次調査は1999年11月8日より2000年1月7日まで、下山門乙女田遺跡第2次調査は2000年1月6日より同年2月26日まで行った。

2. 調査の組織

調査委託：新栄住宅株式会社

調査主体：福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括：埋蔵文化財課長 山崎純男

同課第1係長 山口譲治

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

事前審査：同課事前審査係長 田中壽夫

同係文化財主事 宮井善郎 中村啓太郎 屋山洋

調査担当：同課調査第1係文化財主事 星野恵美

調査補助：名取さつき

調査作業：井上紀世子 倉光アヤ子 倉光京子 栗木和子 小柳和子 辻節子 鍋山千鶴子

二谷朗子 森山早苗 結城千賀子 和田裕見子 網田美代野 平田政子 林チセ子

林末孝 平野義光 阿比留治 檜崎耕助 坂木隆二 網田昭雄 細川虎男

松本順子 古庄孝子 井上ヒデ子

整理作業：松田弘子 柴田加津子 萩本恵子 日名子節子 馬場イツ子 樋口勝子 樋口三恵子

調査協力：比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで新栄住宅株式会社をはじめとして多数の関係者の皆様に多大なご理解とご協力を賜りまして、ここに謝意を表します。

II. 遺跡の立地と環境

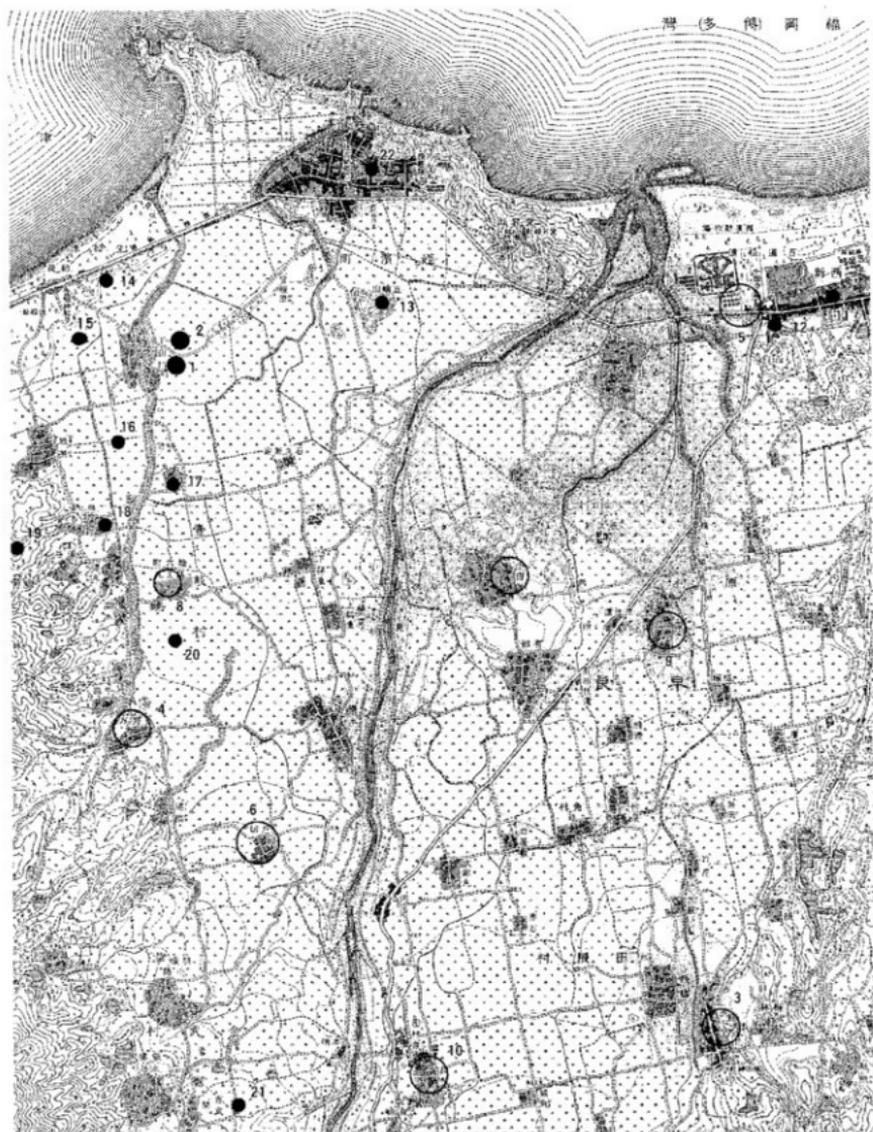
遺跡の位置する早良平野は福岡市の南西部に当たり、東側を平尾丘陵、南側を背振山系、西側を背振山から派生した叶ヶ岳に囲まれる。北は博多湾に面し、平野の中央には室見川が貫流する。平野内には幾つかの洪積地も点在するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。また、室見川の河口には愛宕山、原山等の第三紀の独立丘陵が存在する。一方、海岸部には湾内の海流作用によって、生の松原、百道浜等の弓状の砂丘が形成される。砂丘の南側は古代においてはラグーンをなしていたと考えられる。

下山門敷町遺跡・下山門乙女田遺跡は早良平野の西北、生の松原海岸から1km程南に入った沖積地に立地する。名柄川と十朗川に挟まれた標高2.5m前後の平坦地に位置する。十朗川東岸の幅60～100mの自然堤防上に営まれた遺跡である。遺跡の周辺は、従来水田地帯であり、地図(第1図)からも名柄川と十朗川に挟まれた地域一帯が水田であったことが伺える。水田であった当時は降雨の度に冠水するという低湿地帯であった。このため、シルト、砂混じりの粘土、砂及び礫混じりの砂層が堆積している。遺構はこの沖積地上に営まれている。

周辺の遺跡を概観すると、旧石器、縄文時代の遺跡は山麓や洪積地地上に立地する吉武遺跡群、有田遺跡群で遺物が発見されている。縄文時代晩期になると、中・下流域の微高地上に遺跡は進出し、弥生時代になると海岸部まで進出する。前期では有田遺跡群で環壕集落が確認され、前期後半から中期にかけては吉武高木遺跡を中心として有田遺跡群、藤崎遺跡、西新町遺跡などの拠点集落遺跡が分布する。拾六町周辺では宮の前遺跡、野方中原遺跡で墳墓が築造される。下山門敷町遺跡で中期の遺物が、拾六町ツイジ遺跡、湯納遺跡、牟多田遺跡では農業活動を中心とした集落遺跡が確認されている。古墳時代になると、平野部全体に集落は展開し、海岸部の遺跡では漁撈・製塩、山麓部では製鉄関係の遺跡が出現する。また、海岸部(五島山古墳、藤崎方形周溝墓)、山麓部には古墳群も築造される。歴史時代になると、平野部には条里制が施行され、早良郡が置かれる。倭名類聚抄によれば、早良郡に六郷が存在し、伊郷(桶井川村)、能解郷(野芥)、額田郷(野方)、早良郷(龜原)、平群郷(戸切)、田部郷(小田部)がそれである。下山門は額田郷の中に含まれると考えられる。郡衙の所在地は確認されていないが、有田遺跡では官衙が規模の大型建物が見つまっている。寺院としては北西側の丘陵裾部に城の原廣寺・古瓦窯址の斜ヶ浦瓦窯址などがある。下山門敷町遺跡は掘立柱建物12棟を有した製鉄関係の遺跡である。対岸の下山門遺跡、南側の石丸古川遺跡からは越州窯系青磁が出土している。中世以降においては山門庄として文献に見ることが出来る。青木文書は南北朝期の観應参年～明治期に及ぶ史料である。そこからは下山門は中世期において生松原、十六丁(拾六町)とともに山門庄に属していることが伺える。青木氏は生松原十二所権現の大宮司であり、この関係上、武士的活動を示す史料は少なく、量的に多いのは社領の寄進・安堵・相論の史料である。そこには筑前における大内支配の実体を示すものが残っている。大内氏支配下における対農民政策の過酷な実体が如実に伺えるとともに、それに対して、百姓は惣的結合を背景に抵抗していたことがうかがえる。また、当庄には公事を決定しうる有力農民が存在したことが分かる。南側には100a四方を土塁で囲んだ一丁屋敷跡が含まれる拾六町亀田遺跡、東側の有田遺跡群では戦国時代の小田部城跡、居館跡が確認された原遺跡が立地する。

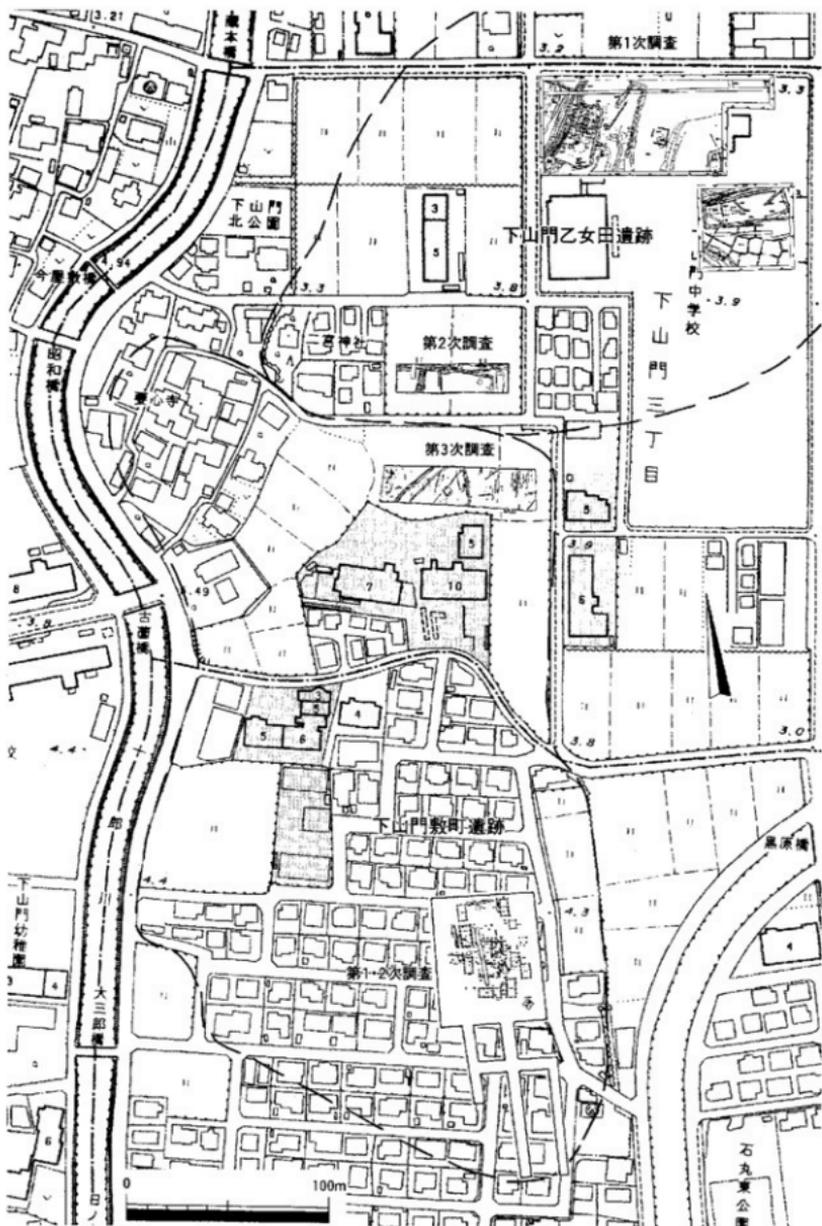
福岡市教育委員会「青木文書」『下山門遺跡』1973年

福岡市教育委員会「下山門乙女田遺跡」1987年



- | | | | | | |
|------------|-------------|----------|-------------|-----------|-----------|
| 1 下山門魚町遺跡 | 5 早良區 (龜原) | 9 津遺跡 | 13 五原山古墳 | 17 石丸古川遺跡 | 21 宮武高木遺跡 |
| 2 下山門乙女田遺跡 | 6 野崎 (戸切) | 10 田村遺跡 | 14 生地区遺跡 | 18 深崎遺跡 | 22 須崎遺跡 |
| 3 鹿嶋區 (野下) | 7 田原區 (小田原) | 11 西新町遺跡 | 15 下山門遺跡 | 19 宮ノ原遺跡 | |
| 4 鶴田區 (野方) | 8 松六町魚田遺跡 | 12 藤崎遺跡 | 16 松六町ツヅシ遺跡 | 20 半多田遺跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)



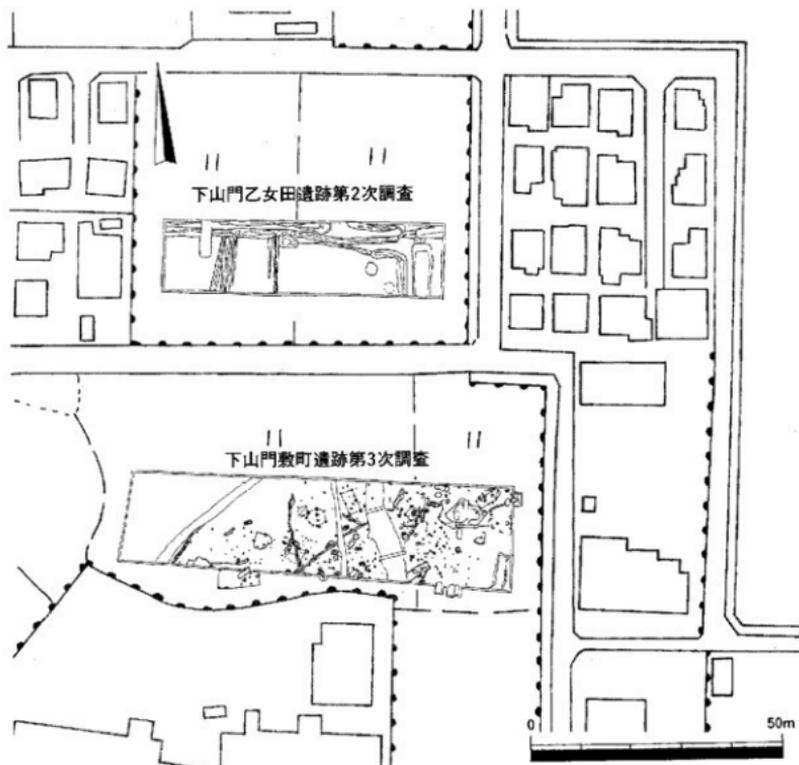
第2図 下山門敷町遺跡・乙女田遺跡位置図(1/2,500)

○試掘調査地点

今回の調査では下山門敷町遺跡の北限と下山門乙女田遺跡の南限を確認した。これまでの遺跡分布範囲を拡大することとなった。下山門敷町遺跡では遺跡範囲が東に延びる。しかし、調査区から15m東の地点では試掘調査で、縄文土器片、黒曜石片が出土し、ピットが散見できる程で遺構のまともりは確認されていない。ここに遺跡の東限をみることができる。また、第1・2次調査区との間は試掘調査が行われ、河川の堆積層で、遺構、遺物は検出されていない。

下山門乙女田遺跡に関しては、ほぼ倍の面積に遺跡範囲は拡大した。第1次調査では12～16世紀の遺物が出土し、遺構の中心は14世紀後半～16世紀前半である。今回の第2次調査においてもほぼこれを踏襲している。調査区の北側でも試掘調査でピットが確認されている。これまで水田、集落跡が確認されたが、今回の調査で居館的な遺構を検出した。

下山門敷町遺跡第3次調査地点と下山門乙女田遺跡第2次調査地点は35m程しか離れていないが、全く別の様相を呈している。乙女田遺跡で検出した中世の検出面は標高2.7mである。敷町遺跡でも中世の墓壇と考えられる土坑を検出したが、検出面の標高は2.8mである。また、敷町遺跡で大量に出土した弥生時代の遺物が乙女田遺跡においては散見する程度であり、これは当時の自然環境に由来するものと考えられる。



第3図 下山門敷町遺跡第3次調査・乙女田遺跡第2次調査位置図 (1/1,000)

Ⅲ. 下山門敷町遺跡第3次調査の記録

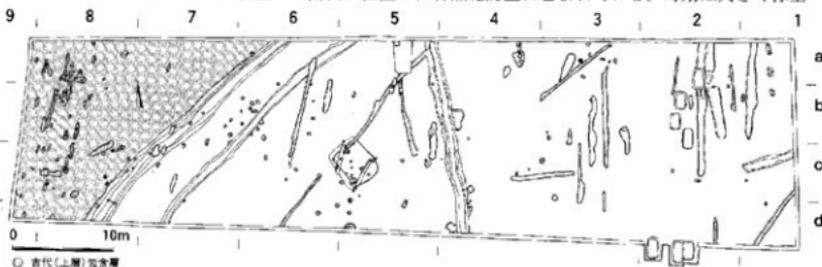
1. 調査の概要

第3次調査地点は下山門敷町遺跡の最も北側に位置し、調査前の標高は3.2mを測る。現況は水田であった。遺構面は2面あり、上面で中世から古墳時代、下面で弥生時代の遺構を確認した。遺構面は南東から北西方向に緩く傾斜している。標高は上面で南東側が2.8m、北東側が2.6mを測る。下面で南東側が2.75m、北東側が2.25mを測る。西壁の層序(第5図)からは、表土の下に床土、灰オリブ色の耕作土、床土と何度も耕作した痕跡がみられる。その下に厚さ20cmの古代の包含層が堆積する。古代の包含層は調査区の標高が低くなっている北西隅の一角に堆積する。SD35より西側、7a~8dにかけてである。古代の包含層の下には、にぶい黄色シルト・暗灰黄色粘質土を呈する厚さ30cmの弥生時代前期から中期の包含層がある。弥生時代の包含層は全面に堆積するが、遺物量は東側が多い。中世から古墳時代の遺構は弥生時代の包含層の上面から掘り込んでいる。弥生時代の包含層を除去すると弥生時代の遺構面を確認できる。弥生時代の遺構面はシルト・砂・粘質土からなる河川堆積土である。この面では部分的に坑・足跡が確認できる。包含層の遺物は東西10m、南北6mのグリッドを組んで取り上げた。東から西へ1~9、北から南へa~dとし、1a、3c、8bと設定した。上面で確認した遺構は中世の臺と考えられる土坑8基、古墳時代前期の竪穴住居1軒、溝・土坑・ピットである。下面では上面の掘り残しと考えられる古墳時代の土坑1基、溝1条、それ以外はすべて弥生時代前期から中期のものである。円形の竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、貯蔵穴等の土坑28基、溝、ピットを確認した。下面の調査で中央に南北に走る幅約4.5mの溝(SD66)を検出した。粗砂・粘質土・シルトの互層で形成されており、70cm程掘削したが、流木はみられるものの遺物はほとんど出土しなかった。土層からも自然河川と判断し、掘削を終了した。

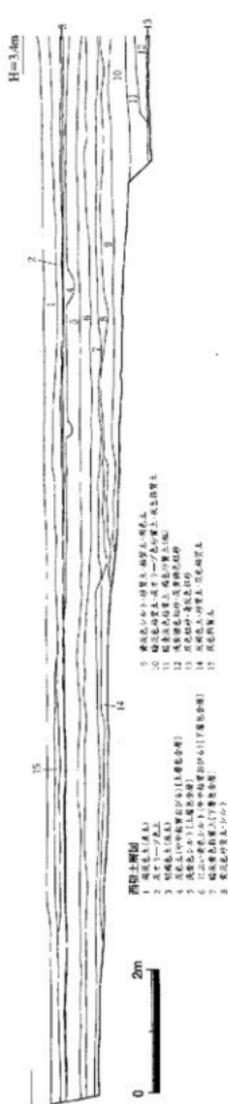
調査は平成11年11月8日に、重機による表土剥ぎ作業を開始した。上面の調査を終了後、調査区中央にトンチを設定し、弥生の包含層を掘削した。東から西にかけて徐々に遺物量が減少していたこと、時間の制約もあり、西側部分は重機、東側は人力による掘削を行った。包含層掘削後、下面の調査を行い、深い遺構を重機で埋め戻して平成12年1月7日に調査を終了した。

下山門敷町遺跡は今回が第3次調査である。第1次調査は1974年、第2次調査は1975年4月~5月に行われた。第1次調査区は第2次調査区の西側の建物部分である。第2次調査では、第1次調査で確認した建物部分を拡張して調査を行っている。第1次調査は記録が残っていないため、詳細は不明である。第2次調査においては弥生時代中期、奈良~平安時代にかけての遺物、遺構を確認している。

第1・2次調査区は第3次調査区の南側に位置し、自然堤防上に営まれている。時期は大きく弥生



第4図 調査区概略図 (1/500)



第5図 調査区西壘土層図 (1/80)

時代と古代に分けられ、2面が確認されている。上層の古代の面は製鉄に関係した官衙の一部と推定されている。古代の遺構面は弥生時代の包含層上の砂混じりの土層から掘り込み、建物、井戸、溝、溝が検出される。建物はすべて掘立柱で、東西40m、南北60mの範囲に12棟がまわっている。3度の立て替えがあり、建物の方向はほぼ東西・南北を示している。桁行が南北方向に向く建物が多く、東西棟は1棟にすぎない。各期の建物の配列に一定制はなく、中庭を挟んで東西に南北棟が向かい合う。中庭には井戸と平行する溝3条があり、この溝からは鉄滓の塊が出土している。Ⅱ期以降の建物の柱穴やその周囲からは多量の鉄滓、炉壁、フイゴなどの製鉄関係の遺物が出土する。調査で砂鉄を原料として洗鉄を採る製鐵が行われていたと考えられる。奈良～平安時代の須恵器、土師器、墨書銘のある須恵器、緑釉陶器が出土している。下層の弥生時代では調査区全体に黒色土層が堆積し、この層に弥生時代中期後半の遺物が多量に含まれていた。包含層を掘り下げていないため、明確な遺構は検出されていない。遺物は赤色顔料を施された広口壺、甕、高杯等が多く認められる。調査区南東端ではブルドーザーで表土を剥いだ際に、青銅器の中広式銅戈が3本出土している。銅戈についての詳細な報告は福岡市博物館研究紀要第十号でなされている。他に試掘トレンチ、包含層中からは古墳時代初頭の布留壺、小型丸底壺、滑石製の有孔円盤、めのう製の勾玉1点が出土している。

注1) 柳沢一男「下山門敷町遺跡」『緊急発掘された遺跡と遺物』1977年

注2) 常松幹雄「福岡市下山門敷町遺跡出土の銅戈について」

『福岡市博物館研究紀要第十号』2000年

2. 上面の調査記録

1) 上面の調査概要

弥生時代の包含層の上面で確認した。大きく削平され、遺構の遺存状況は悪い。主な遺構は古墳時代前期の堅穴住居1軒、溝1条、古墳時代後期の溝、古代の溝、中世の墓と考えられる土坑8基、溝を検出した。西側の短く途切れた溝は水田耕作に關係する溝と考えられる。ほとんど全ての遺構に弥生時代の土器片、石器片が混入する。

2) 遺構と遺物

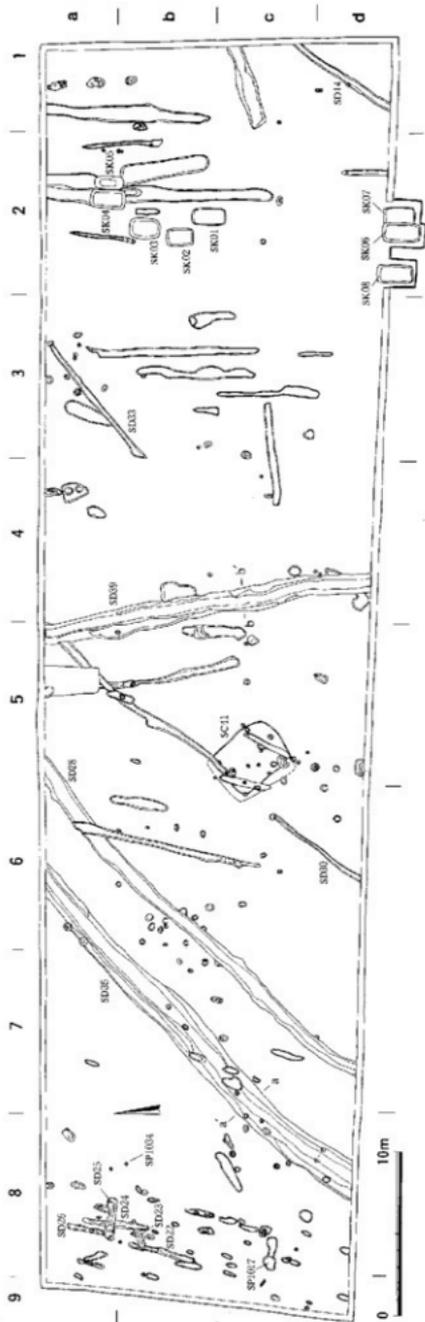
① 竪穴住居

SC41 (第7図、図版2)

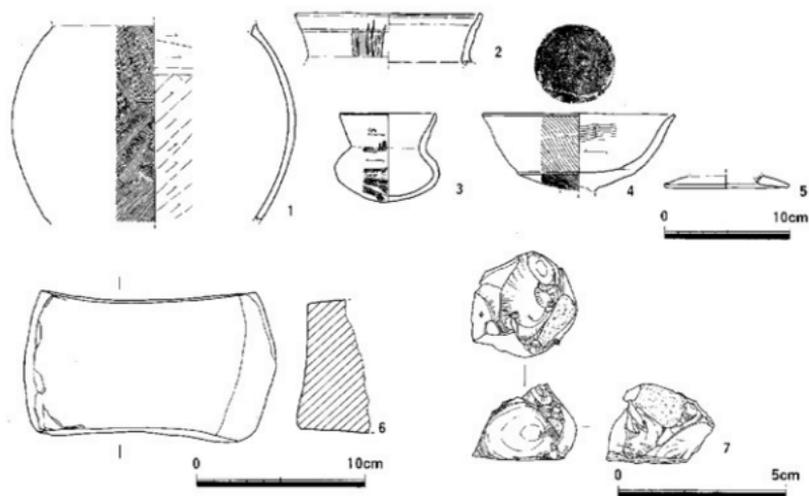
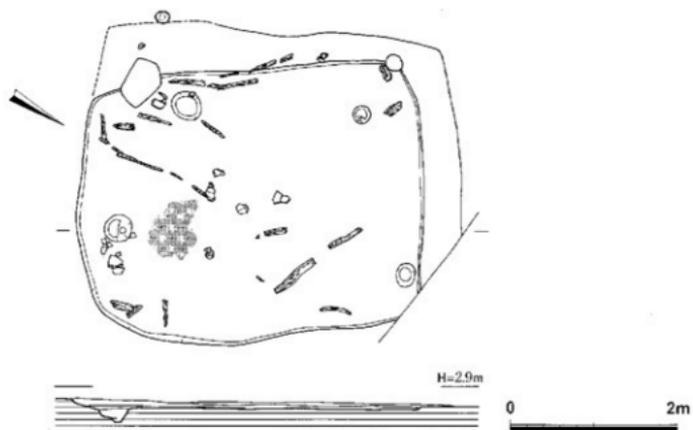
調査区のほぼ中央に位置する方形プランの竪穴住居である。北側を竪穴住居と認識できず、トレンチで一部破壊した。床面には炭化材、木炭がみられ、床面は東西3m、南北4m、壁の残存高は約10cmと確認できた。それに付設するベット遺構は北側と西側では確認できた。削りだして造ったと考えられる。床面で検出した柱痕は不揃いで深さにばらつきがある。中央土坑、周溝等は確認できなかった。

出土遺物 (第7図、図版15)

1～5は土師器である。1は甕の胴部片である。体部は球形で最大胴部径が中位に位置する。外面は刷毛目、内面はケズリである。胎土には赤褐色粒・白色砂粒を多く含む。2は甕の口縁部片である。口径14.8cmを測り、口縁端部内面は強い横ナデが施される。内面には部分的にケズリもみられる。外面は横ナデをした後、部分的に刷毛目状の工具を縦方向に押し当てる。二次焼成を受け、黒色、にぶい黄橙色を呈するが、外面に一部橙色が残っている。金雲母を多く含む。3は小型丸底甕で口径7.7cm、器底7.1cmを測り、ほぼ完形である。偏球形の体部に頸部がしまり、口縁部は上方に引き延ばし端部は内湾する。口縁部は刷毛目の後、横ナデをしている。体部内面はヘラナデ、外面上半は刷毛目の後、横方向の細かい磨き、下半は刷毛目とナデで調整している。金雲母、白色砂粒をわずかに含み、にぶい黄橙色を呈している。4は高杯の坏部である。口径15.3cm、坏部高6.2cmを測り、口縁端部はわずかに外反する。外面上半は刷毛目の後、ナデを行い、下半は放射状に刷毛目を施している。内面も刷毛目の後ナデ調整を行う。5は高杯の脚部片である。復元底径10cmを測る。外面は研磨、内面はナデで調整している。赤褐色粒を含む。6は砂岩製の荒砥石である。熱を受け、一面欠損する。よく使用され、中央部は凹状に窪んでいる。7は黒曜石の石核である。原石は角礫

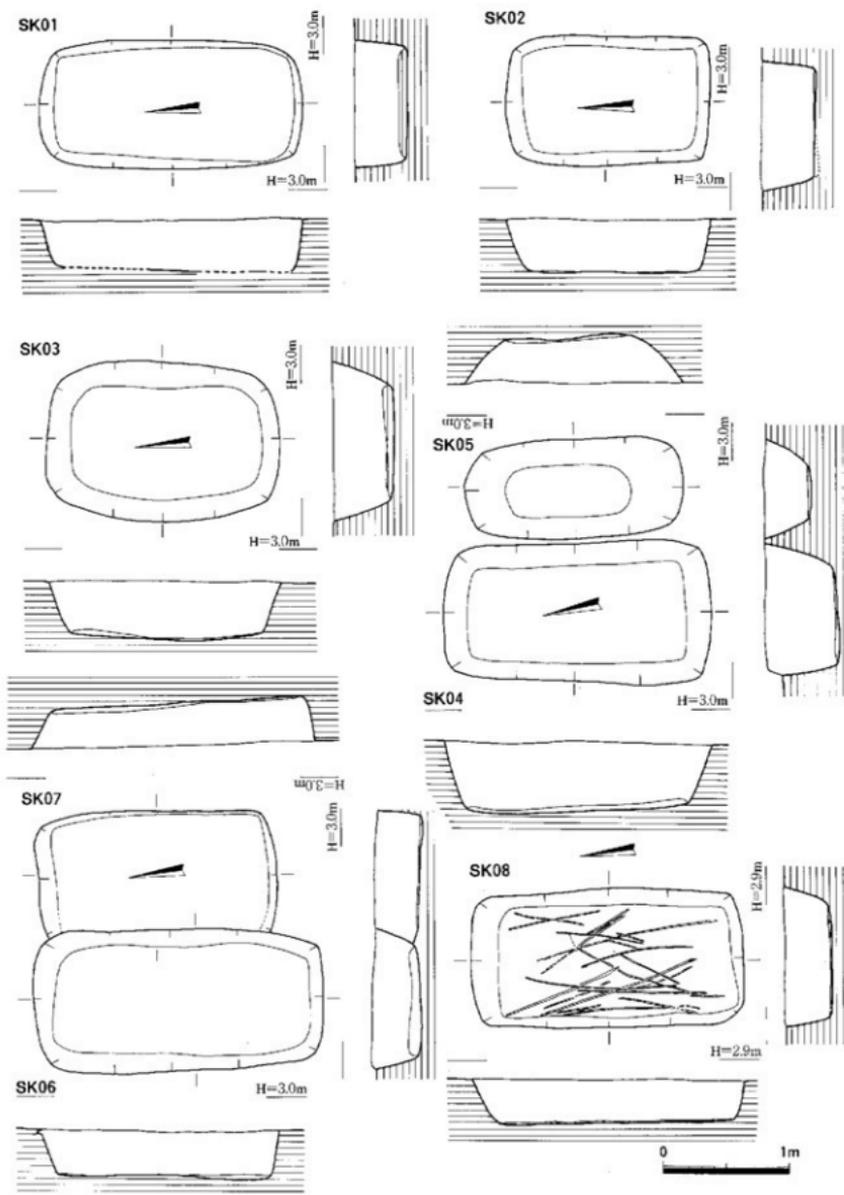


第6図 第3次調査上面遺構配置図 (1/300)



第7図 SC41実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4・1/3・2/3)

で、漆黒色を呈し、気泡が多い。不純物も多く含まれる。自然面は2ヶ所残り、剝離は様々な方向からおこなっている。リングは一部、丸味をもった同心円状を呈する。このような痕跡は通常の剝離技法からは見られないため、熱による剝離等が考えられる。



第8図 SK01~08実測図 (1/40)

②土坑

調査区東側に、南北方向に並んで8基長方形を呈する土坑を検出した。

SK01 (第8図、図版3)

8基のうち中央に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ2.1m、幅1.0m、深さ35~40cmを測る。やや南側が深くなる。

覆土は自然堆積ではなく、オリーブ灰色土・黒褐色土・茶褐色土・褐色土・灰色土がブロック状に堆積する。少量の木質がみられる。遺物は須恵器片が出土する。

SK02 (第8図、図版3)

SK01の北側に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.6m、幅1.0m、深さ42cmを測る。底面は水平である。覆土はSK01と同様、木質がみられる。遺物は白磁片が出土する。

出土遺物 (第9図)

8は白磁の小碗で、復元口径7.4cmを測る。口縁部は外反し、外面は片彫りが縦方向に入る。胎土は灰白色、釉調は半透明で、全体に貫入が入る。

SK03 (第8図、図版3)

SK02の北側に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.75m、幅1.3m、深さ45cmを測る。オリーブ灰色土・黒褐色土・茶褐色土・褐色土がブロック状に堆積し、木質がみられる。遺物は天目茶碗の小片が出土する。遺構検出時に出土した天目茶碗に類似している。

SK04 (第8図、図版3)

SK03の北側に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ2.1m、幅1.1m、深さ50~55cmを測る。暗褐色土・褐色土・灰色土がブロック状に堆積し、遺物は施釉陶器片が出土する。

SK05 (第8図、図版3)

SK04の東側に位置する。SK04との切り合いは現遺構面では不明である。平面プランは楕円形に近い隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅0.8m、深さ30~40cmを測る。底面は舟底を呈し、南側がやや低くなる。暗褐色土・褐色土・灰色土がブロック状に堆積し、青磁片が出土している。

SK06 (第8図、図版3)

調査区の最も南側で3基並んで検出した。SK07を切り、土壌群に時期差がわずかながらも存在することを窺わせる。平面プランは楕円形に近い隅丸長方形を呈し、長さ2.3m、幅1.1m、深さ38cmを測る。覆土はSK01と同様で、遺物は弥生土器片以外出土していない。

SK07 (第8図、図版3)

SK06の東側に位置し、SK06に切られる。平面プランは長方形を呈し、長さ1.9m、幅1m以上、深さ30~35cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層はオリーブ灰色土・黒褐色土・茶褐色土・黄褐色土がブロック状に、下層は少し砂質を帯びた土が堆積する。遺物は須恵器片が出土している。

SK08 (第8図、図版3)

SK06の西側に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ2.15m、幅1.1m、深さ35cmを測る。暗褐色土・褐色土・灰色土がブロック状に堆積する。底には樹皮が敷き詰められ、その上に枝がしがらみ状に置かれる。遺物は青磁片が出土する。

③溝

南北方向に多くの溝を検出した。溝の方向と規模から2時期に大きく分類できると考えられる。北



第9図 SK02出土遺物実測図(1/4)

SD28



SD33



10



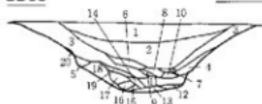
11



12

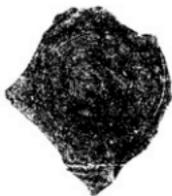
SD35

H=2.9m

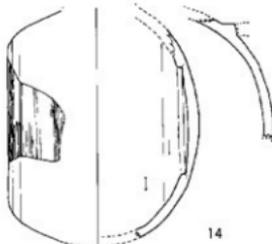


SD35

- 1 灰白・黄褐色土(埴輪類多い)
- 2 灰黄色シルト
- 3 灰黄色シルト
- 4 黄褐色シルトに黄褐色土・灰褐色土混入
- 5 灰黄色シルト(中か詰まりがある)
- 6 灰黄色シルト
- 7 灰白色シルト
- 8 灰白色シルト
- 9 灰白色シルト
- 10 灰白色シルトに灰褐色土混入
- 11 灰白色シルト
- 12 灰白色シルト
- 13 黄褐色粘質土・灰白・黄褐色土(埴土)
- 14 灰白色シルト
- 15 灰白色シルト
- 16 灰白色シルト
- 17 黄褐色シルトに灰白・黄褐色土混入
- 18 黄褐色シルトに灰褐色土混入(埴土)
- 19 灰白色シルト
- 20 灰白色シルト



13

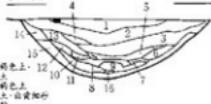


14



SD39

H=2.9m



SD39

- 1 灰白・黄褐色土・埴土
- 2 灰白・黄褐色土
- 3 灰白・黄褐色土
- 4 灰白色シルト
- 5 灰白色シルト
- 6 灰白色シルト
- 7 黄褐色シルトに灰褐色土混入
- 8 黄褐色シルトに灰褐色土混入
- 9 灰白色シルト
- 10 灰白色シルト
- 11 灰白色シルト
- 12 灰白色シルト
- 13 灰白色シルト
- 14 灰白色シルトに灰褐色土混入(埴土)
- 15 灰白色シルト



15

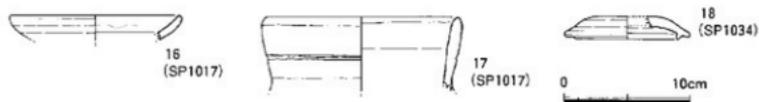


第10図 SD35・39上層図(1/40)およびSD28・33・35・39出土遺物実測図(1/4)

東方向から南西方向に走る深い溝とほぼ南北方向に走る浅い溝である。前者は遺物から古墳時代前期～古代、後者は中世である。古墳時代の溝に関してはSD39のみ方向が違い、北北西から南南東にかけて走っている。これは北東から南西に走るSD30を切っていることから少し時期が下ると考えられる。SD33の南側の続きは下面で検出した。SD70と同じ溝である。古墳時代から古代の溝は東側からSD14・33・30・28・35後出してSD39である。中世は灰黄色土・灰色土を覆土とし、深さが10cmにも満たない染み状のものである。特に西側の途切れ途切れの溝(SD22～26)は水田に関するものと考えられる。

SD28 (第6図、図版4)

調査区中央で検出した溝で北東から南西方向に走る。幅は北側で1.0m、南側でやや狭くなり、80cmを測る。深さ10～15cmを測る。灰黄白色土が堆積し、須恵器片が出土する。



第11図 SP出土遺物 (1/4)

出土遺物 (第10図)

9は須恵器の坏身である。復元口径10cmを測る。たちあがりは短く内傾し、端部は丸く仕上げている。受部は短く内傾し、端部は外反する。胎土は精良で灰色を呈し、焼成は良好である。

SD33 (第6図、図版4)

調査区の東側で検出した溝で北東から南西方向に走る。上面で検出できなかった南側部分を下面で検出した(SD70)。遺存状況は悪く、最も深いところで10cmである。覆土にはぶい黄褐色シルトを呈する。土師器の小型丸底甕10・11は北側部分で据わった状態で出土した。

出土遺物 (第10図、図版15)

10~12は小型丸底甕である。10は口径6.2cm、器高8.3cmを測る完形品である。偏球形の体部に頸部がしまり、口縁部は内傾気味に立ち上がり端部はわずかに外反する。体部上半・口縁部内外面には文様状に斜め方向の刷毛目を施し、体部下半は刷毛目、中位はケズリで調整する。底部近くに外向からの打ち欠きがある。金雲母・白色砂粒をわずかに含み、にぶい黄褐色を呈する。11は体部のみの遺存で、底部は平底を呈する。外面は刷毛目、内面上半はナデ、下半はケズリで調整する。赤褐色粒・金雲母・白色砂粒を含み、橙色を呈する。12は口径9.8cm、器高11.4cmを測る。器壁は10・11にくらべ薄い。口縁は短く内傾し、端部は丸く仕上げる。底部はわずかに平底状を呈する。口縁は横ナデ、一部磨きを施し、胴部外面は刷毛目、内面上半は横方向のケズリ、下半はナデで調整する。赤褐色粒・白色砂粒を含む。全体ににぶい黄褐色を呈するが、部分的に橙色である。内外面下半には黒斑がある。

SD35 (第10図、図版4)

調査区の西側で検出した溝で北東から南西方向に走る。幅は北側で1.4m、南側で2.1mを測り、深さは約60cmを測る。断面は2段掘り状になる。シルト・砂・粘質土の互層になっており、何度も水が流れては抉られた様相を呈する。須恵器・土師器片が出土している。

出土遺物 (第10図、図版15)

13は土師器の甕の口縁部片である。赤褐色粒・白色砂粒を多く含み、にぶい黄褐色を呈する。14は赤焼け須恵器の提瓶の破片である。体部は一方が丸く、一方が平坦な扁平な球体をなす。平坦な面全体に回転カキ目調整をおこなう。胎土には赤褐色粒・白色砂粒を含み、橙色を呈する。

SD39 (第10図、図版4)

調査区の中央で検出した溝で、ほぼ南北方向に走る。幅は1.2~1.5m、深さは約40cmを測る。部分的に段掘りとなり、SD35同様、シルト・砂・粘質土の互層である。須恵器・土師器片が出土する。

出土遺物 (第10図、図版15)

15は須恵器の坏身である。復元口径10.5cmを測る。たちあがりは短く引き延ばし丸く仕上げる。受部は短く内傾する。底部外面にはヘラ記号がある。胎土には白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。

④ピット出土遺物 (第11図)

80あまりのピットを検出したが、東側と西側の大半はしみ状のピットであった。16・17はSP1017出土である。16は白磁の皿で、復元口径10.2cmを測る。胎土は灰白色、釉調は縁がかかった灰白色を呈する。17は須恵器の口縁部片で、二次焼成を受けている。18はSP1034出土で、須恵器坏蓋の破片である。復元口径は8.1cmを測る。胎土は白色砂粒を多く含み、焼き膨れがみられる。

3. 下面の調査記録

1) 下面の調査概要 (第12図、図版5)

弥生時代の包含層の下面で確認した。上面同様削平され、遺構の遺存状況は悪い。弥生の包含層は、にぶい黄色シルト、暗灰黄色粘質土の2層で形成されている。一部上面のにぶい黄色シルトを掘削後、遺構検出をおこなった。ピットを確認し、幾つか掘り下げたが、暗灰黄色粘質土の下の地山までピットは掘削されていた。時間的な制約もあったため、下層の暗灰黄色粘質土も掘削した後、遺構検出をおこなった。下面の遺構は一部暗灰黄色粘質土からの掘削もあると考えられる。また、上面で検出できなかった遺構もこの面で確認している。遺構は調査区の中央部分に集中し、東側へと続く。主な遺構は竪穴住居2軒、掘立柱建物2棟、土坑27基、溝、ピットである。SD35より西側では下面の遺構は全くみられない。

2) 遺構と遺物

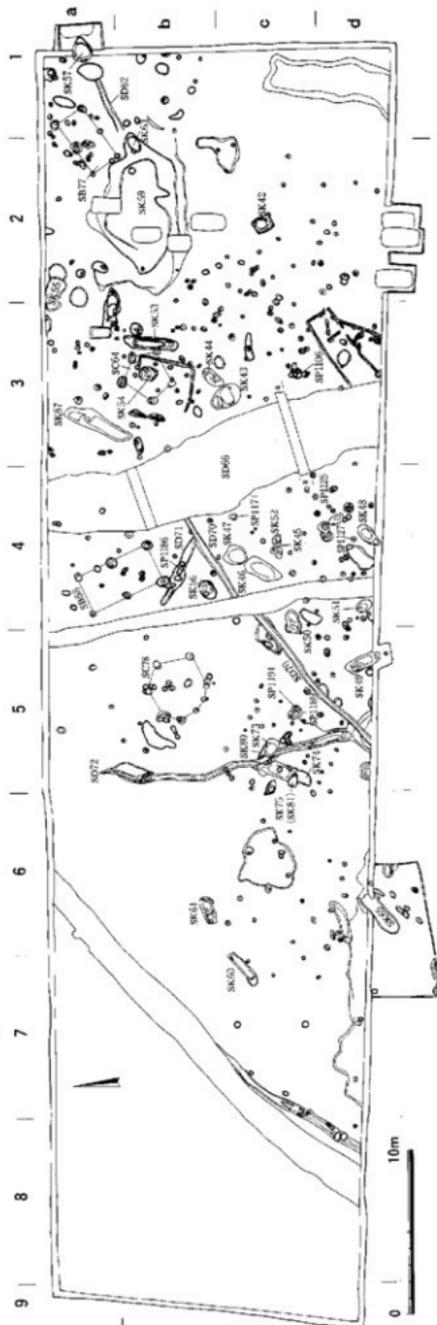
①竪穴住居

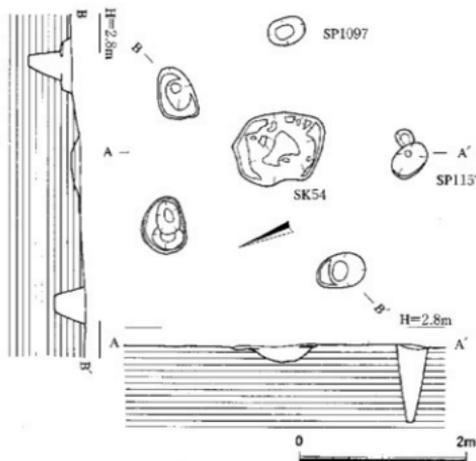
SC64 (第13図、図版6)

調査区東側に位置し、柱穴と中央土坑のみ遺存している弥生時代の円形住居である。削平され、床面は残っていない。柱は直径3mの円を描くように5本配される。柱穴の直径は35~70cm、深さ24~60cmを測る。柱穴間の直線距離は0.9~1.6mである。柱の1つからは灰オリーブ色粘質土をした柱痕跡を検出した。覆土は灰色シルト、にぶい黄褐色土である。中央に110×80cm、深さ18cmの隅丸方形に近い土坑 (SK54) が位置し、炭化物を少量含む。中から弥生時代中期の遺物が出土する。柱穴SP1157からは丹塗り壺の口縁部片、SP1097からは刻目突帯の甕の口縁部片も出土する。他は細片ばかりである。

出土遺物 (第15図)

22はSP1097から出土した。甕の口縁部片である。口縁は如意状に強く外反し、口唇部全体に刻目を施している。外面は刷毛目、内面は刷毛目の後ナデで調整する。明赤褐色を呈する。





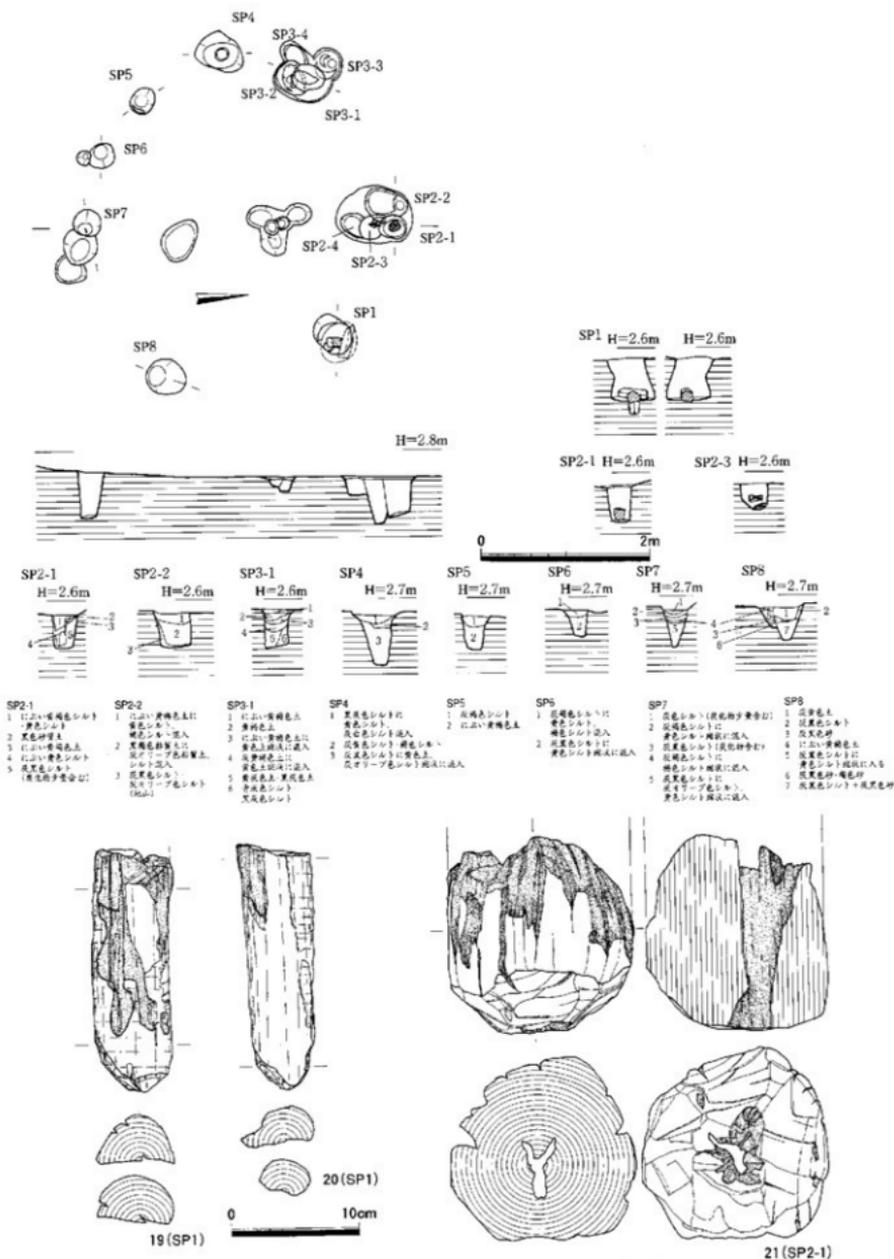
第13図 SC64実測図 (1/60)

SC78 (第14図、図版6)

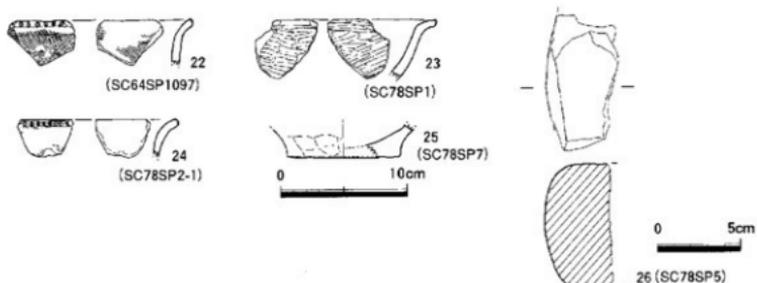
調査区中央に位置し、SC64同様、柱穴のみ遺存している弥生時代の円形住居である。削平され、床面は残っていない。中央付近には浅い窪み状のピットを検出したが中央土坑となるか不明である。柱は直径3.6~4mの円を描くように8本配されている。柱穴は切り合っていることから、立て替えが行われたと考えられる。柱穴の直径は25~60cm、深さ35~70cmを測る。SC64とくらべ、小振りである。柱穴間の直線距離は0.5~1.6mとまちまちであり、住居の建て替えに起因する。SP1・SP2-1には柱が、SP2-3・SP5・SP7には木質が遺存していた。切り合いからこれらの木質を出土するピットは、最も新しい柱穴群と考えられる。SP1は2本割材が出土した。1本はやや斜めに立ち、もう1本は支えるように横に寝ていた。2本の割材は1本の木を2分割したものである。柱は、掘方からも中央に傾いて立てられていたと考えられる。SP2-1は直径15cmの柱である。長さ16cm分遺存していた。上方は折れていたが、下方には面取りがある。覆土は灰色シルト・黄色シルト・にぶい黄褐色土を呈し、炭化物を少量含む。中から弥生時代前期・中期土器の小破片が出土している。実測可能な遺物は前期のものばかりであるが、中期の底部細片が1点出土している。砂岩製の荒砥、石包丁片、玄武岩片が出土している。

出土遺物 (第14・15図)

19~21は建築部材である。19・20はSP1出土である。共に割材で、19は立木、20は横木である。モチノキと思われ、一部樹皮が遺存している。端部は面取りして加工を行っている。同一部材を縦割半裁して用いる。19は残存長37.9cm、最大厚7.6cm、最大幅12.3cmである。20は残存長39.4cm、最大厚5.7cm、最大幅11.5cmである。21はSP2-1出土である。広葉樹で、芯持ち丸太材である。柱として使用され、根元だけ遺存していた。端部は面取り加工されている。残存長15.7cm、最大径14.6cmである。23はSP1出土の鉢の口縁部片である。浅めの鉢で、口縁は如意状を呈する。内外面ともに横方向の研磨調整で仕上げている。外面はにぶい黄褐色、内面は黒色を呈する。胎土に金雲母を含む。



第14図 SC78実測図 (1/60) および出土遺物実測図 (1/4)



第15図 SC 64・78出土遺物実測図 (1/4・1/3)

24はSP2-1出土で、甕の口縁部片である。口縁は如意状に強く外反し、口唇部全体に浅く刻目を施している。外面には刷毛目がわずかに残り、内面はナデで仕上げる。にぶい黄橙色を呈し、胎土に金雲母を含む。25はSP7出土の底部片である。復元底径9cmを測り、外面には強い横方向のナデを施す。23～25は金雲母を含み、25は赤褐色粒も含む。26はSP5出土で、砂岩製の砥石片である。側面はいずれも使用され、やや窪んでいる。二次焼成を受けている。

②掘立柱建物

SB58 (第16図、図版7)

調査区中央に位置し、2間×3間の側柱建物である。主軸方向をN-20°-Wにとる。梁行は全長4.6m、桁行は全長2.4mを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、直径35～85cm、深さ31～50cmを測る。いずれの柱穴も柱痕跡はなく、覆土は自然堆積の状況を呈している。弥生時代前期・中期の小破片が出土している。前期土器は混入の可能性がある。

出土遺物 (第16図)

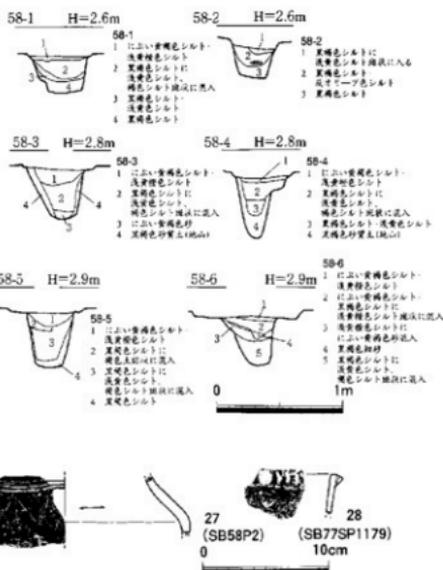
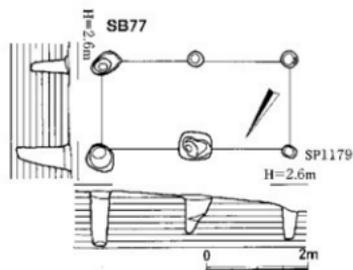
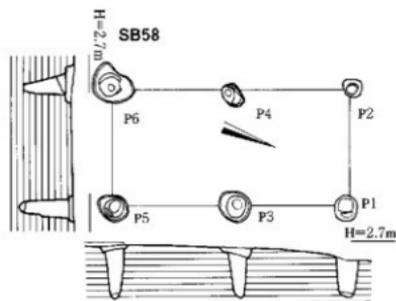
27はP2出土である。壺の胴部片で外面は粗い横方向の研磨、内面は横ナデをしている。肩部にはヘラ描きの沈線を3条巡らし、その下に斜方向、上下方向に3条づつ刻み、文様を描いている。最大胴部径は18cmを測る。にぶい黄橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。

SB77 (第16図、図版7)

調査区東側に位置し、2間×3間の側柱建物である。主軸方向をN-60°-Eにとる。梁行は全長3.7m、桁行は全長1.8mを測る。柱穴はほぼ円形を呈し、直径25～55cm、深さ27～43cmを測る。SP1179出土の前期の土器を除けば、小破片ばかりである。青磁片も出土しており、前期の土器も混入の可能性がある。

出土遺物 (第16図)

28はSP1179出土である。刻目突帯土器の甕の口縁部片である。突帯は断面三角形を呈し、付け根近くまで深く刻んでいる。内外面ともに横方向の板ナデで整形している。にぶい黄橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。



第16図 SB58・77実測図 (1/100・1/40) および出土遺物実測図 (1/4)

③土坑

SK42 (第17図、図版7)

調査区東側で検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.1m、幅1m、深さ42cmを測る。覆土は上から暗褐色土、黒褐色土、黒色粘質土、シルトの自然堆積である。遺物は弥生土器の小破片と叩き石、黒曜石片5点が出土している。

出土遺物 (第17図)

29は結晶質変成岩の叩き石の破片である。平滑な自然面の角を利用して叩いている。30は白色を呈する叩き石である。形態は略球状で、敲打痕が残る。重さは73.48gを測る。

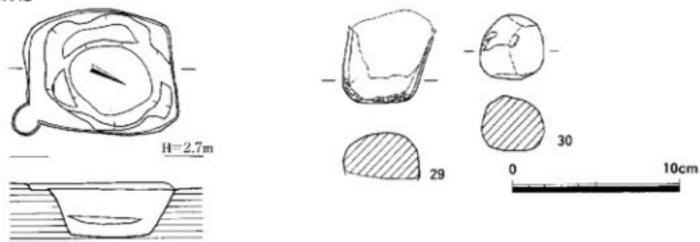
SK43 (第17図、図版7)

調査区中央で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.9m、幅1.3m、深さは最も深いところで20cmを測る。北側が一段高くなっている。覆土は上からにぶい黄褐色土、灰黄褐色土、黄色粘質土の自然堆積である。炭化物が多く混入している。遺物は弥生時代前期の土器が多く出土し、他に今山の玄武岩片、叩き石片、黒曜石片5点が出土する。

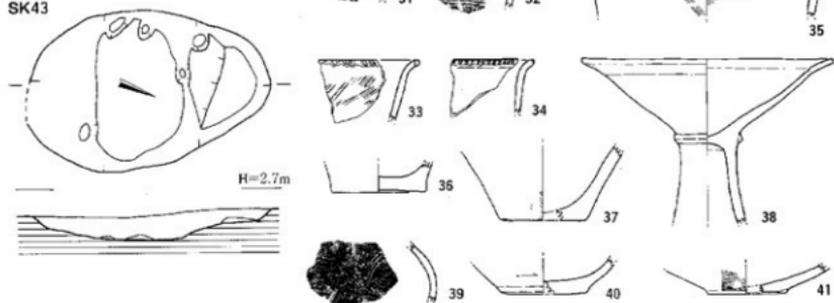
出土遺物 (第17図、図版15)

31~35は甕の口縁部片である。31・32は刻目突帯文土器で、31の口縁は直立し、端部はわずかに外反している。太めの突帯に比較的浅めの刻み目を施す。32の口縁は外傾し、突帯の刻みは付け根近くまで深く刻んでいる。ともに外面は条痕を横方向に、内面はナデを施している。色調は部分的に黒色、灰褐色を呈する。胎土には白色砂粒を多く含む。33~35は如意状を呈する口縁をもつ。35の復元口径は20cmを測る。33は深い刻み、34は浅く間隔の密な刻みを施す。33の外面は斜方向の板ナデ、内面はナデ、34は内外面ナデで調整している。35は刷毛目調整である。色調は33・34は灰褐色、35はにぶい

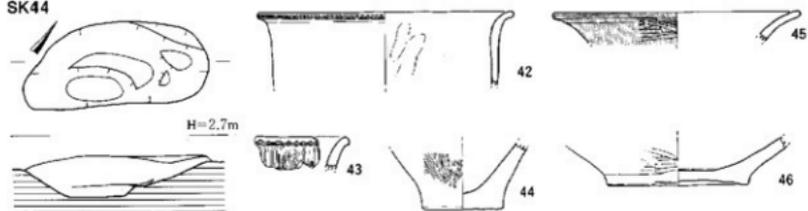
SK42



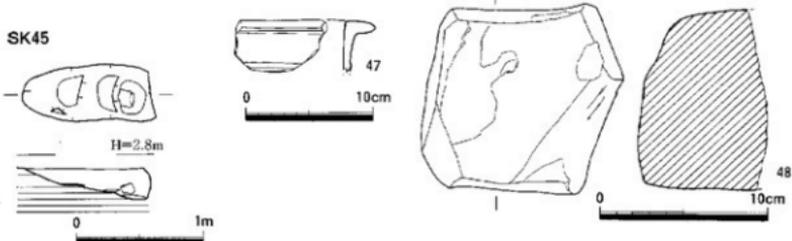
SK43



SK44



SK45



第17図 SK42~45実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/3)

橙色である。36・37は甕の底部である。36の外表面は磨減が著しいが条痕の痕跡がうかがえる。37はナデ調整である。36は灰黄褐色、37はにぶい橙色を呈する。33～37の胎土には角閃石、白色砂粒が多く入る。38は高坏で脚部が欠損している。坏部の復元口径は20cmを測る。口縁部が屈曲せず大きく開き、内面に粘土を追加して肥厚させている。細身の脚をもち、脚部と坏部の接合部に断面三角形の突帯を巡らす。白色砂粒を多く含み、内面は灰褐色、外面は灰黄褐色を呈する。39～41は壺である。39は壺の胴部片でヘラ描きの弧文を施している。外面は磨き、内面はナデで調整する。外面下半は黒色、上半は橙色、内面は灰褐色を呈している。胎土に細かい白色砂粒・金雲母を多く含む。40・41は底部片で外面は研磨、内面はナデ調整をしている。ともに白色砂粒を多く含み、41は大粒の赤褐色粒を含む。40は内外面ともに灰褐色、41の外面は灰褐色、内面は橙色を呈する。

SK44 (第17図、図版7)

調査区中央、SK43の北側で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.5m、幅0.66m、深さは最も深いところで32cmを測る。北東側が一段高くなっている。覆土は上から灰褐色土、黄灰色砂質土、黒色粘質土を呈し、自然堆積をしている。炭化物が混入する。遺物は弥生時代前期・中期の土器、石斧片、黒曜石片5点が出土している。

出土遺物 (第17図)

42～44は甕である。42の口縁は如意状を呈し、口縁端面に浅く間隔の密な刻みを施す。復元口径は20cmを測る。内外面ナデ、部分的に指押さえて調整し、灰褐色を呈する。胎土に白色砂粒、赤褐色粒、角閃石を大量に含む。43の口縁はわずかに外反し、大きく、深い刻みを施している。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整している。外面は灰褐色、内面はにぶい黄褐色を呈し、胎土に金雲母、角閃石、白色砂粒を含む。44は外面刷毛目、内面ナデで調整し、胎土に白色砂粒、赤褐色粒を多く含む。色調は橙色を呈し、外面はやや赤みを帯びる。45・46は甕である。45は口縁部片で復元口径19.6cmを測る。口縁は大きく開き、端部で外反する。内外面ともににぶい黄褐色を呈する。外面はほとんどはげ落ちているが、赤色顔料がみられる。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多く含む。46は底部片で底径11.2cmを測る。器面は剥落がひどいが、外面には一部研磨が残る。色調は明橙色を呈する。他に逆L字状口縁をもつ弥生時代中期の口縁部片が出土している。

SK45 (第17図、図版7)

調査区中央、SK52に切られている土坑である。平面プランは楕円形を呈し、現存長1m、幅45cm、最も深いところで25cmを測る。長軸方向の断面は階段状を呈している。最も深いところから砥石が出土している。他に弥生時代中期の土器片がある。

出土遺物 (第17図)

47は逆L字状口縁をもち、口縁部下に三角突帯を巡らせている。明橙色を呈し、胎土に赤褐色粒、白色砂粒を多く含む。48は、砂岩製の砥石片で、一部欠損している。6面砥面として使用され、中央部はやや窪んでいる。

SK46 (第18図、図版8)

調査区中央で検出した。平面プランは細長い楕円形を呈し、長さ2.35m、幅1.1m、深さ25cmを測る。床面は平坦である。覆土は上からにぶい黄褐色土、黒褐色土、黄色シルトを呈する。遺物は弥生時代前期の土器片が多く入る。床面近くから如意状口縁の甕が潰れた状態で出土した。石包丁、砥石、石斧片、今山の玄武岩片、黒曜石片64点が出土している。

出土遺物 (第18図、図版15)

49は刻目突帯文土器の甕の口縁部片である。口縁は直立しための突帯が付く。刻み目は浅いもの、

深いものとまちまちで、雑である。内面は板ナデ、外面は板ナデのちナデをおこなう。内外面ともににぶい橙色、灰褐色を呈する。胎土には赤褐色粒、白色砂粒を多く含む。50は如意状の口縁をもつ甕である。口径は23cmを測り、底部が欠損する。口縁端部に浅い刻み目が、間隔を密に入る。外面は斜方向の刷毛目、内面はナデで調整する。色調は黒色、灰褐色を呈し、胎土に多量の白色砂粒を含む。51～55は壺である。51は復元口径9cmを測り、口縁は緩やかに外反し、端部は粘土を外に折り返して整形している。内外面ともに研磨痕が残る。色調は黒色、にぶい橙色を呈し、胎土は細かい白色砂粒を含む。52は復元口径16cmを測る。頸部は緩やかに湾曲しながら立ち上がり、口縁部で外反する。内外面ともに研磨が施され、内面に一部刷毛目がみられる。浅橙色を呈し、胎土に金雲母を多量に含む。53は頸部と思われる。頸部と胴部の接合部に断面三角形の突帯を巡らす。内外面ともにナデ調整をする。にぶい橙色を呈し、胎土に赤褐色粒、角閃石、白色砂粒を多く含む。54・55は底部片である。55の底径は10.4cmを測り、外面は丁寧な研磨が施されている。内面はナデ調整である。色調は灰褐色、部分的に明橙色を呈する。白色砂粒を多く含む。55の外面は研磨、底面・内面はナデで調整している。内外面ともに浅橙色を呈し、白色砂粒、金雲母を多く含む。56は高坏の脚部片である。裾付近に1条の沈線を巡らす。外面は縦方向、横方向の研磨が細かく施され、光沢を帯びている。褐色を呈する。内面は刷毛目の後ナデで調整し、明褐色を呈する。胎土には金雲母、白色砂粒を含む。57は砂岩製の石包丁の未製品である。大型石包丁と思われる。背部は片方に磨いており、両刃を付している。穿孔が欠損部にみられ、両面穿孔を行っている。58は砂岩製の手持ち砥石である。撥の柄のような形態をしている。側面を使用する。

SK47 (第18図、図版8)

調査区中央、SK46のすぐ北東側で検出した。平面プランは略円形を呈し、直径1.1～1.25m、最も深いところで20cmを測る。床面はやや西側が高くなっている。覆土はにぶい黄褐色土、灰褐色土で、炭化物がわずかに入る。遺物は弥生時代前期の土器片と石斧、今山の玄武岩片が埋土の上層から出土している。

出土遺物 (第18図、図版16)

59は刻目突帯文土器の甕で、底部が欠損している。復元口径22cm、現存高22.5cmを測る。逆砲弾形の胴部に口縁がすばまる形態である。太めの突帯に、中位から根元付近まで刻みを施す。外面上方は横方向、下方は縦方向、内面は横方向の板ナデで調整する。外面は黒色、灰褐色、内面は灰黄褐色を呈する。白色砂粒を含む。60は結晶質片岩系の磨製石斧である。刃部は欠損している。上面、側面はよく研磨され、稜線が入る。

SK48 (第18図、図版8)

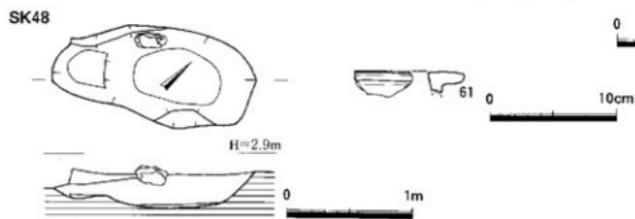
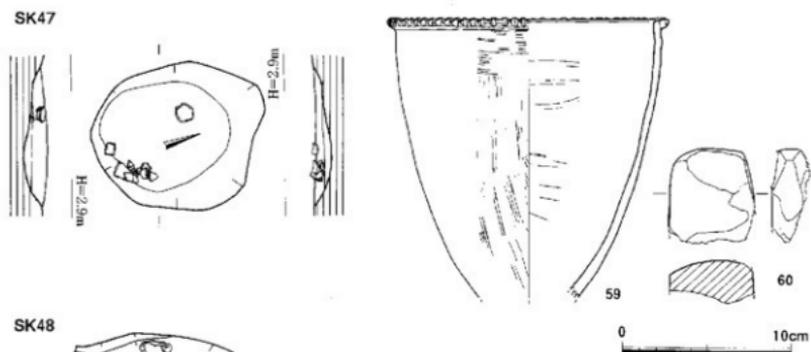
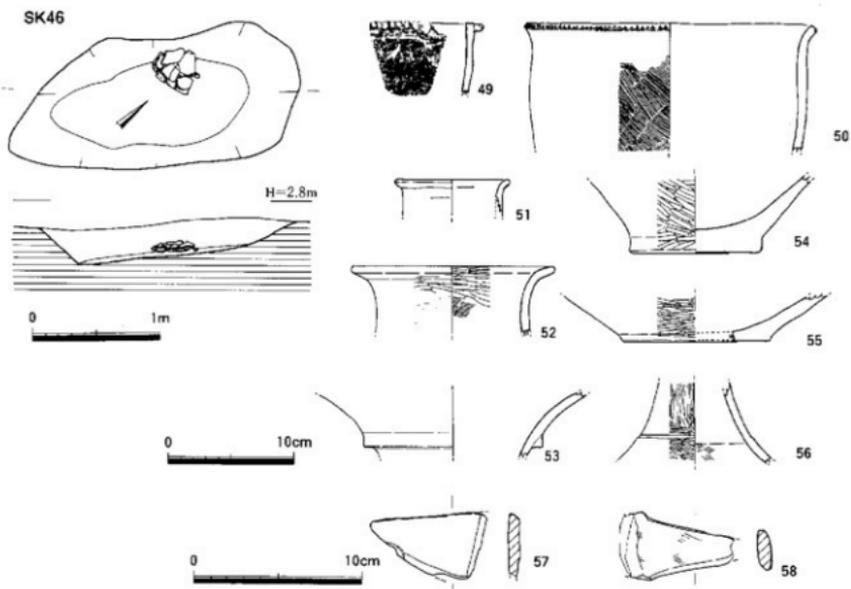
調査区中央南壁で検出した。平面プランは細長い楕円形を呈し、長さ1.6m、幅0.8m、深さ25cmを測る。床面は南東側が一段高くなっている。覆土は上からにぶい黄褐色土、灰色土、黒色シルトである。下層に炭化物が多量に入る。遺物は弥生時代の土器細片、叩き石、今山の玄武岩片、黒曜石原石1点が出土している。

出土遺物 (第18図)

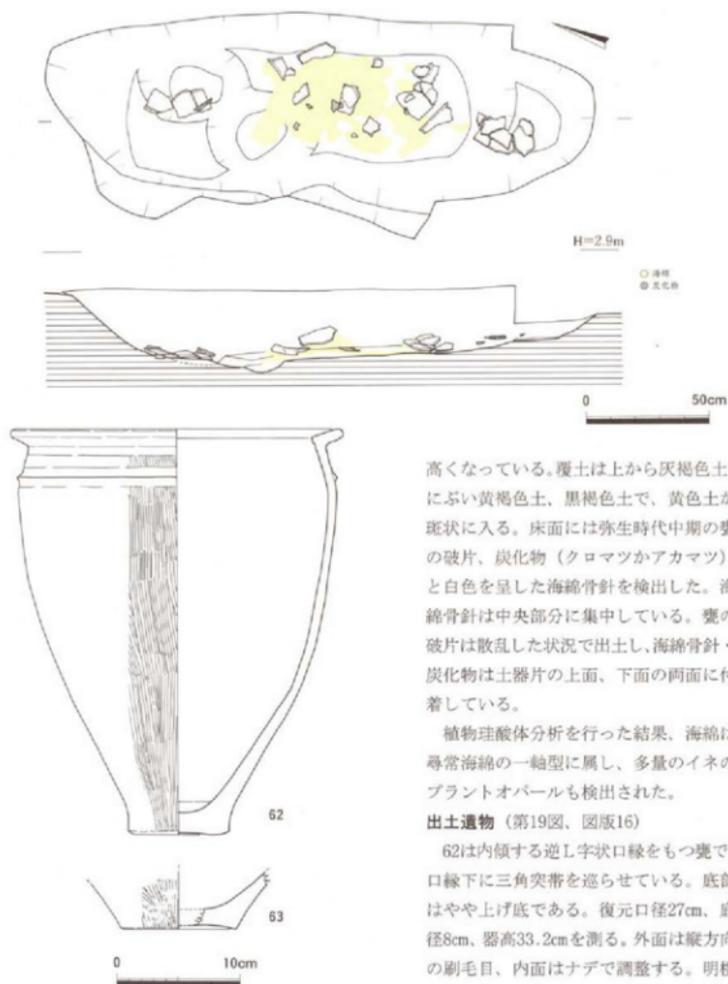
61は逆L字状の口縁をもつ甕の口縁部片である。明橙色を呈し、ナデで調整をする。細かい赤褐色粒、白色砂粒を含む。

SK49 (第19図、図版9)

調査区中央南側で検出し、一部調査区外に延びていたため遺構部分だけ拡張した。平面プランは細長い楕円形を呈し、長さ2.1m、幅0.75m、深さ27cmを測る。床面は舟底状を呈し、北側と南側が一段



第18図 SK46・47・48実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/3)



第19図 SK49実測図 (1/20)
および出土遺物実測図 (1/4)

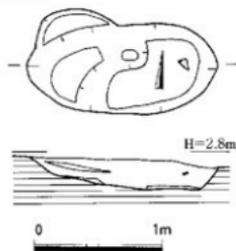
高くなっている。覆土は上から灰褐色土、にぶい黄褐色土、黒褐色土で、黄色土が斑状に入る。床面には弥生時代中期の甕の破片、炭化物（クロマツかアカマツ）と白色を呈した海綿骨針を検出した。海綿骨針は中央部分に集中している。甕の破片は散乱した状況で出土し、海綿骨針・炭化物は土器片の上面、下面の両面に付着している。

植物珪酸体分析を行った結果、海綿は尋常海綿の一軸型に属し、多量のイネのプラントオパールも検出された。

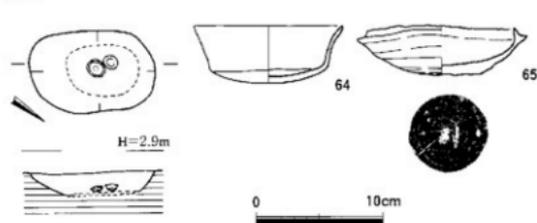
出土遺物 (第19図、図版16)

62は内傾する逆L字状口縁をもつ甕で、口縁下に三角突帯を巡らせている。底部はやや上げ底である。復元口径27cm、底径8cm、器高33.2cmを測る。外面は縦方向の刷目、内面はナデで調整する。明橙色を呈し、外面は一部黒色化する。胎土に赤褐色粒・白色砂粒を多く含む。63は甕の底部片である。外面は研磨、内面・底部はナデで仕上げる。黄橙色を呈し、赤褐色粒、金雲母、角閃石、白色砂粒を含む。他に黒曜石片7点が出土する。

SK50



SK51



第20図 SK50・51実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/4)

SK50 (第20図、図版8)

調査区中央で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.5m、幅0.74m、深さ24cmを測る。床面は西側が一段高くなっている。覆土は上から灰褐色土、黒褐色土を呈し、底には炭化物が多量に入る。遺物は弥生時代中期の甕の胴部片のみである。

SK51 (第20図、図版8)

調査区中央南側で検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1m、幅0.65m、深さ18cmを測る。覆土は黄灰色土で、下層に白色砂が混入する。遺物は下層から土師器・須恵器の坏身の出土している。遺物の時期、覆土の状況から上面の遺構に近い時期と考えられる。

出土遺物 (第20図、図版16)

64は土師器の坏身で丸底を呈し、口縁は外湾し、端部は丸くおさめている。内底部以外は明橙色の化粧土が残存し、赤橙色を呈する。内底部は橙色を呈する。ナデで調整し、胎土には赤褐色粒、白色砂粒を含む。口径10.6cm、器高4.6cmを測る。65は須恵器の坏身で、口径11.6cm、器高4cmを測る。たちあがりは短く引き延ばし丸く仕上げている。受部は短く内傾し、端部は細かく全面打ち欠いている。底部外面にはヘラ記号がある。胎土には白色砂粒を多く含み、灰色を呈する。口縁部が焼き歪んでいる。

SK52 (第21図、図版7)

調査区中央で、SK45を切っている。SK45との切り合いが分からず、南西側を掘りすぎている。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.3m、幅0.9m、深さ30cmを測る。弥生時代中期の壺の胴部から底部にかけての破片が、横に倒置した状態で出土している。小児棺の可能性もある。

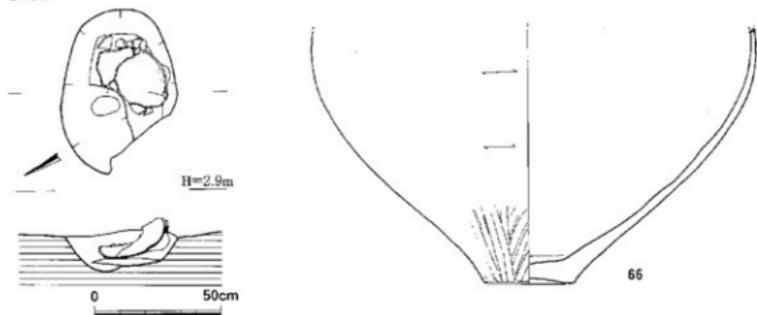
出土遺物 (第21図、図版16)

66は甕で、胴部上半は欠損している。底径7.2cm、最大胴部径35.2cmを測る。底部は上げ底である。器壁は荒れているが、外面下半は縦方向、胴部は横方向の研磨がかすかに残る。内面はナデで仕上げている。全体に明赤褐色を呈し、底部外面には黒斑がある。白色砂粒を多量に含む。

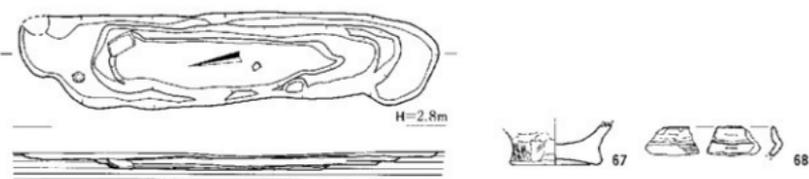
SK53 (第21図、図版8)

調査区中央東側で検出した。平面プランは細長い隅丸方形を呈し、長さ3.3m、幅0.7m、深さは最も深いところでも10cmである。床面は長軸方向が階段状になっている。覆土は黒褐色シルト、黄色シルトである。床面北側には玄武岩を方形に整形した石核が出土している。他に土器片、黒曜石片6点が出土する。

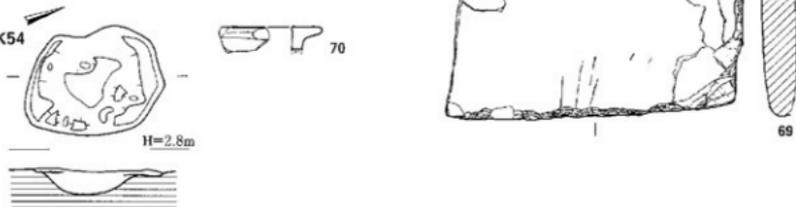
SK52



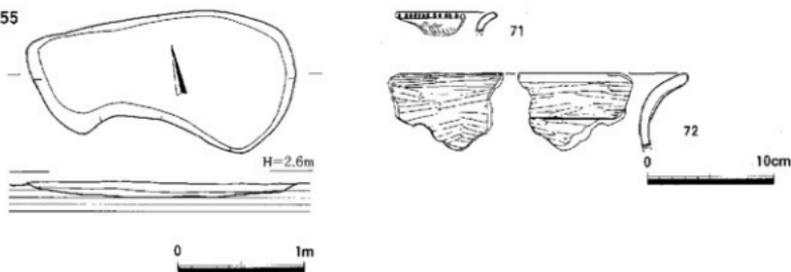
SK53



SK54



SK55



第21図 SK52～55実測図 (1/20・1/40) および出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物 (第21図)

67は甕の底部で、上げ底である。底部外面は強いヘラナデで調整している。底径7.2cmを測る。灰褐色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。68は鉢の口縁部片で、胴部上半で短く屈曲し、端部は強く折り曲げられている。黒色を呈し、板ナデで調整している。胎土に細かい金雲母、白色砂粒を含む。69は細粒砂岩の石核である。本調査で出土している石包丁の未製品と同じ石材である。一部欠損しているが、それ以外の側面は細かく敲打調整されている。上面は底面として利用した可能性もあるが、下面は表皮が残っている。

SK54 (第21図、図版10)

調査区東側で検出した。SC64の中央土坑と考えられる。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.1m、幅0.8m、深さ18cmを測る。覆土は上層から黄褐色土、灰褐色土、黒褐色土で、炭化物が下層には多く含まれる。遺物は弥生時代中期の小破片、黒曜石片1点が出土する。

出土遺物 (第21図)

70は逆L字状の口縁をもつ甕の口縁部片である。明褐色を呈し、ナデで調整をする。白色砂粒を多く含む。

SK55 (第21図、図版10)

調査区東側北壁で検出した。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ2.1m、幅0.8~1.1m、深さ12cmを測る。覆土は灰褐色シルト、黒褐色シルトで炭化物が多く入る。遺物は弥生時代前期土器の破片、今山の玄武岩片、黒曜石片5点・石核1点が出土している。

出土遺物 (第21図、図版16)

71は如意状口縁をもつ甕の口縁部片である。端部には浅い刻みを密に入れている。橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。横ナデで調整している。72は壺の口縁部片である。頸部が緩やかにすぼまり口縁部との境界部で外方へ湾曲させ、粘土を貼付して肥厚させた幅広の口縁部である。内外面は横方向の研磨を施す。外面は明褐色、内面は橙色を呈する。口縁部には一部黒斑がある。

SK56 (第22図、図版10)

調査区中央で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.3m、幅0.95m、深さ12cmを測る。東側と西側が一段高くなる。覆土は灰褐色土で少量炭化物が入る。遺物は弥生時代前期の土器片、粘板岩片が出土している。

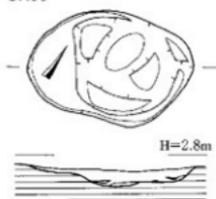
出土遺物 (第22図)

73は刻目突帯土器の甕の口縁部片である。太めの突帯に中位までの浅めの刻みを施す。器壁は磨減が著しく調整は不明である。内外面は橙色を呈する。金雲母、白色砂粒を多く含む。74・75は如意状口縁をもつ甕の口縁部片である。74は復元口径24cmを測り、口縁端部に押し引きした刻目を施している。内外面にはぶい黄褐色を呈する。胎土には金雲母、白色砂粒を多量に含む。横ナデで調整する。75は口縁下端部に刻みを施す。外面は刷毛目、内面は刷毛目後ナデで調整する。76は甕の底部片である。ナデで調整し、にぶい橙色を呈する。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含む。

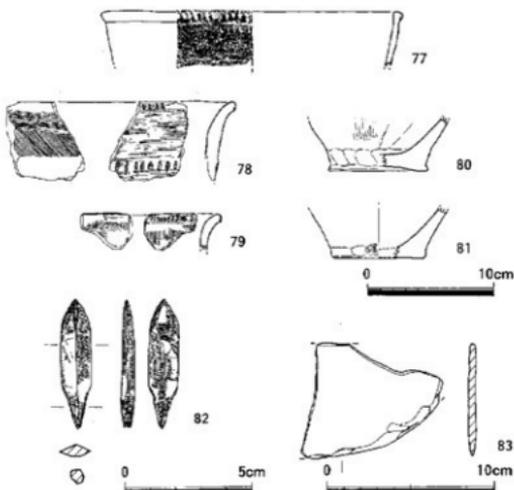
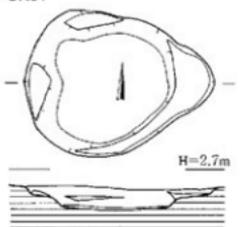
SK57 (第22図、図版10)

調査区東壁で検出し、一部調査区外に延びていたため遺構部分だけ拡張した。平面プランは卵形を呈し、長さ1.48m、最大幅1.2m、深さ18cmを測る。中央部分が一段深くなっている。覆土は上から灰黄褐色シルト、黒褐色シルトで、下層に炭化物が多量に入る。遺物は弥生時代前期の土器片が多く、他に磨製石鏃、石包丁片、今山の石斧片、黒曜石片3点が出土している。

SK56



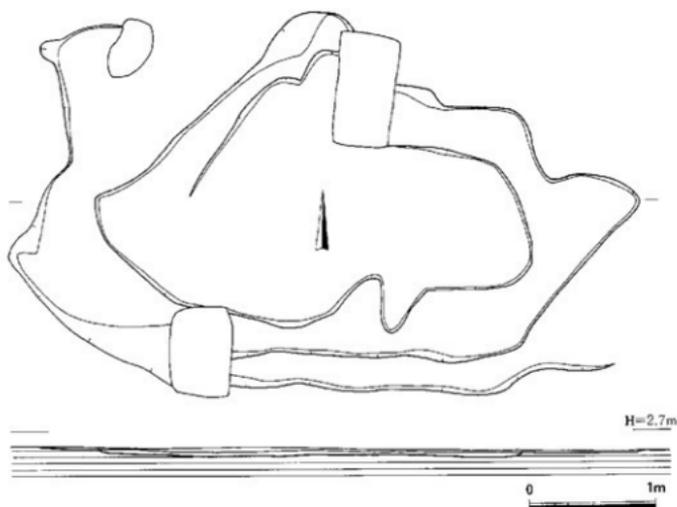
SK57



第22図 SK56・57実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2)

出土遺物 (第22図、図版16)

77は刻目突帯文土器の甕の口縁部片である。太めの薄い突帯に、狭く深い刻みを施す。突帯が薄いため、刻みの工具痕が口縁部下にまで及んでいる。外面は横方向の条痕、内面はナデで調整する。暗褐色を呈し、赤褐色粒、角閃石、白色砂粒を多く含む。78・79は如意状の口縁をもつ甕の口縁部片である。78は肩部の屈曲部に1条刻み目を巡らす。内外面ともに細かい刷毛目で調整する。にぶい橙褐色を呈し、白色砂粒を含む。79は口縁下端部に刻みを施す。灰褐色を呈し、金雲母、白色砂粒を含む。80・81は甕の底部片である。80はやや上げ底気味である。外面はナデ、内面はヘラナデで調整する。にぶい灰褐色を呈する。81はナデ調整で、明褐色を呈する。ともに金雲母、白色砂粒を含み、81は赤褐色粒も含む。82は磨製石鏃である。全長5.2cm、最大幅1.2cmを測り、重さは3.03gである。よく研磨され、鏃はシャープであるが、先端、茎まで通らない。刃部の断面は菱形、身部は七角形を呈する。石材は粘板岩である。83は大型石包丁の欠損品と思われる。厚さ4mmを測り、刃部は両刃加工している。砂岩製である。



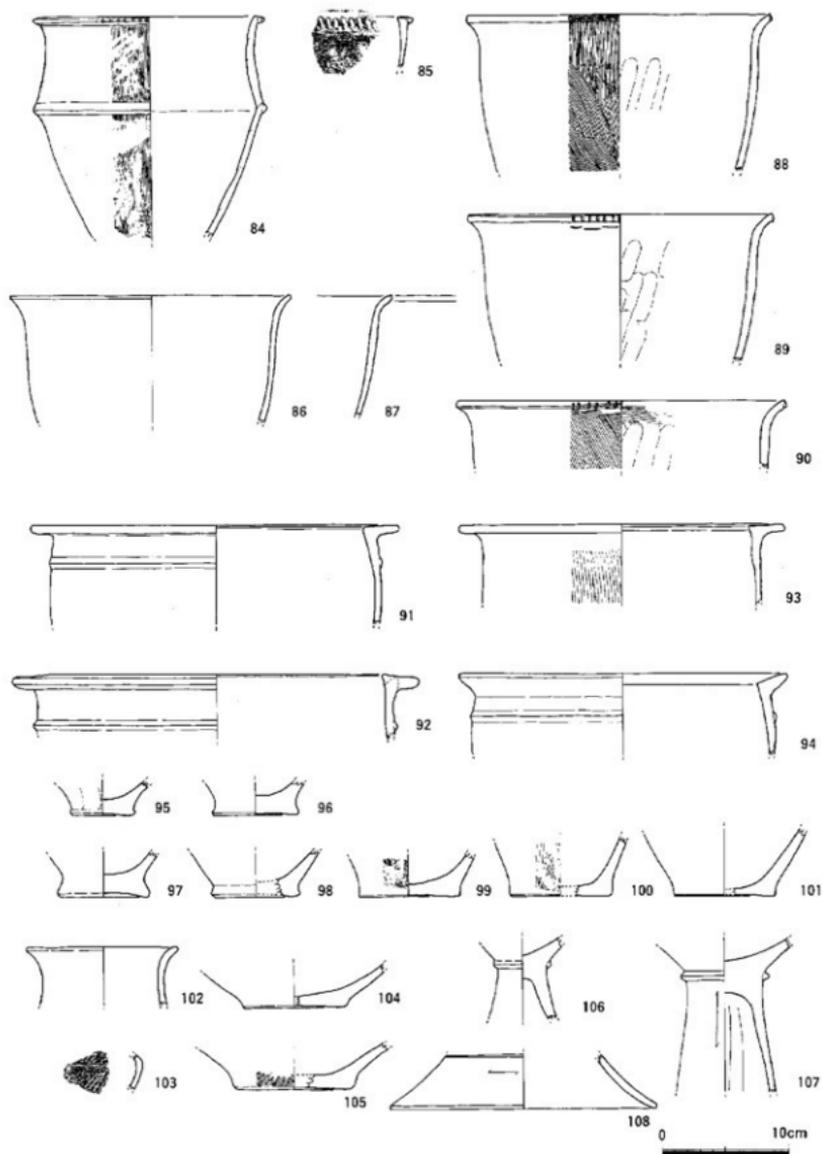
第23図 SK59実測図 (1/40)

SK59 (第23図、図版11)

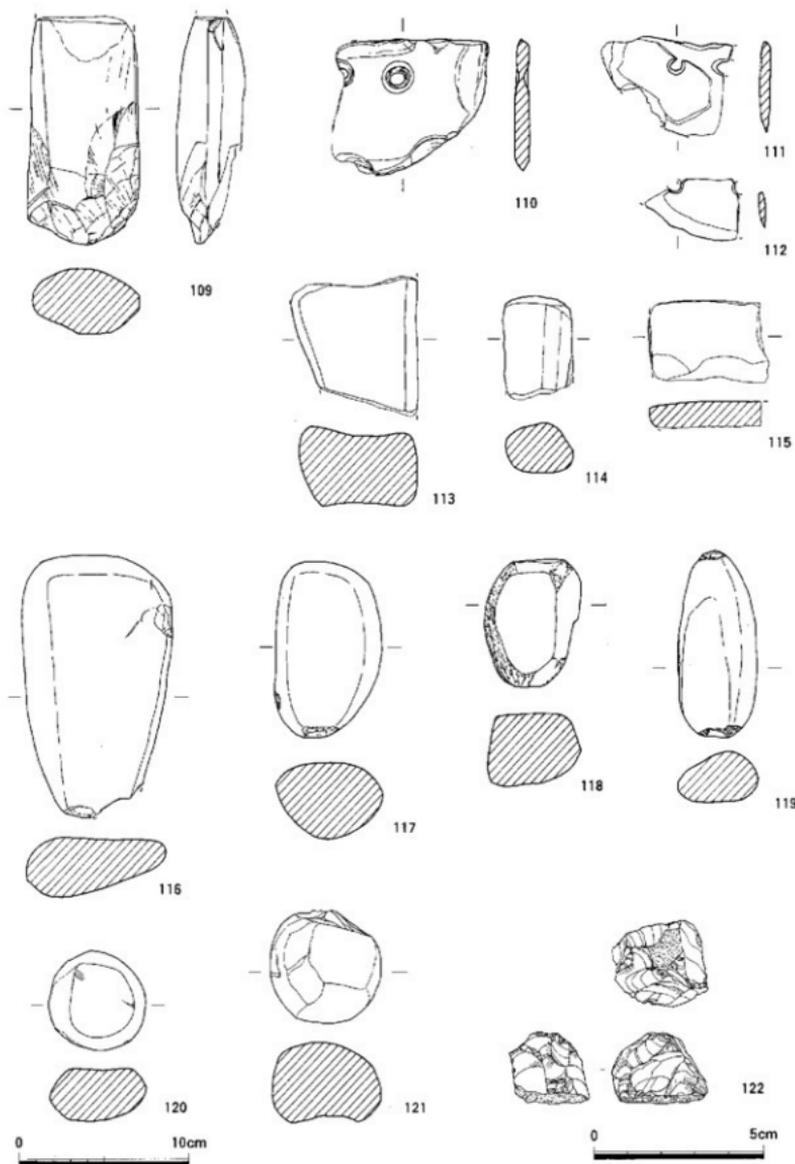
調査区東側で検出した。平面プランは不定形で、長さ5m、幅3m、深さは最も深いところでも10cmを測る。床面に遺物が散乱した状況で出土した。遺物が包含層中で見えていたため、掘削面は包含層の下層の晴灰黄色粘質土であった可能性が大きい。覆土は灰褐色、黒褐色土を呈する。遺物は弥生時代前期から中期の土器片、石斧、石包丁、砥石、叩き石の未製品・破片、黒曜石がある。大量の石器片が出土しているため、遺跡内で製作した石器の失敗品を廃棄したものと思われる。土器の破片も集中して出土している。

出土遺物 (第24・25図、図版17)

84・85は刻目突帯文土器の甕である。84は肩部で屈曲し、口縁は外反する。口縁部と肩部屈曲部に突帯を巡らす。刻みは口縁部のみで、浅い刻みが施される。復元口径は18cmを測る。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は磨滅している。にぶい黄褐色を呈し、金雲母、白色砂粒を含む。85は太めの突帯に根元までの深い刻みを施す。外面は板ナデ、内面はナデで調整する。外面は黒色、内面は灰褐色を呈する。胎土に金雲母、白色砂粒を多く含む。86から90は如意状口縁をもつ甕である。86・87は口縁端部に刻みをもたないタイプである。ともに器壁は磨滅し、調整は不明である。86は復元口径22cmを測り、内外面ににぶい褐色を呈する。白色砂粒を多く含む。87はにぶい黄褐色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。88～90は口縁端部に刻み目を施す。88は復元口径24.2cmを測り、外面は刷毛目、内面はナデ、指押さえて調整する。89は復元口径24.4cmを測り、外面は磨滅が著しいが一部刷毛目が残る。内面は縦方向のナデを行う。90は復元口径26.2cmを測り、外面は斜方向の刷毛目、内面口縁付近は横方向の刷毛目、他はナデで調整する。88～90は橙色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。91～94は逆L字状の口縁をもつ甕の口縁部片である。94は口縁が内傾し、91・92・94は口縁下に1条の三角突



第24图 SK59出土遗物实测图① (1/4)



第25図 SK59出土遺物実測図② (1/3・2/3)

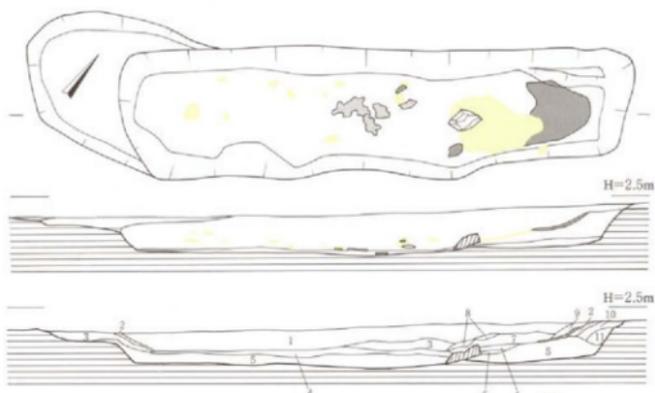
帯を巡らす。復元口径は91が29cm、92が32cm、93が25.8cm、94が26cmを測る。すべて明橙色を呈し、金雲母、白色砂粒を含む。外面胴部付近は縦方向の刷毛目がわずかにみられるが、大半が磨滅している。口縁付近と内面はナデ調整である。95～101は壺の底部である。95は底径5cmを測り、外面は強い横ナデで調整される。外面は褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。底部から胴部にかけて閉き気味に立ち上がっているため、蓋の可能性もある。金雲母、白色砂粒を多く含む。96は底径6.8cmを測り、95同様、外面は強い横ナデで調整される。底部は明赤褐色、他は橙色を呈する。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含む。97・98は上げ底の底部で、97の底部は明橙色、他は橙色を呈する。赤褐色粒、白色砂粒を含む。99・100は外面縦方向の刷毛目、内面ナデで調整する。101は底径8cmを測る。内外面磨滅する。99～101は白色砂粒を多く含む。102は壺の口縁部片である。復元口径12cmを測る。頸部は直立し、口縁は緩やかに外反する。ナデで調整し、橙色を呈する。細かい金雲母、白色砂粒をわずかに含む。103は壺の胴部片である。最大胴部径に1条の沈線が巡り、その下に4条の斜方向の文様が残る。研磨調整で、内面は褐色、外面は黒色を呈する。104・105は壺の底部片である。104は復元底径8.2cm、105は9.4cmを測る。104は外面褐色、内面黒色を呈する。全面磨滅が著しいが、ナデで調整していると思われる。105は内外面褐色を呈し、外面底部付近に刷毛目が残る。金雲母、白色砂粒を多く含む。106～108は高坏で、106は小型の高坏である。106・107は脚部、坏部が欠損している。細身の脚をもち、脚部と坏部の接合部に断面三角形の突帯を巡らす。106は内外面磨滅し、明橙色を呈する。107も磨滅するが、坏部内底面には研磨が残る。外面は明褐色、内面は黒色を呈する。白色砂粒を多く含む。108は脚部部の破片である。復元底径21.2cmを測る。欠損部に1条の沈線が巡る。褐色を呈し、白色砂粒を多く含む。

109は玄武岩製の石斧である。基部と刃部の一部が欠損する。側縁には擦痕がみられる。長さ13.7cm、幅6.5cm、厚さ3.9cmを測り、重さは568.47gである。110～112は石包丁ですべて砂岩製で、両刃である。110は大型の石包丁で半分欠損する。背部は直線的で、厚さは0.9cmを測る。紐部は1つが穿孔途中で、もう1ヶ所を穿孔している途中で破損したものと思われる。111も110同様、穿孔部から欠損する。もう1ヶ所の穿孔は途中である。厚さは0.6cmを測る。112は2ヶ所穿孔がみられるが、ともに欠損している。すべて両面穿孔を行っている。113～115は砥石である。113・114は砂岩製の荒砥、115は細粒砂岩の仕上げ砥石である。いずれも欠損する。113の砥面は大きく凹状に窪み、114の上面も一部窪んでいる。116～121は叩き石である。116～119は楕円形にちかい形態をする。116・117は結晶質変成岩で、平滑な自然面が平坦部に残り、端部はよく敲打している。116は長さ15.8cm、幅8.8cm、厚さ3.6cmを測り、重さは325.48gである。117は長さ10.6cm、幅6.3cm、厚さ4.7cmを測り、重さは254.71gである。118・119は玄武岩製である。118は長さ7.7cm、幅5.3cm、厚さ4.2cmを測り、重さは429.28gである。119は長さ11.2cm、幅4.7cm、厚さ3.0cmを測り、重さは744.26gである。120・121は略球状を呈する。120は玄武岩、121は結晶質変成岩である。重さは120が176.39g、121が329.51gを量る。122は黒曜石の石核である。自然面が4ヶ所遺存し、本来角礫であったことが分かる。打面調整をし、剥片を剥いている。リングが同心円状に周り、丸みをもつ作業面があることから、熱破壊を受けた可能性がある。重さは14.9gを量る。

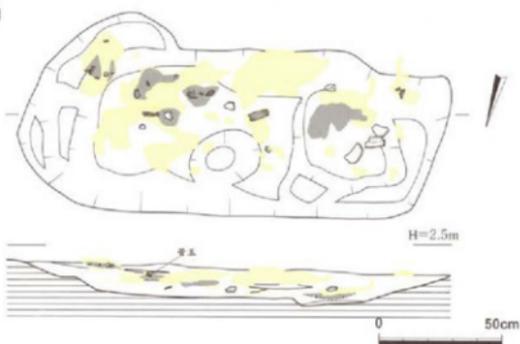
SK60 (第26図、図版12)

調査区西側で検出した。平面プランは細長い隅丸長方形を呈し、長さ2.1m、幅0.75m、深さ18cmを測る。床面はやや東側が高くなっている。床面には中央・東側に集中して海綿骨針が出土している。東側には厚さ2cm程炭化物が層になって出土している。床面に出土している玄武岩とこの炭層は土層上でつながるため、これより下の層は掘りすぎの可能性がある。覆土は上から灰褐色土、灰色シルト、

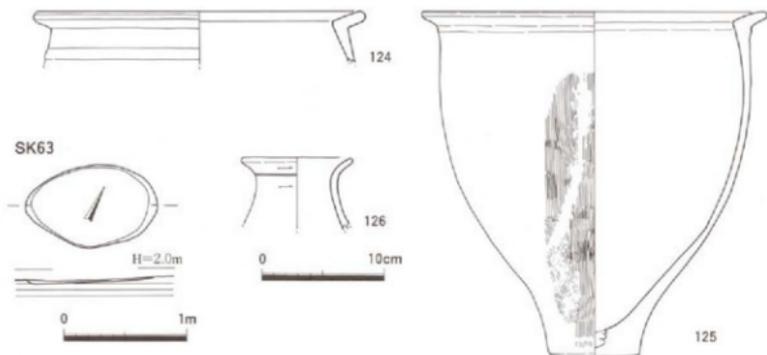
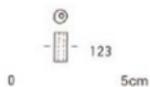
SK60



SK61



- SK60
- 1 褐色土・黄粘土(褐色砂質層位)
 - 2 褐色砂質土
 - 3 灰褐色シルト
 - 4 灰褐色シルト・黄褐色シルト
 - 5 緑褐色粘質土・オリーブ灰色シルト(地山)
 - 6 黄褐色シルト
 - 7 黄褐色シルト
 - 8 黄褐色シルト
 - 9 明黄褐色シルト・黄褐色シルト
 - 10 明黄褐色シルト・黄褐色シルト・灰褐色シルト
 - 11 黒色シルト・灰褐色シルト・黄褐色シルト
- 海鏡
 ⊙ 木釘
 ● 炭化物



第26図 SK60・61・63実測図 (1/20・1/40) および出土遺物実測図 (1/4・1/2)

灰褐色シルトである。遺物は出土していない。

SK61 (第26図、図版12)

調査区西側、SK60から約2m北東側で検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅0.7m、深さは東側で13cm、西側は一段深くなっている。床面全体に海綿骨針、炭化物、木質、土器片が広がっている。管玉は床面より7cm程浮いた状態で出土した。覆土は上から黄灰色シルト、灰色シルトである。遺物は弥生時代中期の土器片と今山の玄武岩片、黒曜石片6点が出土している。土器は割れた状態で出土した。

出土遺物 (第24・25図、図版17)

123は碧玉製の管玉である。長さ1.2cm、径0.5×0.55cmである。稜線がみられず、よく磨かれている。両面穿孔と思われる。濃緑色を呈する。124は内傾する逆L字状口縁をもつ甕の口縁部片で、口縁下部に三角突帯を巡らせている。復元口径27cmを測る。内外面横ナデで調整する。明橙色を呈する。胎土に赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含む。125も内傾する逆L字状口縁をもつ甕で、一部欠損する。復元口径28.2cm、底径7.3cm、復元器高28.2cmを測る。外面は刷毛目、内面・口縁部分はナデで調整する。外面は明橙色、内面は橙色を呈し、外面には一部煤が付着する。赤褐色粒、金雲母、角閃石、白色砂粒を多く含む。

SK63 (第26図、図版10)

調査区東側で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1.05m、幅0.65m、深さ5cm程で、浅い窪み状である。覆土は黒褐色粘質土である。弥生時代前期・中期の土器片、今山の玄武岩片が出土している。SK59にともなう土坑の可能性もある。

出土遺物 (第26図、図版17)

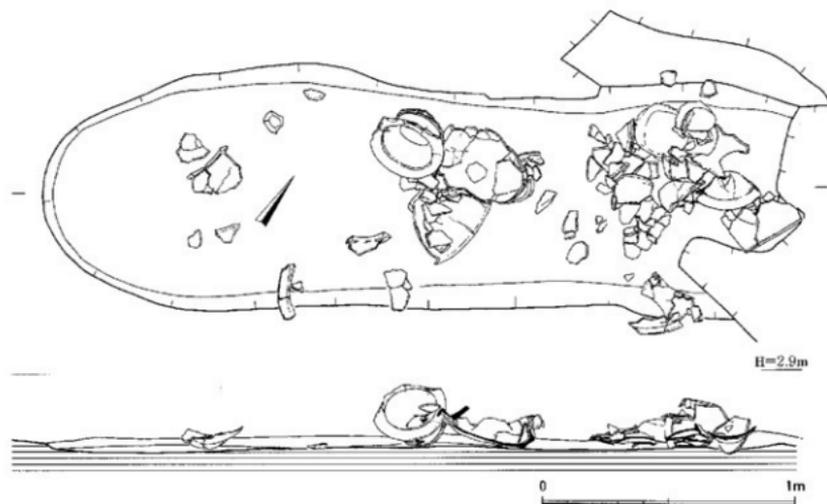
126は壺の口縁部片である。復元口径9cmを測り、口縁は緩く外湾し端部は丸くおさめる。頸部と口縁部の境に途切れ途切れではあるが、1条沈線が巡っている。内外面磨減が著しいが、外面にはわずかに研磨痕がみられる。内外面ともに橙色、一部明橙色である。胎土には粒子の細かい金雲母、白色砂粒を含む。

SK65 (第27図、図版13)

調査区西側南壁で検出した。一部調査区外に延びていたため南側を拡張した。平面プランは細長い楕円形である。遺構の北側は排水のための溝を掘削する際、一部壊してしまった。現存長3m、幅1mを測る。多量の弥生時代中期の甕、蓋、高坏、器台が出土した。一部前期の土器を含む。遺物は中央と北側の2ヶ所に集中している。完形品も出土しているため、祭祀的性格をもつものと考えられる。覆土は明黄褐色シルトである。

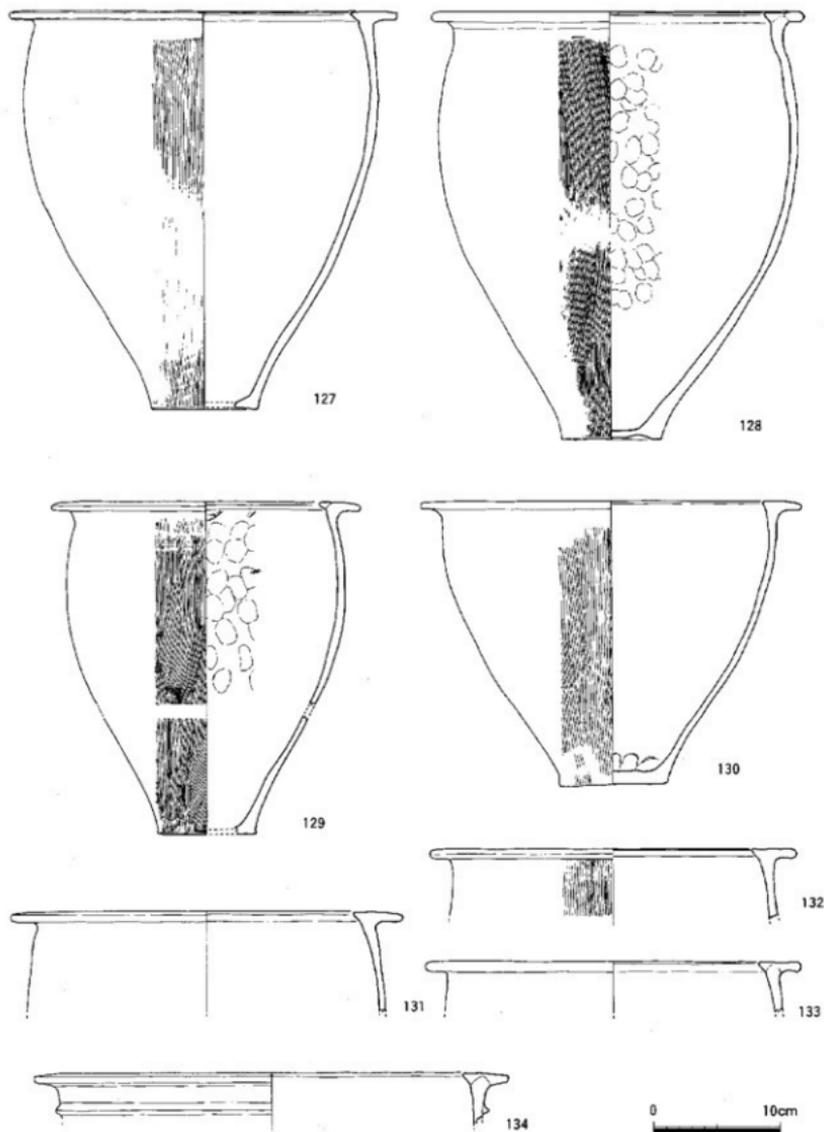
出土遺物 (第28・29図、図版18)

127~134は逆L字状口縁をもつ甕である。127は口径30.5cm、器高32cmを測り、底部から胴部にかけて一部欠損する。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。褐色を呈し、赤褐色粒、白色砂粒を多く含む。128は胴部が中位よりやや上で張る。復元口径29.5cm、器高34.4cm、底径8cmを測る。外面は縦方向の刷毛目、内面は指押さえ、ナデで調整する。全体ににぶい黄褐色、部分的に明橙色を呈する。外面に一部煤の付着があり、白色砂粒を多く含む。129は復元口径24.6cmを測り、約1/3の遺存状況である。外面は縦方向の刷毛目、内面は強い指押さえ、ナデで調整する。外面は黒褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。胎土に赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含む。130は浅めの甕で、胴部は緩やかに外湾し、そのまま口縁部に続く。口径23.9cm、底径8.4cm、器高22.7cmを測り、口縁部、底部の一部を欠損する。外面胴部は縦方向の刷毛目、内面、口縁部、底部はナデで調整する。橙色を呈し、外面

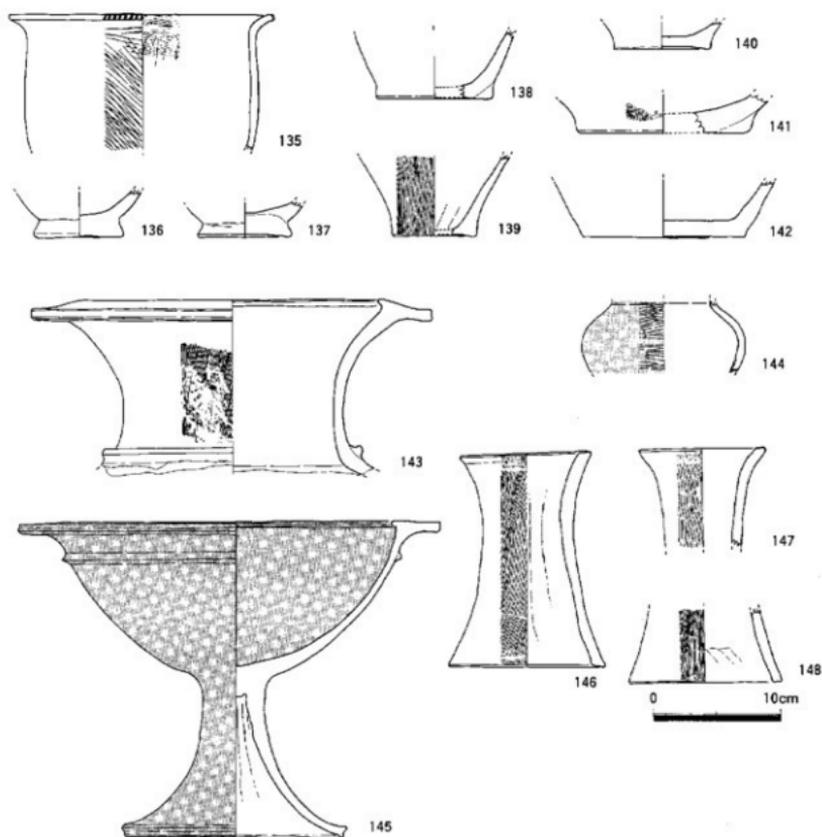


第27図 SK65美湖図 (1/20)

底部付近に黒斑がある。赤褐色粒、白色砂粒をわずかに含む。131~133は口縁部のみで遺存状況である。金雲母、白色砂粒を含む。131は復元口径90.6cmを測る。内面はナデで調整しているが、外面は磨滅する。口縁部は明橙色、他は橙色を呈する。132は復元口径29cmを測り、胸部外面は縦方向の刷毛目、内面と口縁部は横ナデで調整する。橙色を呈し、外面には煤の付着がみられる。133は復元口径29.6cmを測り、橙色を呈する。口縁上面には褐色をした赤色顔料の痕跡がみられる。内面・口縁部はナデ調整、外面は磨滅し調整不明である。134は口縁下に1条の三角突帯を巡らす。復元口径37.2cmを測り、1/4の遺存である。橙色を呈し、細かい金雲母、白色砂粒を多く含む。135は如意状の口縁をもつ甕である。復元口径20.8cmを測り、口縁端部にヘラによる刻み目が施される。外面は黒色、明橙色、内面は明橙色を呈する。外面は斜方向の刷毛目、内面は目の細かい刷毛目の後、指押さえて調整する。金雲母、白色砂粒を含む。136~142は甕の底部片である。136・137は裾広がりの台形状に近い平底である。136は底径7cm、137は7.6cmを測る。136はにぶい黄褐色を呈し、内面には煤の付着がある。137は外面明橙色、内面橙色を呈する。白色砂粒を多く含む。138は復元底径9cmを測る。内外面磨滅が著しく調整不明である。外面はにぶい黄褐色、内面は煤が付着し、内面黒色である。角閃石、白色砂粒を多く含む。139は復元底径6.6cmを測り、外面縦方向の刷毛目、内面ナデで調整する。外面にぶい黄褐色、内面黒色を呈し、金雲母、白色砂粒を含む。140は底径7.6cmを測り、橙色を呈する。赤褐色粒・白色砂粒を多く含む。調整は磨滅し不明である。141は復元底径13.6cmを測り、外面は刷毛目、底部は強いナデ、内面はナデで調整する。金雲母、白色砂粒を多く含む。142は底径12.8cmを測り、ナデ調整で仕上げる。角閃石、白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。143は広口壺で、逆L字状口縁部をもつ。胸部以下は欠損する。頸部のつけねから直線的に立ち上がり口縁は大きく外反する。口唇部は横ナデで凹線状に窪む。頸部の付け根に「コ」字形の突帯を貼り付ける。口径31.6cmを測り、明橙色から褐色を呈する。頸部外面は縦方向の刷毛目、他はナデで調整する。細かい金雲母、赤褐色粒、5mm大の白



第28図 SK65出土遺物実測図① (1/4)



第29図 SK65出土遺物実測図② (1/4)

色砂粒を多く含む。144は小壺の胴部片である。最大胴部径は13cmを測る。内面は刷毛目のちナデ、外面は刷毛目が一部残る。内面は灰褐色、外面は明橙色を呈し、褐色の赤色顔料が付着する。145は高坏で、坏部と脚部の一部を欠損する。口径33.1cm、脚部径17.7cm、器高25.4cmを測る。逆L字状口縁で、口縁下に1条の三角突帯をもつ。脚部の口唇部は強い横ナデで凹線状に窪む。器壁は磨滅するが、坏部内面は横方向、坏部外面と脚部外面は縦方向の研磨と思われる。脚部内面にはシボリ痕が認められ

る。赤色顔料は坏部内面にはよく遺存するが、外面には部分的にしか残っていない。脚部内面には垂れた跡がみられる。全体に明橙色を呈し、赤褐色の赤色顔料が付着する。細かい金雲母、白色砂粒を多く含む。146～148は器台である。146は一部欠損するが、受部径10.3cm、脚部径12.2cm、器高17.3cmを測る。口唇部は強い横ナデで凹線状に窪む。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。147は脚部が欠損する。受部の復元径10cmを測り、146同様、外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。148は脚部のみの遺存で、脚部の復元径12cmを測る。調整は146と同様である。すべて橙色を呈し、金雲母、白色砂粒を含む。

SK67 (第30図、図版10)

調査区中央北壁側で検出した。平面プランは細長い楕円形を呈し、長さ4.3m、幅0.8～1.1m、深さ15cm、中央部分は30cmと深くなっている。覆土は灰褐色粘質土である。弥生時代前期の土器片、黒曜石片1点が出土している。

出土遺物 (第30図、図版18)

149は刻目突帯文土器の甕の口縁部片である。太めの突帯に根元までの深い刻みを施す。外面は横方向の条痕、内面は板ナデで調整する。にぶい黄褐色を呈し、細かい金雲母、白色砂粒を含む。150は如意状の口縁をもつ甕である。復元口径は19.2cmを測る。口縁端部に浅く密な刻みを施す。内外面ナデで調整する。外面は黒褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。胎土には金雲母、白色砂粒を多く含む。151は甕の底部片である。ナデ、指押さえで調整する。色調は明橙色を呈し、角閃石、白色砂粒を多く含む。

SK73 (第30図、図版14)

調査区中央で検出した。SK80、SD72を切っている遺構である。平面プランは楕円形を呈し、長さ0.9m、幅0.7m、深さ15cmを測る。覆土は上から黄褐色土、灰黒色土である。弥生時代中期の細片が出土している。

SK74 (第30図、図版14)

調査区中央で検出した。SK73・75・80に切られている。平面プランは細長い楕円形を呈し、長さ1.6m、幅0.9m、深さ22cmを測る。覆土は灰褐色粘質土である。弥生時代前期の土器片、今山の玄武岩片、黒曜石片1点が出土している。

出土遺物 (第30図)

152は如意状口縁をもつ甕の口縁部片で、復元口径20cmを測る。口縁下部には浅い刻みを施す。外面は細かい刷毛目、内面はナデで調整する。にぶい黄褐色を呈し、赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含む。153は甕の底部片である。外面は板ナデ、内面はナデで仕上げられる。外面は灰褐色、内面は黄褐色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。154は壺の口縁部片である。頸部と口縁部との境界部で外方へ湾曲し、粘土を貼付して肥厚させた幅広の口縁部である。内外面は横方向の研磨を施す。内外面ともに明橙色を呈する。胎土には金雲母、白色砂粒を含む。

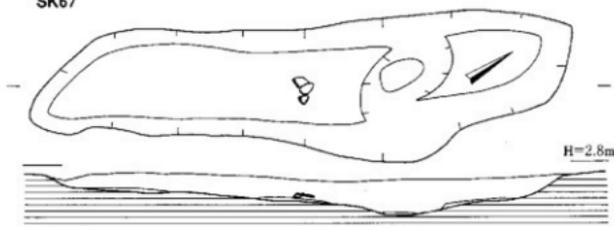
SK75 (第30図、図版14)

調査区中央で検出した。SK74を切っている遺構である。平面プランは楕円形を呈し、長さ1m、幅0.6m、深さ10cmを測る。覆土はにぶい黄褐色土、灰黄褐色土である。床面の西側には炭化物が厚さ1～2cm程層になって堆積している。弥生時代中期の土器片、今山の玄武岩片、黒曜石片1点が出土している。

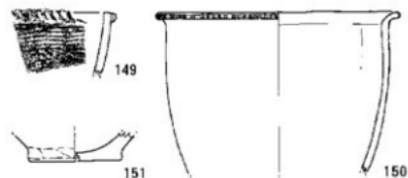
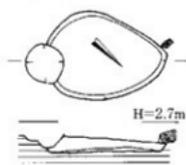
出土遺物 (第30図)

155は甕の底部片である。復元底径7.4cmを測る。外面は板ナデで調整し、内面は磨滅して調整不明

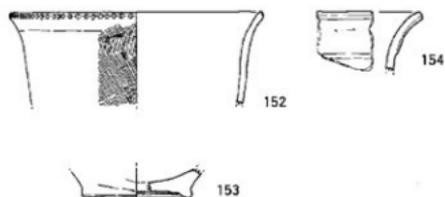
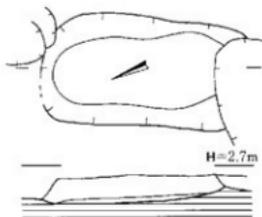
SK67



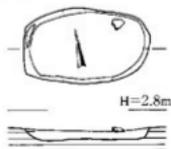
SK73



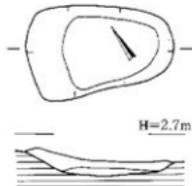
SK74



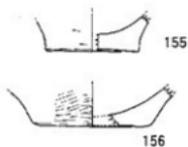
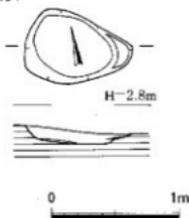
SK75



SK80



SK81



第30図 SK67・73・74・75・80・81実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/4)

である。にぶい黄褐色を呈する。156は壺の底部片である。復元底径9.4cmを測る。外面は横方向の細かい研磨、内面はナデで調整する。色調は外面灰白色、内面黒色を呈する。ともに金雲母、白色砂粒を多く含む。

SK80 (第30図、図版14)

調査区中央で検出した。SK73に切られ、SK74を切っている土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.1m、幅0.7m、深さ10cmを測る。覆土は灰色土、オリーブ灰色シルトである。炭化物が少量入る。遺物は出土していない。

SK81 (第30図、図版14)

調査区中央で検出した。ほとんどSK75の真下で検出された。SK74を切っている土坑である。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.1m、幅0.7m、深さ10cmを測る。覆土はにぶい黄褐色土である。遺物は出土していない。

④溝

SD62 (第12図)

調査区の東側で検出した溝で北東から南西方向に走る。長さは現存で3.4m、幅は北側で0.3m、南側で0.4m、深さは約5cmを測る。底面はやや南側が低くなっている。覆土はにぶい黄褐色土である。砥石片、弥生土器の破片が出土している。

出土遺物 (第31図)

157は壺の口縁部で直立気味に頸部は立ち、口縁部は外方へ湾曲する。口縁は粘土を貼付して肥厚させ、幅広である。外面は横方向の研磨と思われるが、磨滅している。内面はナデである。内外面ともに橙色を呈し、口縁部外面には黒斑がある。胎土には金雲母、白色砂粒を多く含む。158は小壺の底部片である。復元底径6.3cmである。器壁は荒れている。橙色を呈し、白色砂粒を多く含む。159は鉢の口縁部片である。復元口径15.3cmである。器壁は厚く、口縁端部は丸く仕上げる。橙色を呈し、少量の金雲母、白色砂粒を含む。

SD66 (第31図)

調査区の中央で検出した溝で南北方向に走る。長さは現存で20m、幅は3.5～5mを測る。粗砂・粘質土・シルトの互層で形成されている。トレンチを2ヶ所入れ、深さ70cm程度掘削した。流木・木質片が多くみられる。遺物は弥生時代前期の土器が少量出土した。湧水のため壁が脆く、土層からも自然河川と判断し、掘削を終了した。

出土遺物 (第31図)

160は如意状の口縁をもつ甕の口縁部片である。口縁端部には浅く、鋭い刻み目が入る。外面は刷毛目、内面はナデで調整する。明橙色を呈し、多量の赤褐色粒を胎土に含む。他に金雲母、白色砂粒を含む。

SD70 (第12図)

調査区の中央で検出した溝で北東から南西方向に走る。上面で検出したSD33と同じ溝と考えられる。長さは現存で18m、幅は35～45cmを測り、深さは約8cmを測る。底の高さもSD33と同じで、北側の方がやや低くなっている。覆土はにぶい黄褐色シルトを呈する。遺物は砥石片、土師器、弥生土器の小片が出土している。

出土遺物 (第31図)

161は土師器の碗の口縁部片で、復元口径11cmを測る。口縁部は内湾する。明橙色を呈し、金雲母、



第31図 SD66土層図 (1/40) およびSD出土遺物実測図 (1/4)

白色砂粒を少量含む。

SD71 (第12図)

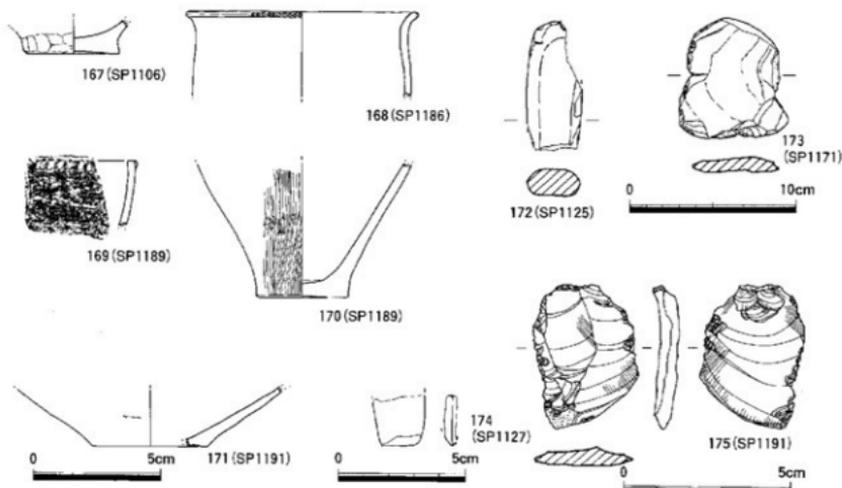
調査区の中央で検出した溝で北西から南東方向に走る。SD70・SB58に切られている溝である。長さは現存で4.5m、幅は40~50cmを測り、中央部でやや膨らみ75cmを測る。深さは浅く約5cmである。覆土にはぶい黄褐色シルト・黄色シルトを呈する。遺物は弥生土器の小片が出土している。

出土遺物 (第31図)

162・163は弥生土器の甕の底部片である。162は底径8cmを測る。外面・底部は板ナデと指押さえ、内面はナデで調整する。明橙色を呈し、金雲母、白色砂粒を含む。163の復元底径は7.4cmを測る。器壁はほとんど磨滅しているが、一部刷毛目が遺存する。外面は明橙色、内面は橙色を呈し、白色砂粒を多量に含む。164は高坏の脚部と思われる。ナデで調整する。橙色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。

SD72 (第12図、図版14)

調査区の中央で検出した溝で南北方向に走る。SK73・74・75・80・81に切られている。長さは現存で15mを測る。深さは最も深い南側で23cmである。北側がやや低くなっている。覆土は黄色シルト・灰褐色シルト・黒褐色シルトを呈する。遺物は弥生土器の小片が出土している。



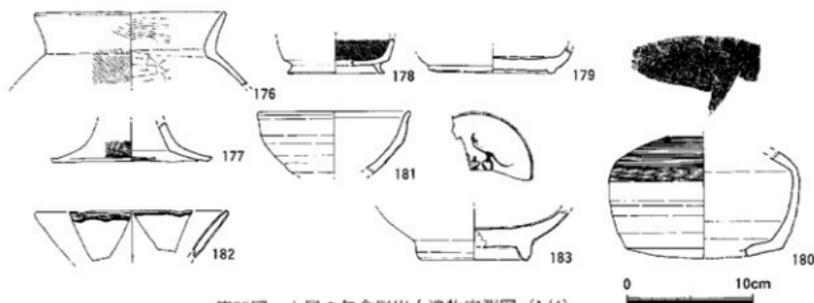
第32図 SP出土遺物実測図 (1/4・1/3・1/2・2/3)

出土遺物 (第31図)

165は壺の口縁部片である。口縁部を緩く外反させる。口縁下には3条の沈線が巡り、斜方向の文様が刻まれる。内外面ともに研磨調整をする。外面は明橙色、内面は橙色を呈し、わずかに金雲母、白色砂粒を含む。166は逆L字状口縁をもつ甕の口縁部片である。内外面横ナデで調整する。明褐色を呈する。胎土に金雲母、白色砂粒を多く含む。外面には煤が付着する。遺構の切り合い、他の遺物の出土状況から混入と考えられる。

⑤ピット出土遺物 (第32図)

140あまりのピットを検出したが、削平がひどく、5cmも掘削せず、地山に達するものが多数あった。167はSP1106出土である。底部片で底径6.9cmを測る。調整は底部をヘラナデ、他はナデである。金雲母、白色砂粒をわずかに含む。内外面灰白色を呈する。168はSP1186出土で、如意状口縁をもつ甕の口縁部片である。ナデ調整である。橙色を呈し、赤褐色粒、白色砂粒を含む。169・170はSP1189出土である。169は刻目突帯文土器の甕の口縁部片である。太く薄い突帯を貼り、根元まで刻みを施す。突帯が薄いため、刻んだ部分が上方に押し出され、口縁は波打っている。内外面、板ナデで調整する。灰黄褐色を呈し、細かい金雲母、白色砂粒を含む。170は甕の底部片である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。外面は明橙色、内面はにぶい黄褐色を呈する。白色砂粒を多く含む。171・175はSP1191出土である。171は壺の底部片で灰白色を呈し、金雲母、白色砂粒を多く含む。175は黒曜石の使用痕のある剥片である。気泡をわずかに含み、漆黒を呈する。打面と縁辺部先端は自然面を残し、二次加工は右縁辺、左縁辺の両面にみられる。重さは5.11gを量る。172はSP1125出土である。細粒砂岩製の手持ち砥石である。173はSP1171出土である。玄武岩製の石錘で、1対を打ち欠いている。重さは62.25gを量る。174はSP1127出土である。砂岩製の磨製石斧の刃部片である。



第33図 上層の包含層出土遺物実測図 (1/4)

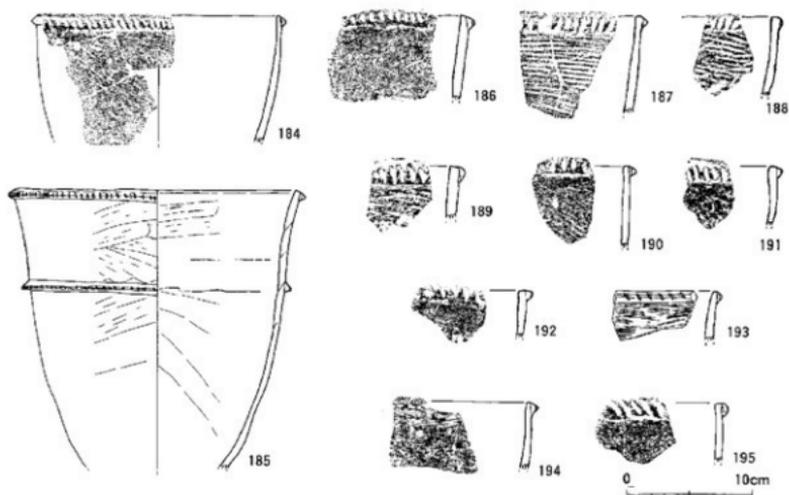
4. 包含層の遺物

1) 上層の包含層 (第4図)

上層の包含層はSD35より西側、6a~8dにかけて堆積している。西壁をみると、4層のやや粘質を帯びた灰色土、5層の浅黄色シルトの層である。地形はSD35から北西に向かって、しだいに傾斜している。その部分に、厚さ30cm程の包含層が堆積する。包含層中からは土器(弥生土器、須恵器、土師器、輸入陶磁器、両産陶器)の他、鉄滓が少量出土する。鉄滓は遺構全体で1374.55g出土する。時期は古いところでは弥生時代から近代まで入る。特に7世紀後半を中心にした遺物が多い。

出土遺物 (第33図、図版18~21)

176は土師器の甕の口縁部片である。外面は刷毛目、内面は横方向のケズリである。口縁部は内外面横方向の刷毛目のち、ナデである。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。177は土師器の高台脚部である。内面は外方向に向かって強く屈曲し、外湾気味に開き、裾端部はわずかに跳ねる。外面は横方向の刷毛目、内面は脚部は回転ナデ、裾部はわずかに刷毛目の痕跡が残る。胎土は精良で、橙色を呈する。178は須恵器の高台付坏である。小型で、高台は外に大きく開く。底部はヘラ切り後、回転ナデで調整する。白色砂粒を含み、暗灰色を呈する。内面には黒色漆が全面に残る。179は須恵器の高台付坏である。高台は低く、底部と体部の境目に貼り付ける。全体に器壁が厚い。底部はヘラ切り後、ナデで調整する。白色砂粒を含み、白灰色を呈する。180は須恵器の平底である。口縁部を欠損する。底部はやや丸底気味で、立ち上がり、肩部もやや丸味をもつ。体部から底部は回転ヘラケズリ、肩部はカキ目で調整する。白色砂粒を多く含み、外面は暗灰色、黒灰色、内面は灰色を呈する。181は天目茶碗の口縁部片である。復元口径は12.1cmを測る。口縁部は下方で折れ、直立し、端部は短く折り返される。灰白色の胎土にぶい赤褐色を呈した鉄軸が厚くかかる。部分的に黒色を呈する。体部下半は露胎である。182は龍泉窯系青磁小碗の口縁部片である。口縁部下の外面、内面には1条の沈線が巡る。輪花を有する。浅灰色の胎土にやや青味を帯びた浅灰色の釉がかかる。183は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類である。見込み内には花文が描かれる。極め細かな灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉がかかる。釉は厚くかけられ、高台内底部は釉を掻き取っている。



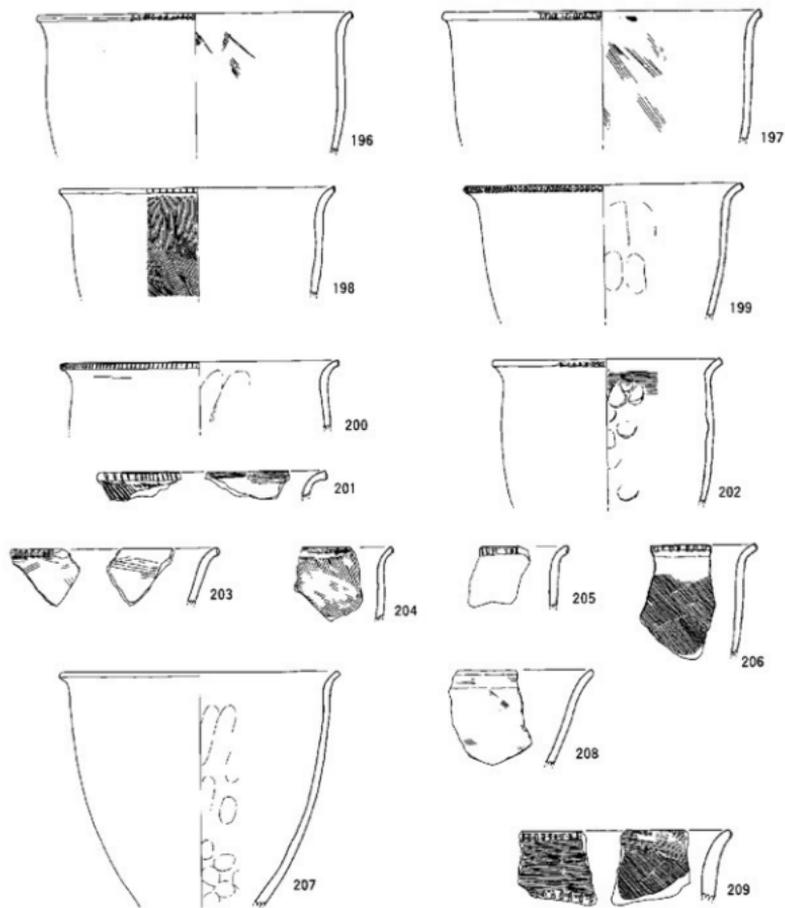
第34図 下層の包含層出土遺物実測図①(1/4)

2) 下層の包含層

上層の包含層の直下に堆積する。ほぼ全面に広がり、西側にかけてやや薄くなっていく。地形的には北西側がやや下がるもののほぼ平坦である。遺物は東側に多く、特に2b~4cに集中する。土はやや粘質を帯びたにぶい黄色シルト、暗灰黄色粘質土である。厚さはほぼ30cmを測る。遺物は弥生時代前期末~中期にかけての土器、石器群が出上した。遺構検出はこの直下の黄灰色砂質土、シルトの面でおこなった。上層のにぶい黄色シルトを剥いだ段階でピットを検出したが、ほとんどこの面では確認できなかった。時間的な制約もあり、下の暗灰黄色粘質土を剥いで検出した。そのため、幾つかの遺構は上層をとばしている可能性がある。結果、包含層中には破砕した状態ではあったが、完形に近い土器も出土したと考えられる。

出土遺物 (第33図、図版19)

184~264・281は甕である。184~195は刻目突帯文土器の甕である。184は逆卵形形の胴部をもち、口縁は内湾する。口縁部下に突帯を巡らす。やや細めの突帯に密な間隔で、根元までの深い刻みを施す。復元口径は20cmを測る。外面は斜方向に板状の擦痕、内面はナデで調整する。金雲母、白色砂粒を多く含み、外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈する。185は口縁部で緩やかに外反する。口縁部と肩部に刻目突帯を巡らす。細く高い突帯で、浅い刻み目が施される。復元口径は23.4cmを測る。外面は板ナデ後、ナデ、内面もナデで仕上げている。金雲母、白色砂粒を含み、外面は灰褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。外面口縁部下には炭が付着する。186は太めの突帯に浅い刻みを施す。内外面板ナデを行ったのち、一部ナデ、口縁部付近はナデで調整する。金雲母を多く含み、にぶい黄橙色、灰褐色を呈する。187~191は口縁部に突帯をもち、外面は横方向の条痕、内面も口縁部付近は横方向の板ナデで調整する。刻目は根元まで深く刻んでいる。187は白色砂粒、金雲母を少量含み、外面はにぶい黄褐色、内面は灰褐色を呈する。188・189は少量の白色砂粒、金雲母を含み、188は内外面黒色、189は外面灰褐色、内面ににぶい黄褐色を呈する。190は口縁部に突帯を巡らせ、根元までの深い



第35図 下層の包含層出土遺物実測図② (1/4)

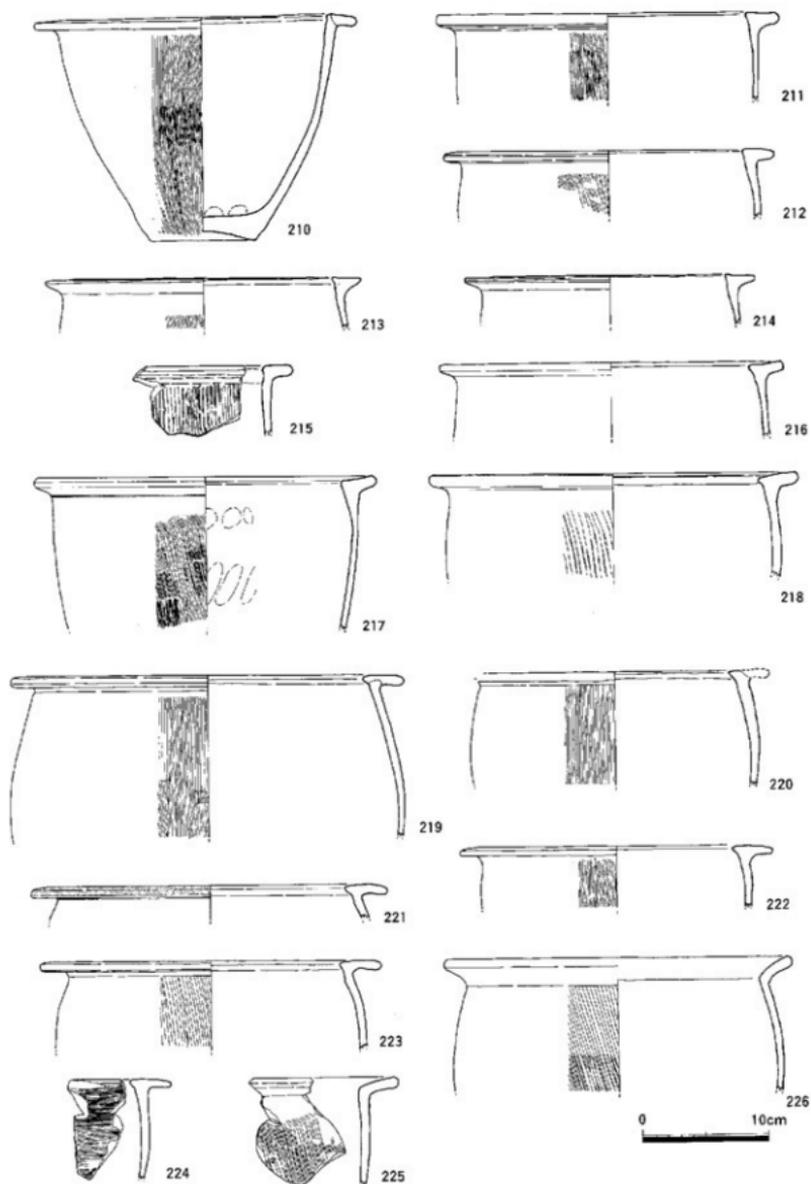
0 10cm

刻みを施す。外面は口縁部付近は横方向、中位は斜方向の条痕が残る。内面はナデで調整する。白色砂粒、金雲母を含み、にぶい橙色を呈する。191は根元までの深い刻目を施す。外面は板ナデ、内面はナデで調整する。外面は褐色、黒褐色、内面はにぶい灰褐色を呈する。白色砂粒をわずかに含む。192は突帯に中位までの刻みを施す。内外面ナデ調整である。金雲母をわずかに含み、橙色、にぶい橙色を呈する。193は断面三角形の突帯に浅い刻目を施す。外面は横方向の刷毛目状の工具、内面は横方向の板ナデで調整する。細かい金雲母、白色砂粒を多く含み、にぶい黄褐色を呈する。194はきちんと整形されていない突帯に浅い刻目を施す。外面口縁部は黒色、下位は黒褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。195は太い突帯に根元までの刻目を施す。内外面板ナデで調整する。白色砂粒を多く含み、外面

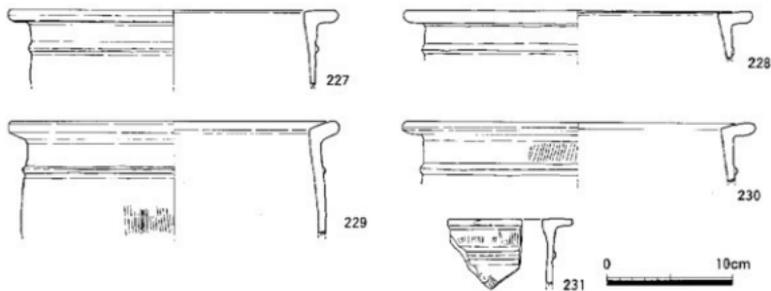
はにぶい黄褐色、内面は黄褐色を呈する。

196~209は如意状の口縁をもつ甕の口縁部片である。196~206・209は刻目をもち、207・208は刻目が施されていない。196~198は口縁部が緩やかに外反する。196・197は密なやや深めの刻目が施される。196は復元口径24.8cm、197は25.4cmを測る。ともに外面はナデ、内面は斜方向の刷毛目の後、指ナデで調整する。明褐色を呈し、197の外面には煤が付着する。198は浅い刻目を施し、外面上位は縦方向、下位は斜方向の刷毛目で調整する。内面は指ナデである。白色砂粒、金雲母を多く含み、外面はにぶい黄褐色、一部黒色、内面は口縁部付近は橙色、下位は灰褐色を呈する。199は口縁部が長く外反する。口縁部下に浅い刻目が施される。外面はナデ、内面は縦方向の指ナデで調整される。胎土は精良で、白色砂粒、金雲母をわずかに含み、内外面にぶい黄褐色を呈する。200は口縁部が強く外反し、密な浅い刻目が入る。外面は横方向の板ナデ、内面は縦方向の指ナデで調整する。金雲母、角閃石、白色砂粒を含み、外面は灰褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。201は口縁部が短く、強く外反する。口縁部下には板の小口痕が残る。口縁部内面は横方向の刷毛目、胴部内面はナデで調整する。白色砂粒、金雲母を多く含み、外面は灰褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。202は口縁部下に浅い刻目が残る。外面は磨滅し、調整不明である。内面の口縁部付近には横方向の刷毛目、胴部内面には指押さえが残る。白色砂粒を多く含み、外面は灰褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。203の口縁部は外に短く外反する。刻目はやや深く、密に施している。細かい砂粒を多く含み、外面はにぶい橙色、内面はにぶい灰褐色を呈する。204は口縁部下に雑な刻目を施し、口縁部は縦方向の刷毛目、下位は斜方向の刷毛目で調整する。内面には指押さえが残る。金雲母、白色砂粒を多く含み、外面はにぶい黄褐色、内面は橙色を呈する。205は口縁部に間隔の密な鋭い刻目を施す。外面は磨滅のため調整不明、内面は指押さえの跡が残る。白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。206は口縁部が強く直線的に外反する。口縁部下は横方向のナデ、胴部外面は斜方向の刷毛目、内面は指ナデで調整する。207は胴部が丸味をもって立ち上がり、口縁部が緩やかに外反する。復元口径は22.2cmを測る。外面は磨滅し、調整不明である。内面は指ナデが残る。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多く含み、内外面にぶい橙色を呈する。208も口縁部が緩やかに外反する。外面口縁部付近はナデ、内面はナデで調整される。胴部外面は磨滅し、調整不明である。白色砂粒、赤褐色粒、金雲母を含み、外面はにぶい橙色、内面はにぶい褐色を呈する。209は肩部でやや屈曲し、口縁は緩やかに外反する。器壁は厚く、口縁部と肩肌曲部に刻目を施す。外面は横方向の刷毛目、内面は斜方向の刷毛目で調整される。金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。

210~231は逆L字状口縁をもつ甕である。210は復元口径25.4cm、底部径8.4cm、器高18.1cmを測る。外面は口縁部下から縦方向の刷毛目、内面はナデ、底部付近は指押さえが残る。底部は上げ底である。白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。211は口縁部中央を強く指ナデしている。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。白色砂粒を多く含み、外面は赤褐色、内面は赤色を呈する。212は口縁部内側に明瞭な稜線が残る。白色砂粒をわずかに含み、橙色を呈する。213・214は上面が強い指ナデのため、「凹」状に窪む。細かい金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。215は内面口縁部下を強く指ナデし、「凹」状に窪んでいる。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで調整する。赤褐色粒、白色砂粒を含み、外面は黄褐色、内面はにぶい黄褐色を呈する。216は金雲母、白色砂粒をわずかに含み、内外面橙色を呈する。全面ナデ調整である。217・218は厚く、口縁部はやや内傾する。217の外面は細かい縦方向の刷毛目、内面は指押さえ、口縁部はナデで調整される。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含み、外面灰褐色、内面褐色を呈する。218は外面縦方向の刷毛目、内面ナデで調整する。細かい粒子を含み、明褐色を呈する。219~224の口縁部はやや丸味をもつ。219の胴部は丸味をもち、外面は縦方向の刷毛



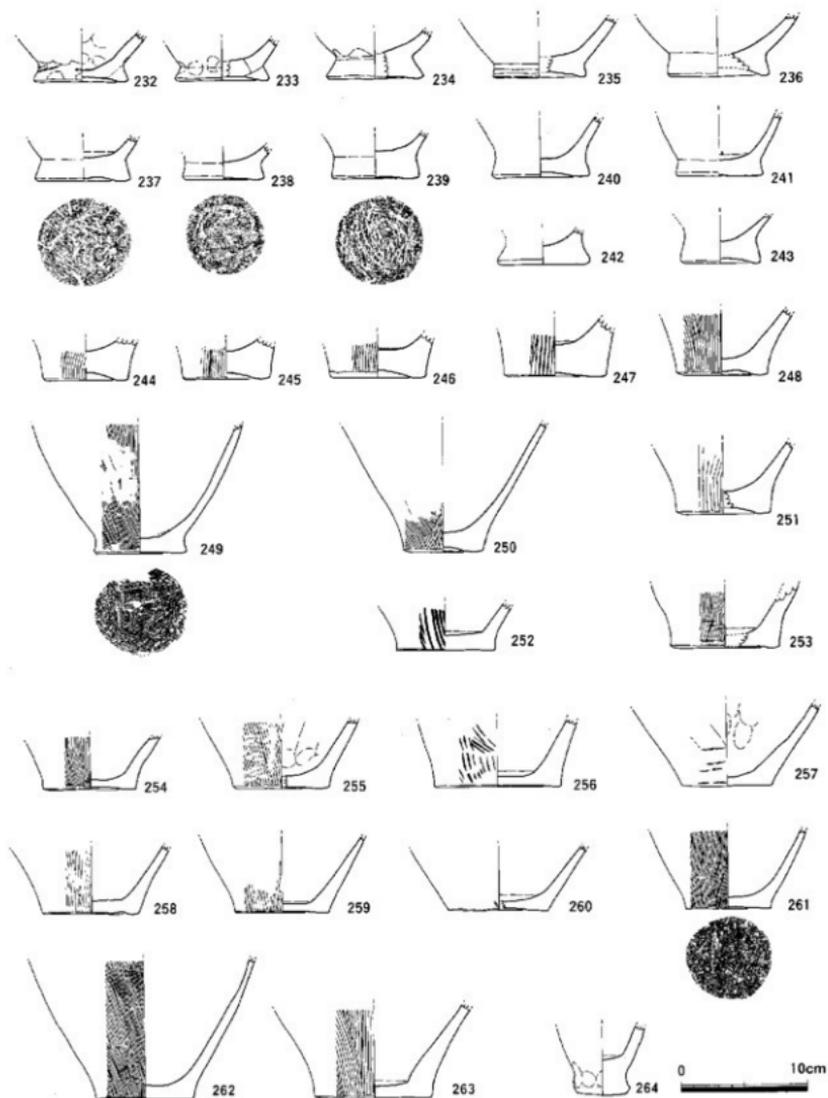
第36図 下層の包含層出土遺物実測図③ (1/4)



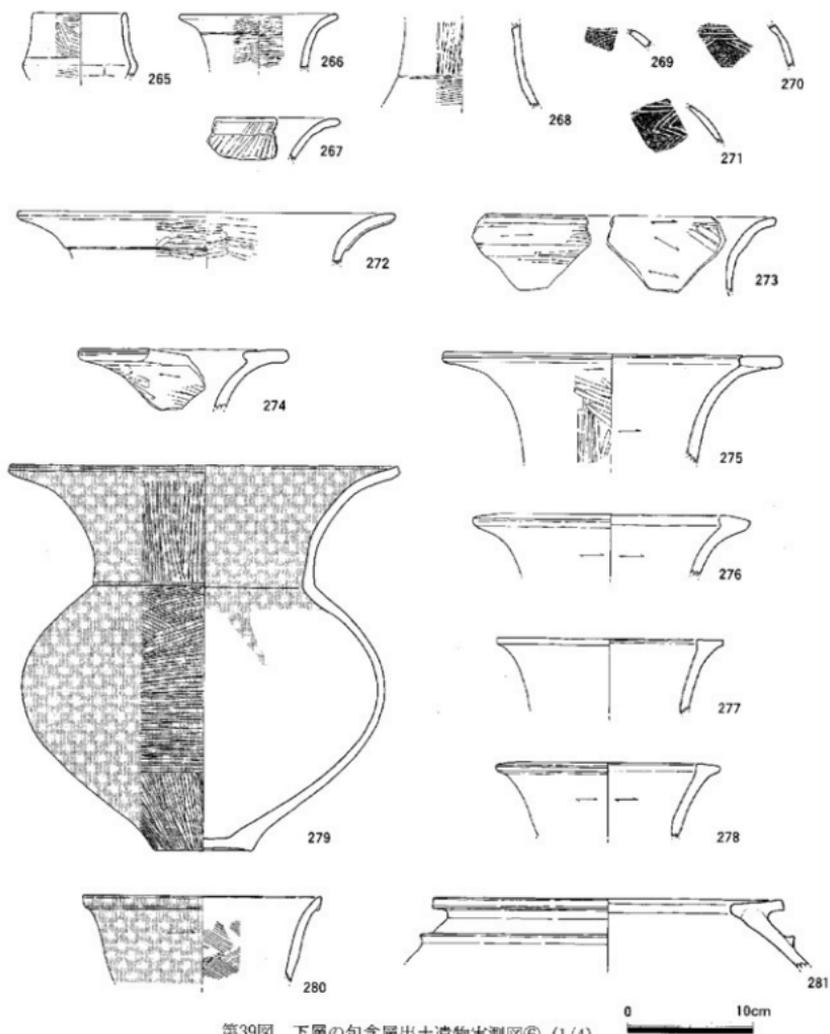
第37図 下層の包含層出土遺物実測図④ (1/4)

目、内面はナデで調整される。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、内外面にぶい黄褐色を呈する。221は口縁部上面に赤色顔料が残る。金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。224は口縁端部がやや下方へ下がる。外面は横方向の刷毛目、内面はナデで調整する。細かい金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、ぶい灰褐色を呈する。外面口縁部直下には煤が付着する。225・226は口縁部が「く」の字状を呈する。225は金雲母、白色砂粒を含み、灰橙色を呈する。内面は一部灰色である。226は口縁部直下と胴部下半に煤が付着する。金雲母、白色砂粒を多く含み、外面は黄色、黄褐色、内面は灰橙色を呈する。227～231は逆L字状口縁をもち、口縁部下に突帯を巡らすものである。227・228は口縁部上面がほぼ水平で、金雲母、白色砂粒を含み、橙色を呈する。ナデ調整である。229・230は口縁部がやや内傾する。229は白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。230は口縁部と突帯の間に縦方向の刷毛目が残る。金雲母を含み、胎上は精良である。外面は灰褐色、内面は明橙色を呈する。231は器壁が薄く、外面には縦方向の刷毛目が残る。内面はナデで調整する。

232～264は甕の底部片である。232～243は円盤状の底部をもつもので、底部と胴部のつなぎ目は指押さえて調整する。底部内面は指ナデである。他は板ナデ、ナデで調整する。232・233・245・246・240・243はやや上げ底気味である。他はほぼ平底を呈する。いずれも金雲母、白色砂粒を含み、237・242は赤褐色粒、238・240は角閃石も含む。232・237は灰褐色、233・235・241・242は棕色、243は赤色を呈する。それ以外にはぶい黄褐色を呈する。244～246・248・250・251は上げ底を呈し、他は平底を呈する。外面は刷毛目、内面はナデ、部分的に指押さえて調整する。252・256の外面は粗い刷毛目で調整される。底部はほとんどがナデで調整をおこなうが、249は板ナデ、261は強いナデのため擦痕が残る。金雲母、白色砂粒を含み、247・255・258～260は赤褐色粒、257は角閃石を含む。262の底部外面には煤が付着する。263は内底部に焦げが残る。内面は大部分が剥落し、調整不明である。外面の色調は244が褐色、245～247・251・258・259は明橙色、248・249・254～257・262・263は橙色、250は赤色、252・253・260にはぶい橙色、261は黒色を呈する。264はミニチュア土器の底部片である。丸味をもった底部はナデ、外面は指ナデ、内面はナデで調整する。外面には部分的に赤色顔料が残る。胎上には赤褐色粒、白色砂粒を含み、橙色を呈する。外面は一部黒色である。281は口縁が内傾し、体部に丸味をもつ大型の甕である。口縁部下に1条の三角突帯を巡らす。復元口径は28cmを測る。金雲母、白色砂粒をわずかに含み、橙色を呈する。

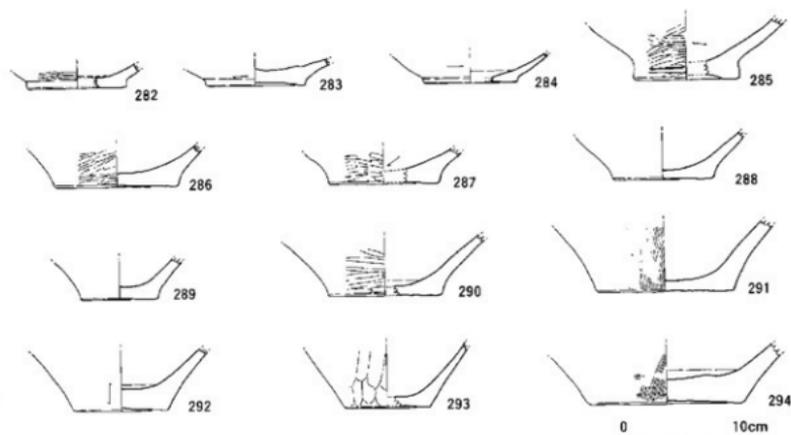


第38図 下層の包含層出土遺物実測図⑤ (1/4)



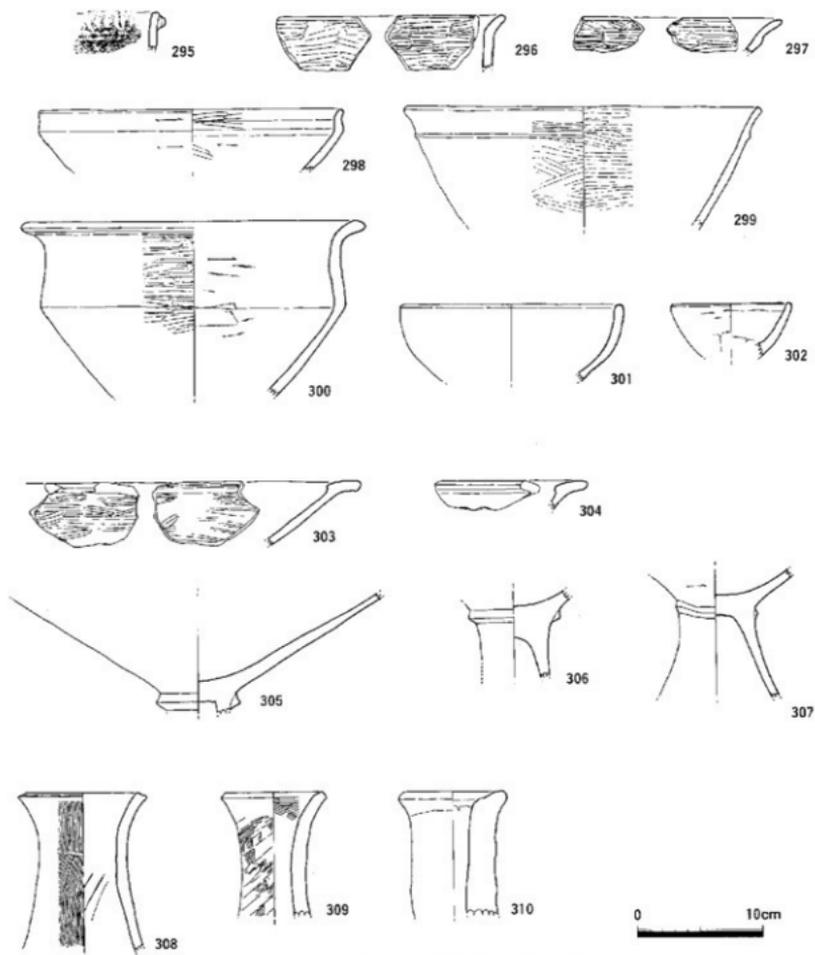
第39図 下層の包含層出土遺物実測図⑥ (1/4)

265～280・282～294は壺である。265は胴部で屈曲し、上すほまりで頸部は立ち上がる。口径10.4cmを測る。外面は黒色を呈し、細かな研磨がおこなわれる。研磨の方向は口縁部が横方向、頸部が斜方向、胴部が横方向である。内面は板ナデ、ナデで調整する。白色砂粒を多く含み、内面はにぶい橙色、黒色を呈する。266は頸部から口縁部が緩やかに外反する。口縁部下には1条の沈線が巡る。内外面研磨で調整する。白色砂粒、金雲母を多く含み、外面は灰褐色、内面は黒色を呈する。267は大きく外反



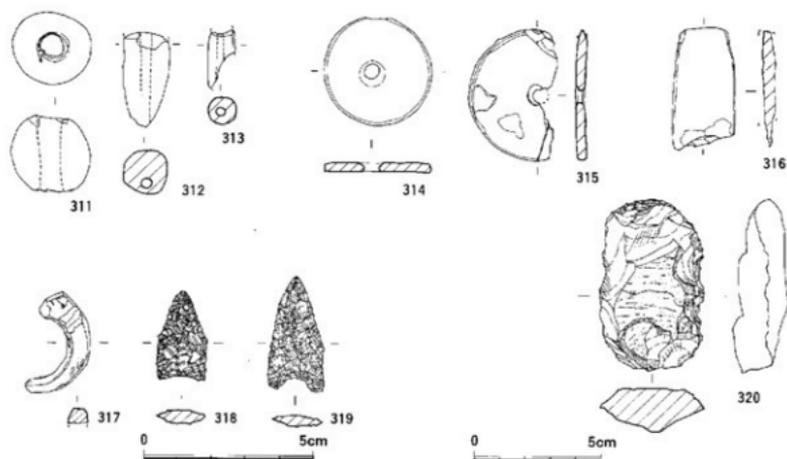
第40図 下層の包含層出土遺物実測図⑦(1/4)

する口縁部をもつ。口縁部下には2ヶ所、沈線状の強いナデをおこなっている。外面は縦方向の大きな研磨をおこなう。白色砂粒を多く含み、外面にはぶい褐色、内面は灰褐色、黒色を呈する。268は頸部片である。頸部下位には雑な沈線を途切れ途切れに巡らす。外面上位は縦方向の研磨、下位は横方向の研磨を施す。上位のナデは下位に比べ細かい。内面はナデで調整する。金雲母、白色砂粒を含み、外面は褐色、一部明褐色、内面は明橙色を呈する。269~271は胴部片である。269は1条の沈線の下に弧文をヘラで描く。胎土は精良で、にぶい橙色を呈する。一部黒色である。270は3条の沈線の下に斜線を描く。外面は細かい研磨調整、内面はナデである。胎土は精良で、にぶい橙褐色を呈する。271は3条の沈線の下に波状文をヘラで描く。胎土は白色砂粒をわずかに含むが精良で、外面は明橙色を内面は灰黒色を呈する。272は口縁部片で、復元口径29.8cmを測る。頸部と口縁部との境界部で外方へ強く湾曲し、粘土を貼付して肥厚させた幅広い口縁部である。内外面は横方向の研磨を施す。内外面ともに明橙色を呈する。胎土には金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含む。273は口縁部片で、口縁部は緩やかに外反し、頸部付近に強いナデをおこない、粘土を貼付して肥厚させた幅広い口縁部を真似ている。内外面は横方向の研磨を施す。胎土には金雲母、白色砂粒を含み、内外面ともに明橙色を呈する。274~278は逆L字状口縁をもつ壺である。274の口縁部上面はわずかに内傾する。外面は横方向の研磨がみられる。内面はナデ調整である。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含み、灰褐色を呈する。275の口縁上面はほぼ水平で、外面には一部斜方向、縦方向の研磨がみられる。内面はナデ調整である。赤褐色粒を多く含み、黄橙色を呈する。外面は一部灰褐色である。276は口縁上面がやや外傾する。器壁が厚く、口縁部も短い。白色砂粒を多く含み、外面は明橙色、内面は橙色を呈する。外面は研磨痕がみられるが、大半が磨滅している。277の口縁部上面は水平で短い。白色砂粒、金雲母を多く含み、外面は明橙色、内面は橙色を呈する。278は復元口径17.8cmを測る。白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。279は広口壺である。胴部が張り、頸部で屈曲して大きく口縁の外に開く。口縁端部はやや内傾し、端部外面は横ナデにより、「凹」状に窪む。口縁部外面は横方向の研磨、胴部外面は上位が斜方向、中位から下位にかけては横方向、底部外面は縦方向の研磨である。口縁部外面には縦方向の暗文が施される。口縁部内面は横方向の細かい研磨、胴部内面から底部にかけてはナデで調整される。外面には赤色顔



第41図 下層の包含層出土遺物実測図⑧ (1/4)

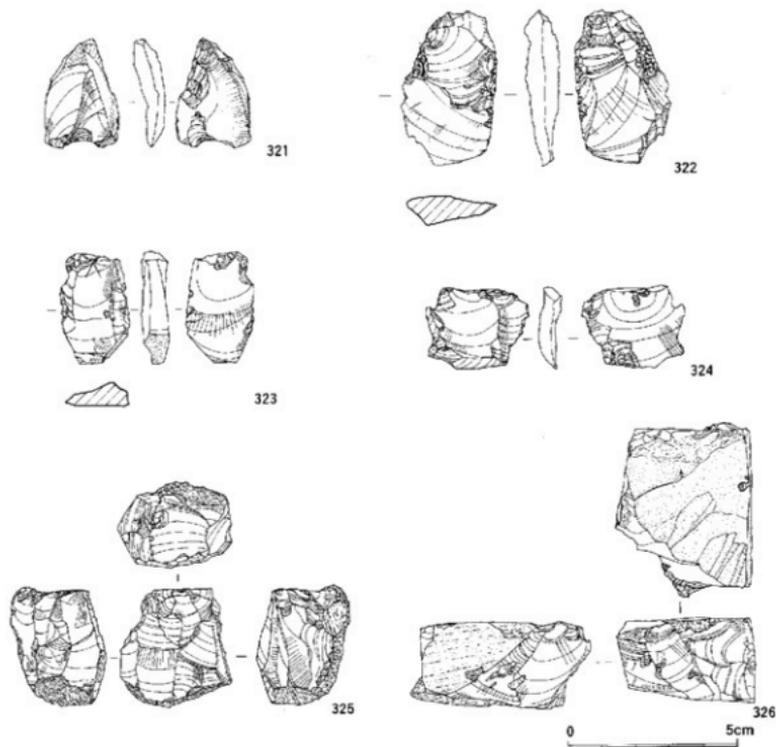
料が全面に塗布され、内面は頸部付近まで塗布されたものが胴部中位まで垂れている。底部は塗布されていない。少量の金雲母、多量の白色砂粒を含み、胎土は浅黄褐色を呈する。口縁部内面には黒斑がみられる。口径30.8cm、底径7.8cm、器高31cmを測る。280は緩やかに開いた口縁端部に三角突帯を巡らす。外面は横方向の研磨、内面は口縁部はナデ、頸部は斜方向の刷毛目で調整される。外面には赤色顔料の付着がある。角閃石、金雲母、白色砂粒を含み、外面は灰褐色、内面は橙色を呈する。282～294は底部片である。282・284は円整貼り付け状をなす。外面は横方向の研磨、内面はナデと思われる



第42図 下層の包含層出土遺物実測図⑨ (1/2・2/3)

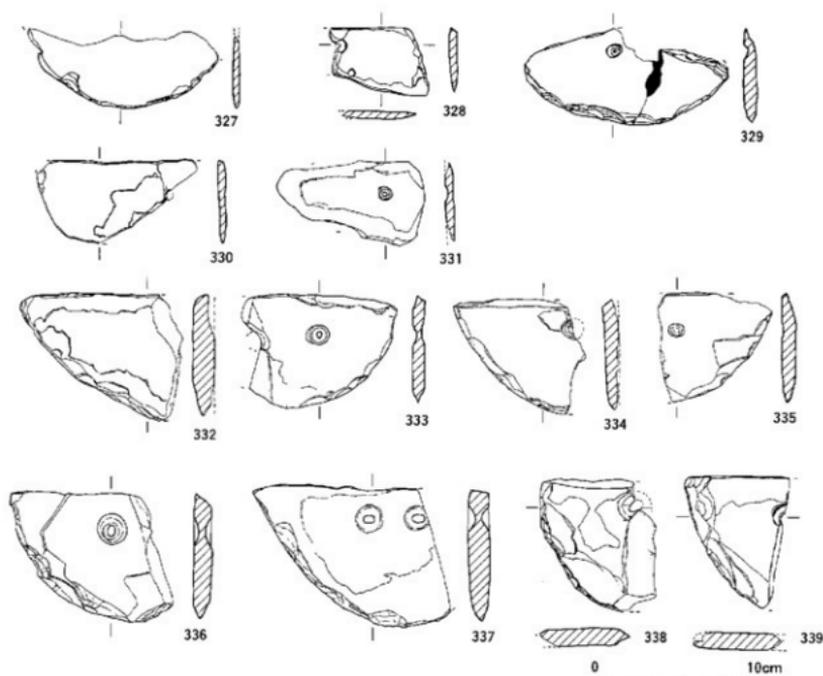
が、磨滅している。胎土は精良で、細かい金雲母、白色砂粒を含む。外面は黒色、灰褐色、内面は橙色を呈する。283はやや上げ底状をなす。外底部は強いナデ、他は磨滅している。白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。285は円整貼り付け状で、やや上げ底を呈する。胴部外面は研磨調整、内面底部はナデである。白色砂粒を含み、外面は灰褐色、内面は暗褐色を呈する。286～294は平底である。286・287は外面に研磨調整が残る。286の内面は磨滅し、287の内面はナデで仕上げる。ともに白色砂粒を含み、286は明橙色、287は橙色を呈する。287の外底部付近には赤色顔料の痕跡がある。288は磨滅が著しく、調整不明である。大粒の赤褐色粒、白色砂粒を含み、内外面橙色を呈する。289は外面に一部研磨痕が残るが、磨滅している。内面はナデで調整する。外面は白橙色、内面は黒色を呈する。290は底部と胴部が接する付近に一部縦方向の刷毛目が残る。胴部は横方向の研磨調整である。白色砂粒、金雲母を多く含み、外面は橙色、内面は灰黒色を呈する。291は胴部外面は刷毛目、内面底部はナデで調整する。赤褐色粒、白色砂粒を含み、内外面橙色を呈する。292は金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多く含み、外面はにぶい黄橙色、内面は赤褐色を呈する。293は胎土が精良で、金雲母、白色砂粒を少量含み、内外面丁寧なナデ、指ナデで調整する。色調は明橙色を呈する。294は大型のもので、磨滅している。外面には一部刷毛目の痕跡がある。赤褐色粒、白色砂粒を含み、内外面明橙色を呈する。

295～300は鉢である。295は刻目突帯文土器の深鉢の口縁部片である。土めの突帯を貼り、刻みを中位まで入れる。内外面板ナデで調整する。金雲母、白色砂粒を含み、外面は灰褐色、内面は橙色を呈する。296は直線的に延びた胴部が口縁部で外反する。内外面横方向の研磨で調整する。金雲母、白色砂粒を含み、外面は白橙色、内面は黒色を呈する。297は浅鉢で、内外面は横方向の研磨で調整される。金雲母、白色砂粒を含み、灰褐色を呈する。298は口縁端部が外反する。白色砂粒を含み、外面は灰褐色を呈する。外面には一部研磨が残る。299は屈曲部分に、強いナデで三角突帯をつくり出す。口縁部はわずかに外反する。内外面は横方向の研磨で調整される。白色砂粒を含み、外面は暗褐色、内面は灰褐色を呈する。300は胴部で屈曲し、内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する。内外面横方向の研磨で調整する。復元口径27cmを測る。白色砂粒を多く含み、暗褐色、灰褐色を呈する。301・302は碗



第43図 下層の包含層出土遺物実測図⑩ (2/3)

である。ともに口縁部は内湾する。301は白色砂粒を多く含み、白橙色を呈する。磨滅し、調整は不明である。302の口縁部は強い指押さえて整形する。内外面はへらナデで調整する。赤褐色粒、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。内面は一部黒色である。303～307は高坏である。303～305は坏部で、口縁部は大きく開き、屈曲せずに肥厚する。303は内外面研磨調整が残る。金雲母、白色砂粒を多く含み、灰橙色を呈する。304は磨滅し、調整不明である。金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を多く含み、橙色、灰橙色を呈する。305は脚部と坏部の接合部に断面三角形の突帯を巡らす。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。磨滅し、調整は不明である。306・307も脚部と坏部の接合部に断面三角形の突帯を巡らす。306は細身の脚部、307は太めで膨らみを帯びている。ともに金雲母、赤褐色粒、白色砂粒を含み、外面明橙色、内面灰褐色を呈する。308～310は器台である。308は器壁が薄く、口縁端部は横ナデにより「凹」状に窪んでいる。外面は刷毛目、内面はナデで調整し、内面には工具の小口痕が残る。309の外面は強い横ナデで器面は凸凹を呈する。斜方向の刷毛目が残る。内面は口縁部付近は刷毛目、胴部はナデで調整する。310は器壁が厚く、口縁部はわずかに外反する。全面指ナデ、指押さえて調整する。ともに大粒の白色砂粒、金雲母を多く含み、309は明橙色、310は橙色を呈する。

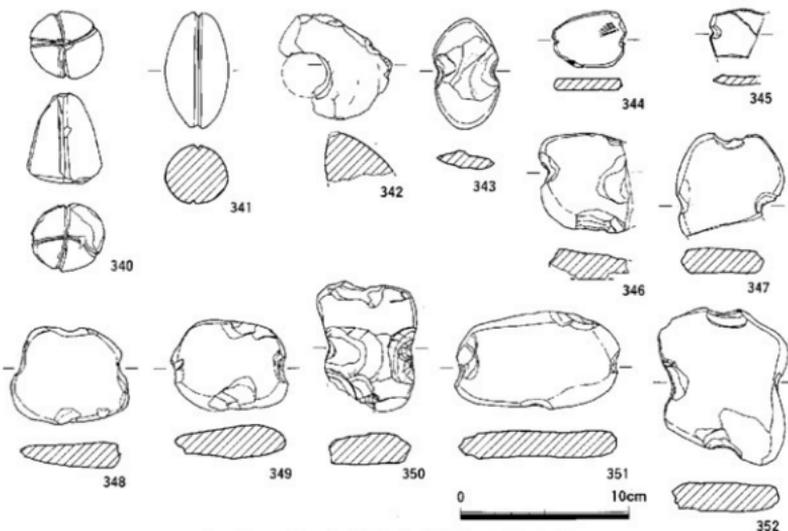


第44図 下層の包含層出土遺物実測図① (1/3)

311～313は土錘である。311は球状を呈し、長さ3cm、径3cm、穿孔径は8mmを測る。重量は23.97gを量る。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含み、褐色、一部黒色を呈する。312・313は管状土錘で、半分欠損する。白色砂粒、金雲母を含み、明褐色を呈する。312は7.89+ α g、313は1.77+ α gである。314・315は石製の紡錘車である。314は砂岩製で、表面が剥落している。穿孔は一方に偏っている。径は4.2cm、厚さ0.35cmを測る。重さは10.04+ α gである。315は粘板岩製で、径5.3cm、厚さ0.4cmを測る。重さは12.49+ α gである。周縁、側縁には研磨痕が残る。表面は剥落する。ともに両面穿孔である。316は扁平片刃石斧の基部片である。基端部、側面には研磨痕が残る。基部最上部にはわずかな挟りが入る。317は滑石製の勾玉である。方状の頭部に緩やかに湾曲する尾がつく。長さは3cm、断面径は0.6cmを測る。穿孔は行われず、整形の丁寧な研磨も施されていない。丸味を帯びず、まだ面が残る。頭部と頸部には古い傷が残る。重さは2.28gを量る。318・319は石鎌である。318は黒曜石製で、黒色を呈する。基部はわずかに挟りが入る。基部上部に突起が対象に付く。長さ2.7cm、幅1.45cm、厚さ0.45cmを測る。重さは1.59gである。319は安山岩製で、基部上部にはわずかな突起が付く。基部は「凹」状に挟りを入れる。長さ3.5cm、幅1.6cm、厚さ0.35cmを測る。重さは1.88gである。320はスクレーパーで、古銅輝石安山岩製である。表面には自然面が残る。側面、上面には剥離が施される。長さ6.9cm、幅4.1cm、厚さ1.8cmを測り、59.55gを量る。

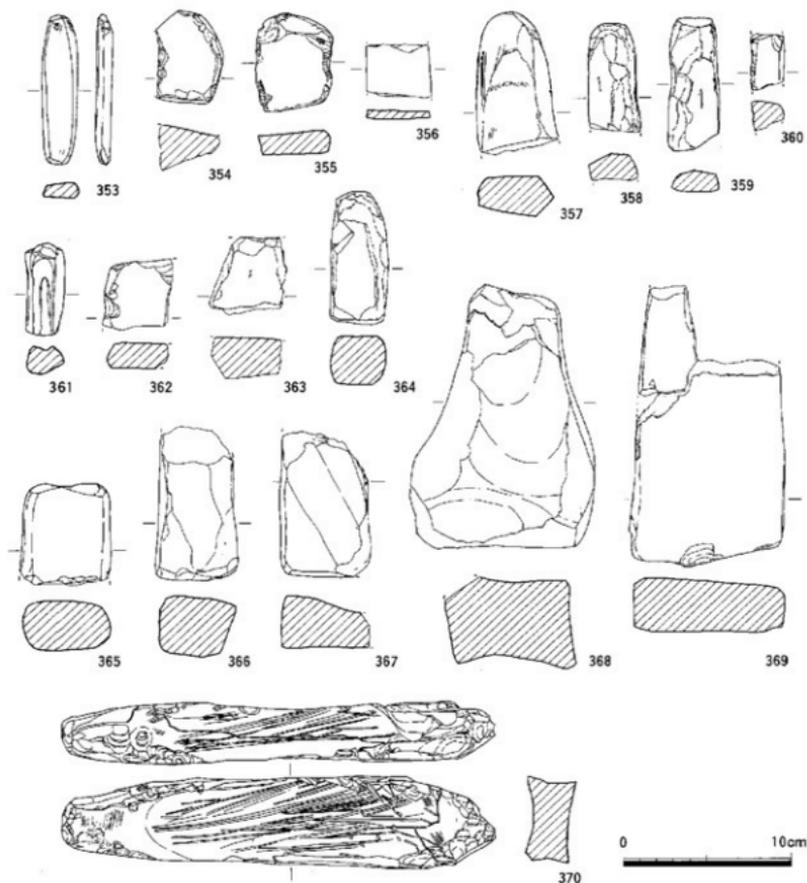
321~326は黒曜石である。321は石鏃の未製品である。黒色を呈し、不純物を含む。基部は両面から剥離を行い、抉りをいれている。腹面左縁辺は刃部をつくる剥離をおこなっている。長さ3.3cm、幅2.2cm、厚さ0.8cmを測る。重さは4.36gを量る。322は使用痕のある剥片である。不純物、白色砂粒を少量含み、黒色を呈する。背面遠端部右側には自然面が残る。自然面の状況から原石は角礫と思われる。打面と背面右側には多くの敲打痕が残る。腹面の右側、左側と背面の左側は剥離を施している。長さ4.6cm、幅2.7cm、厚さ0.9cmを測り、重さは10.37gである。323は使用痕のある剥片である。打面と遠辺には自然面が残る。自然面の状況から322と同様、原石は角礫と思われる。腹面の右縁辺基端部には抉り状の剥離をおこなっている。背面左側、腹面左側、右側には剥離が施される。打点からの打撃裂痕がみられる。長さは3.3cm、幅2cm、厚さ0.7cmを測り、重さは4.89gである。324は剥片である。不純物をほとんど含まず、黒色を呈する。打面には敲打痕が多く残る。腹面遠辺に剥離がみられる。長さ2.5cm、幅3cm、厚さ0.5cmを測り、重量は3.58gを量る。325・326は石核である。325は自然面が残る、自然面は海綿状を呈する。不純物をほとんど含まず、断口の色調は漆黒色を呈する。打面には多くの敲打痕が残り、リングは一部階段状を呈する。剥離は自然面からも一部行われている。長さ3.6cmを測り、重量は35.18gである。326は角礫で、白色砂粒を含み、断口の色調は漆黒色を呈する。縦長のものを横方向から剥いでいる。打面の周縁には多く敲打痕が残る。剥離の方向は一定ではない。長さ5.3cm、幅4.1cm、厚さ2.5cmを測り、重さは70.17gである。

327~339は石包丁の未製品、欠損品である。すべて砂岩製で、表面の剥落が著しい。327の刃部は半月形をなし、両面から剥離を行う。穿孔されていない。長さ11.2cm、幅4.4cm、厚さ0.4cmを測り、重さは26.83gである。328は穿孔が1ヶ所残る。両面穿孔で、貫通する前に欠損したと思われる。背部は直線的である。厚さは0.5cmを測り、重量は15.26g+ α gである。329は杏仁形を呈し、一部欠損する。刃部は両面から整形する。穿孔は1ヶ所遺存し、片側から敲打するが、反対側からの穿孔はみられない。長さは12cm、幅5.7cm、厚さ0.8cmを測る。重さは70.33+ α gである。330は穿孔部で欠損する。裏面は大きく剥落し、状況は不明である。背部は直線的である。331は穿孔が1ヶ所、片面からのみ遺存する。裏面は大きく剥落する。332~339は大型の石包丁である。332は背部は直線的、刃部は半月状を呈する。半分欠損する。刃部は両面から調整する。穿孔はみられない。現存長9.5cm、幅7.6cm、厚さ1.3cmを測り、重さは111.82+ α gである。333は穿孔部で欠損している。2ヶ所穿孔がみられ、1ヶ所は両面から行いが、貫通していない。もう1ヶ所は破面で両面穿孔が確認できる。背部は直線的、刃部は半月状で、両面から剥離を施す。現存長9.2cm、幅6.8cm、厚さ0.7cmを測り、重さは73.91+ α gである。334は穿孔部で欠損する。両面穿孔で、貫通する前に欠損している。刃部は両面から作りだし、背部は直線状で、斜めに折れている。現存長6.8cm、幅6.9cm、厚さ0.7cmを測り、重さは557.90+ α gである。335は穿孔が1ヶ所残る。背部には差な研磨の痕跡がみられる。刃部は両面から剥離し、穿孔は片面からの穿孔途中で終わっている。長さ6.7cm、幅6.5cm、厚さ0.8cmを測り、重さは48.71+ α gである。336は2ヶ所穿孔が残る。1ヶ所は両面穿孔の途中で、もう1ヶ所は片面からの穿孔は確認できるが、反対側は欠損しているため不明である。穿孔途中で欠損したと思われる。穿孔の間隔は0.8cmを測る。刃部は両面から整形する。長さは9.6cm、幅7.8cm、厚さ1.1cmを測り、重さは104.12+ α gである。337は2ヶ所穿孔が残る、どちらも両面穿孔で、貫通していない。穿孔間の距離は1.3cmである。刃部は両面から剥離を行うが、背部付近はまだおこなわれていない。背部は敲打で成形する。現存長11.6cm、幅8.5cm、厚さ1.3cmを測り、重さは157.58+ α gである。338・339は穿孔部が1ヶ所認められ、どちらも穿孔部で欠損する。刃部は両面から剥離を行う。338は貫通し、339は途中である。339の背部は直線的な自然面を利用している。



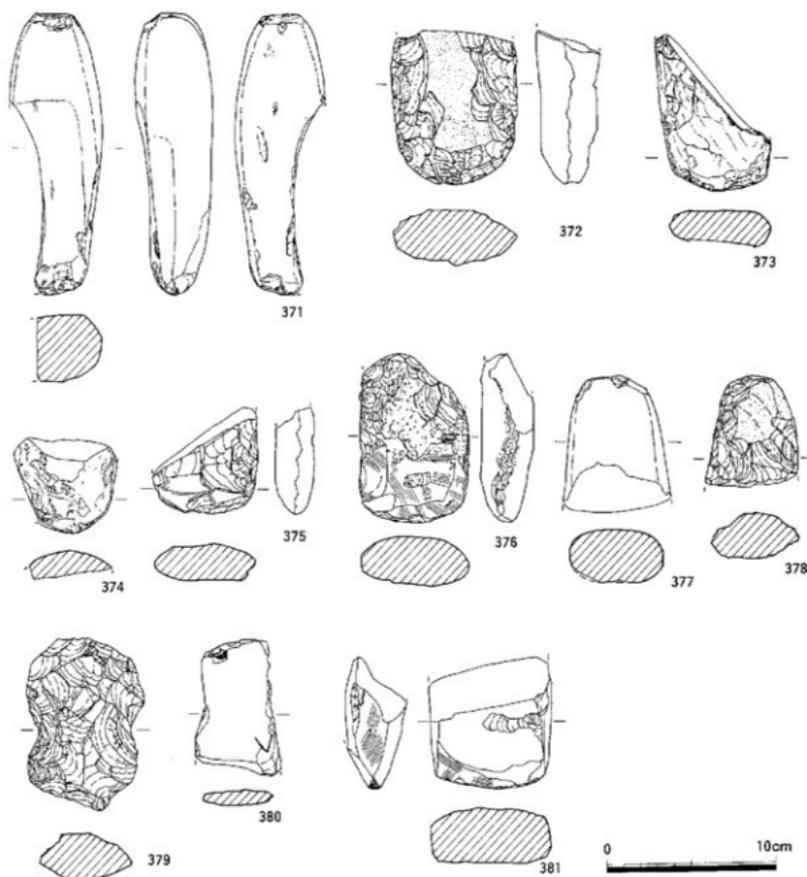
第45図 下層の包含層出土遺物実測図⑫ (1/3)

340～352は石錘である。340は滑石製で先端は尖り、円錐形を呈し、基部は凸レンズ状をなす。十字に溝が配される。溝は雑に削られ、二重になる部分がある。粗い研磨が施される。高さは5.4cmを測り、113.66gを量る。341は滑石製で、紡錘形のものに1条の沈線を巡らす。丁寧に研磨が施される。高さは6.9cmで、119.92gを量る。342は環状の石錘と考えられる。孔の部分のみの遺存で、端部には紐ずれのあとがみられる。83.90+ α gを量る。343～352は打欠石錘である。343は砂岩製で、扁平な紡錘形の側面に挟りが入る。両面からの剥離が施される。研磨痕は確認できないが、丁寧に整形されている。長さ6.6cm、幅3.8cm、厚さ1cmを測り、重さは42.43gである。344は粘板岩製で、隅丸長方形の短軸側の中央に挟りが入る。左側は鋭利な工具で溝状に挟りを入れている。周縁、表面には擦痕が確認できる。長軸方向4.2cm、短軸方向3.3cm、厚さ0.7cmを測り、重さは16.89gである。345は砂岩製で、右側は鋭利な挟りが入る。上面もわずかに窪んでいる。現存で7.53+ α gを量る。346～352は玄武岩製である。346は右側が一部欠損する。左側の挟りは深く、両面から穿孔している。上下の挟りは浅い。現存長5.3cm、幅5.8cm、厚さ1.6cmを測り、重さは72.40+ α gである。347は一部欠損し、3方向に深い挟りが入る。両面からである。現存長6.1cm、幅6.3cm、厚さ1.4cmを測り、重さは78.65+ α gである。348は4ヶ所挟りが入り、左右、下面は両面から剥離をおこなうが、上面は片面からで、浅い。長さ6.9cm、幅5.8cm、厚さ1.5cmを測り、重さは95.82gである。349の4ヶ所の挟りはいずれも浅い。左右、下端は両面から剥離するが、上面はわずかな挟りである。長さ6.8cm、幅5.4cm、厚さ1.9cmを測り、重さは101.50gである。350は一部欠損する。上、右面は両面から剥離をおこなう。左面は片面のみである。現存長7.6cm、幅5.8cm、厚さ1.9cmを測り、重さは138.44+ α gである。351は長方形を呈する。4ヶ所挟りが入り、いずれも浅い。両面から剥離を行う。長さ9.5cm、幅5.9cm、厚さ1.5cmを測り、重さは150.20gである。352は扁平な形状を呈し、4ヶ所に深い挟りを入れる。挟りは両面から剥離をおこなう。長さ9.4cm、幅7.75cm、厚さ1.7cmを測り、重さは215.23gである。



第46図 下層の包含層出土遺物実測図㊦ (1/3)

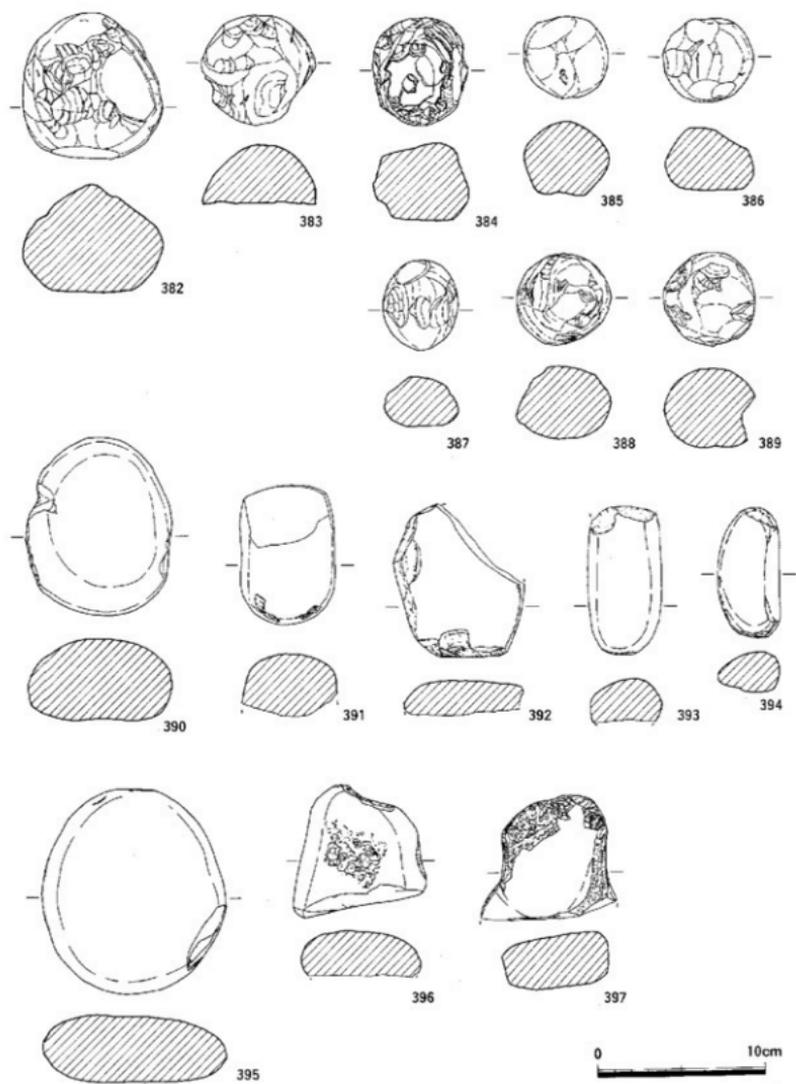
353～370は砥石である。353は粘板岩製で、側面はよく研磨されている。上下端は敲打した痕跡が残る。砥面には鋭い擦痕がみられる。354は擦り石の転用品と考えられる。側縁は一部研磨が施されるが、それ以外は剝離で調整されている。側縁には擦痕がみられる。355は粘板岩製で、表裏面と側縁の一部で研磨がみられる。右上面は有溝砥石状に窪み、砥面には鋭い擦痕が入る。側縁は様々な角度で使用される。356は黄色を呈した粗い砂岩製で、側面に研磨が残る。357は細粒砂岩製で、特に表裏面をよく使用する。砥面には鋭い擦痕が残る。358・359は砂岩製で、砥石として利用したあと、側面、端部を敲打具として使用する。360は粘板岩製で、小破片である。361は有溝砥石である。粗い砂岩製で、幅6mm前後、深さ2mm程、溝状に窪んでいる。362は細粒砂岩製で、一辺は挟り状に窪んでいる。363は粗い砂岩製である。364・365は砂岩製で砥石として利用したあと、叩き石に転用する。砥面はわずが



第47図 下層の包含層出土遺物実測図④(1/3)

に窪む。365は敲打により上面は凹状に窪み、裏面は敲打痕が残る。366は砂岩製で、紙面は凹状に窪み、火を受けた痕跡が残る。367は極めて細かい砂岩製で、研磨により大きく凹状に窪む。368は砂岩製で、特に上下面の窪みは大きい。369は玄武岩製で、方形を呈する。部分的に研磨痕が残るが、ほぼ平坦を呈する。370は粘板岩製で、長さ25.5cm、幅5.4cm、厚さ3.6cmを測る。上下面はよく使用され、凹状を呈する。端部には剥離による調整、敲打痕が残る。径5~8mm程の穿孔がみられる。

371~381は石斧である。371は玄武岩製で、刃部を一部欠損する。上面と側面には一部研磨のため窪んでいる。整形は敲打によりおこなわれる。長さ16.8cm、幅5.3cm、厚さ4cmを測る。残存で重さは541.23gを量る。372は基部を欠損する。表面には自然面が残る。表面の周縁には細かい剥離調整を施す。裏面の調整は大きく、雑である。現存長 $9.2 + \alpha$ cm、幅7.4cm、厚さ3.7cmを測り、重さは $345.32 + \alpha$ gで



第48図 下層の包含層出土遺物実測図(1/3)

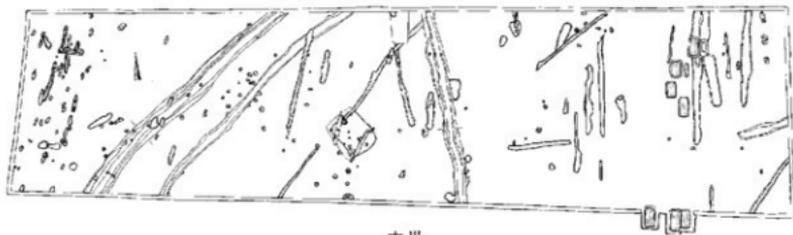
ある。373は灰色を呈する粘板岩製で、基部と裏面刃部は欠損する。表面、周縁には細かい敲打調整が残る。現存長 $9.3 + \alpha$ cm、幅6.3cm、厚さ2cmを測り、重さは $162.64 + \alpha$ gである。374は粒状砂岩製の刃部片である。表面には敲打痕が残る。刃部先端、側面には研磨がみられる。375は玄武岩製の刃部片である。剥離により調整され、刃部先端には研磨痕が残る。376は粘板岩製の局部磨製石斧である。表面、側面は細かい敲打で丁寧に調整される。刃部には研磨が施され、細かい擦痕が残る。現存長 $10.1 + \alpha$ cm、幅8.3cm、厚さ3cmを測り、重さは $208.83 + \alpha$ gである。377は砂岩製で、刃部を欠損する。細かい敲打により調整される。現存長 $8.2 + \alpha$ cm、幅6.4cm、厚さ3.2cmを測り、重さは $245.86 + \alpha$ gである。378は玄武岩製の基部である。剥離により調整される。側面は研磨が施される。379は砂岩製の打製石斧である。側辺の両端に深い抉りが入る。長さ $10.4 + \alpha$ cm、幅6.9cm、厚さ3.8cmを測り、重さは $356.80 + \alpha$ gである。380は硬質の砂岩製で、扁平な撥形を呈する。剥離により整形される。現存長 $8.2 + \alpha$ cm、幅5.1cm、厚さ1cmを測り、重さは $57.52 + \alpha$ gである。381は粘板岩製の磨製石斧である。基部は欠損する。丁寧に研磨調整され、刃部には使用痕が残る。現存長 $7.9 + \alpha$ cm、幅7.1cm、厚さ3.6cmを測り、重さは $275.50 + \alpha$ gである。

382～389は略球形を呈する叩き石である。382は玄武岩製で、4面砥面があり、擦り石として利用される。側面には敲打痕が残る。重量は739.82gを量る。383は結晶質変成岩で、半分欠損する。敲打した部分が窪んでいる。重量は221.01 + α gである。384は珪質岩である。重量は257.24gを量る。385・386は玄武岩製である。擦り石としても使用している。385は163.34g、386は155.64gを量る。387は変成岩で、116.93gを量る。388は珪質岩で198.39gを量る。擦り石としても使用している。389は変成岩で、多くの敲打痕が残る。重量は228.21gを量る。390は叩き石である。玄武岩製で、側辺は2ヶ所抉りが入り、上端には研磨痕が残る。裏面中央部は敲打の痕跡がみられ、浅く凹状に窪む。長さ $10.7 + \alpha$ cm、幅8.4cm、厚さ4.8cmを測り、重さは $710.75 + \alpha$ gである。391は砂岩製の叩き石で一部欠損する。先端部は敲打痕が残り、側面は研磨されている。392は玄武岩製で、先端部と側面に敲打痕が残る。393・394は砂岩製で棒状を呈し、両端に敲打痕をもつ。395は玄武岩製の磨石である。上面はわずかに窪む。長さ12.3cm、幅10.7cm、厚さ4cmを測り、重さは887.17gを量る。396は粘板岩製で、一部欠損する。表面中央部に敲打痕が残る。上下、左右に抉りを有し、擦痕がみられる。側面にも潰れ痕がある。397は玄武岩製で、上面は研磨で凹状に窪む。側面は敲打痕が残り、2ヶ所に抉りが入る。

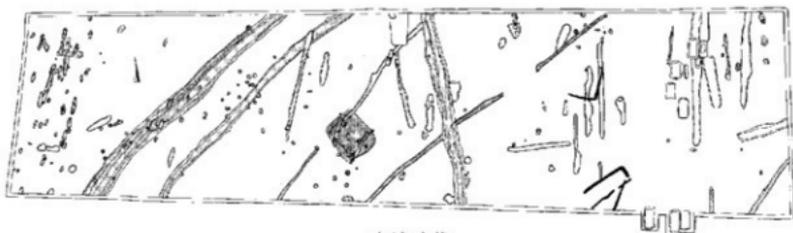
5. まとめ

(1) 時期変遷

調査では主に弥生時代前期、中期、古墳時代、中世の遺構が確認された。弥生時代前期の遺構としては貯蔵穴と考えられる楕円形を呈する土坑(SK43、SK44、SK46、SK47、SK55、SK56、SK57)を検出した。また、非常に類似する様相を呈したSK53、SK67、SK74の細長い長方形を呈する遺構も確認された。中期になると居住空間が営まれ、円形の堅穴住居2軒、2間3間の掘立柱建物2棟を検出した。柱穴からはそれぞれ前期の土器しか出土していないが、前期の溝SD71を切っていることからこれらの遺物は混入と考えられる。この時期の遺構は、他に貯蔵穴と考えられるSK49、SK60、SK61、小児棺の可能性をもつSK52、祭祀土坑のSK65が挙げられる。古墳時代になると、方形の堅穴住居1軒(SC41)、南東から北西方向に走る溝1条(SD33、SD70)、他に遺構としては記載しなかったが、弥生時代の堅穴住居SC64に重複して検出した周溝状の溝、SD66の東側、調査区南端で検出した細長い溝も方形の堅穴住居に伴う周溝の可能性が考えられる。これに後続して、SD28、SD35、SD39の溝が掘削される。下面の遺構面をさらに掘削すると、粘質を帯びた土に砂質土が凸凹状を呈して



中世



古墳時代



弥生時代中期



弥生時代前期

第49図 遺構変遷図

入り込む。足跡(図版14)と考えられる。杭も検出したが、双方に規則性は見られなかった。この水田の跡は古墳時代後期に由来し、これらの溝(SD28、SD35、SD39)は灌漑施設の可能性が考えられる。以降、中世に至るまで、生活の痕跡はうかがえない。中世の遺構は東側に南北方向に列になって並び、方形の土坑8基を検出した。遺物はほとんど出土せず、輸入陶磁器の破片が散見できる程度である。ブロック状の覆土、プランの規格性から墓の可能性が考えられ、16世紀後半の時期と思われる。道路を決んで約40m北側に下山門乙女田遺跡の集落が展開する。時期的にもこの集落に關係する遺構であると思われる。

第3次調査で主体をなすのは弥生時代前期末から中期にかけての遺構群である。南側の第2次調査でも弥生時代中期の包含層が確認され、多くの遺物が出土している。ただし、包含層までの調査で遺構掘削は行われていないため、詳細は不明である。包含層中の土器は大半が逆L字状口縁や赤色顔料を施された土器群で、中期を主体とするものである。銅戈が3本出土している。第2次調査の集落はこの時期にほぼ相当すると考えられる。前期の土器は全くといっていい程見ることが出来ず、第3次調査とやや様相を異にするものである。古墳時代初頭になると、第3次調査区では引き続き集落が展開する。しかし、後期段階になると、居住空間は確認できず、溝が走り、水田が広がっていたと思われる。奈良時代から平安時代にかけては、第2次調査区で製鉄関連の官衙の一部と考えられる遺構が確認されている。遺跡の中心は南側に移っていったと考えられ、第3次調査区でも少量ではあるが、1374gの鉄滓が出土している。碗形鍛冶滓、鉄塊形遺物、流動滓がみられる。

(2) 弥生時代出土の石器組成について

第3次調査区において弥生時代の石器、それに伴う石片、原石が多数出土した。剥片石器のうちで、黒曜石が占める割合はほぼ100%に近い。古銅輝石安山岩は包含層から出土したスクレーパー1点と2b出土の石鏃1点である。素材としての安山岩は数点出土しているが、製品が持ち込まれた可能性もある。剥片石器の内での構成比は石鏃が1点、石鏃未製品(3b)が1点、使用痕のある剥片が12点である。他はすべて剥片、砕片である。剥片は縦長のもの(322・323)、幅広のもの(324)と見られる。石核の剥離も一定の方向性が見られず、打面を頻繁に転移させながら剥離をおこなう。「十郎川技法」と称されるものである。そのため、ある程度の大きさの石核でも、使用できる剥片を剥く面を作り出すことができず、廃棄している。原石は7点出土している。原石、石核から2種類の原石が使用されたと考えられる。326のような腰岳産の角礫、自然面が海綿状を呈し牟田産に代表されるような円礫である。原石には質を確かめるために剥離を行っているものもある。一方で、径2cm程の円礫で、石核となりえないような原石も見られる。剥片、砕片の量に比して製品が少ない。石核の中に特筆すべきものとして、剥離面が凸状に盛り上がり、リングが同心円状を呈するもの(SC41-7、SK59-122)が見られた。通常の剥離工程からはこのような様相をみることは出来ない。熱を受けて破砕した可能性が考えられる。このような熱破砕礫は3点確認された。剥離技法の一つとして熱による剥離工程も一種の技法として考える必要がある。黒曜石片は前期のSK46から使用痕のある剥片2点、剥片8点、砕片77点、石核5点とまとまって出土している。黒曜石出土の包含層における集中区は2c、3c、2bであり、この遺構周辺では多くはない。剥片石器製作に関わる土坑であると考えられる。礫石器については石包丁、石鏃、石斧、叩き石、砥石、磨石、台石があげられる。なお、台石、磨石は一部側面を敲打した痕跡が残り、一部の叩き石に関しても研磨した痕跡が残る。石包丁はすべて砂岩(頁岩)を使用している。すべてが未製品の欠損品である。穿孔途中のものが多く、この段階で欠損したと考えられる。外湾刃半月形の小型のものと厚みがある大型のものに分類できる。製作工程が未製品から復元でき、①成形、原石から335にみられるような擦り切り技法をもちいて切断する。その後、側面を

剥離により成形する。②穿孔、紐部を敲打によって窪みを作っている。この後錐等で穿孔するかは現状では不明である。③研磨、この段階のものは1点も出土していない。研磨段階で失敗する可能性が少なく製品として搬出したか、この段階の製作を別地点で行ったかであろう。石包丁は特に2cで多くみられる。素材である砂質頁岩は2b、SK59でまとまって出土している。石錐であるが、「九州型石錐」と呼ばれているものは滑石製、それ以外は砂岩製3点を除き、玄武岩製である。砂岩製・玄武岩製の石錐はいわゆる「打欠石錐」である。石斧は379・380の打製石斧以外はすべて磨製石斧、および局部磨製石斧である。素材は玄武岩、砂岩、粘板岩を使用している。叩き石は球形のものど方形、不整形のものに分けられる。球形は敲打した部分と研磨した面をもつものがある。石材は変成岩、玄武岩、硬質砂岩を使用している。花崗岩もみられる。砥石は細粒砂岩、砂岩、粘板岩等を使用する。以上のよう製品と石材の相関関係がみられる。また、石器製作場所も2b、2c、3cが中心となり、原材、素材、石片もこの地区に集中する。これに付属するものとしてSK59が窪み状に存在する。これらの石器群の時期であるが、包含層中からは刻目突帯文土器、如意形口縁をもつ前期土器に混在して多くの逆L字状口縁をもつ中期の土器が出土している。包含層はにぶい黄色シルト、暗灰黄色粘質土の2層



第50図 石器集中範囲図

遺物名	製石										原料・石片										備考	
	石包丁	石錐	石斧	叩き石	球形石	砥石	磨石	石片	玄武岩	砂岩	粘板岩	変成岩	花崗岩	頁岩	その他	不明						
SK59	1	5	30	4	3	2	2	4	2	35	8	1	4	15	1	1						
SK(前期)	2	8	77	5	2	2				40	1	12	3	1	3	3	1					
SK(中期)			15	1						6				1			1					
SK(以外)	1	2	18			1	1			6		1										
SC11		2	10	2	1				1	2			1	1								
SD1	2	1	33		1	3		1	1	14		3	1	1	2	1	1					
SP1	2	3	25	2	1	1			2	18	1	1	2		2	1	1					
1a			4							1			1									
1b										1												
1c		4	26	1	1					5			1		2		1					
1d		2	1							1												
2a			2			1				1				1								
2b		8	42	4	2	1	1	3		53	19	6		2	7							
2c		9	117	7	6	2	1	2		32	3	5	4	2	7	1	1					
3b	1		13		1					4	1	1		1								
3c		2	98	6	1	1	4	4	3	36		4	11	1	17		1					
3d						1																
4a									1	2					3		1					
4b			19	1	1	1				8		3	2		4							
4c	1	2	24	2	1			2	1	2	1		1									
4d		2	16					1		3		2	2	1								
5b			3							3												
5c		3	24	3	1				1	11		3	1	1	4	3						
5d									1	1												
6a													2		1		1					
6b		1	9	1													1					
6c			4					1	1	1	2			1	5		1					
6d			3	1				1		1	1		2		2							
7b														1								
7c			1											1								
7d			2																			
8a			1				3		1	1												
赤土包含層	2	2	131	17	3	3	3	1	3	58	14	7	6	1	21	11						
合計	12	61	1297	69	7	20	12	18	10	22	18	2	3	324	34	49	42	15	26	23	3	8

石器組成一覽表

と分層できるが、出土する土器に時期差はうかがえなかった。石器も同様である。ただ、遺構別に石器組成をみると、中期の遺構は石器、石器片が散見できる程度である。それと比較すると前期の土坑群には石器、石片が多く出土している。消極的ではあるが、単純にこの関係からみると、石器群は刻目突帯文土器、如意形口縁をもつ前期土器と共存するといえよう。

(3) 海綿骨針について

SK49、SK60、SK61の床面から白い遺物がまともって出土した。白色遺物は繊維状を呈し、外観は石綿のようであり、顕微鏡で観察すると、針状を呈していた。しかし、福岡市内にはそのような類例がなく、遺物が何であるのか推測できなかった。そこで、分析を委託したところ、「海綿骨針」であることが判明した。「海綿」は無脊椎動物で、数千種類存在する。今回検出した「海綿骨針」は「尋常（普通）海綿の一軸型」であった。この種は大部分が海生であるが、淡水種も存在している。かなり柔軟性のあるタンパク質、海綿質繊維のみで骨格がつけられているが、珪酸質の骨片をもつ種も一部含まれている。この部分が海綿骨針として遺存する。現在使用されている沐浴用のカイメン（スポンジ）がつけられる種類である。

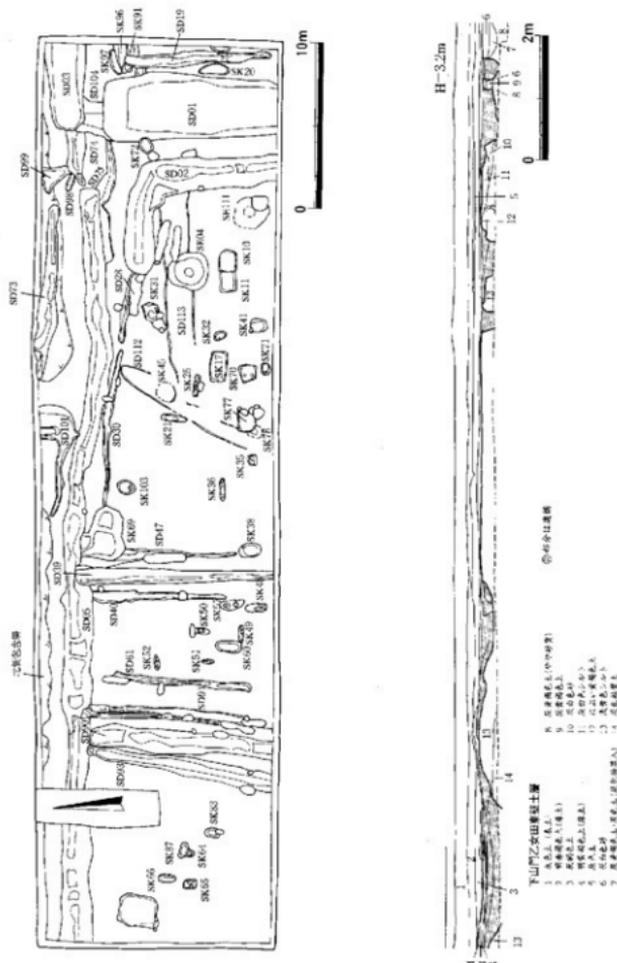
出土状況は土器、炭化物、木質と混在していた。SK49では破砕した土器が出土し、海綿骨針は土器の上面に見られ、土器を取り上げると下面にも同様に付着していた。木質、炭化物が出土していたため、樹種同定を行った結果、「クロマツやアカマツのマツ属」と判明した。SK61からは管玉が覆土中から出土した。SK60では炭層が東側で厚さ2cm程、層状に堆積していた。海綿骨針はすぐ側でまともって検出された。植物珪酸体分析の結果、白色遺物から海綿骨針の他に、イネの植物珪酸体が多量に検出され、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準をはるかに上回っていたことが解った。このイネの植物珪酸体は穂（コメ）よりも葉（イネの葉）が主体であった。また、珪酸分析もあわせて行ったが、白色遺物には珪藻は含まれていないということであった。そこで、考えられることはこの3基の土坑から出土した白色遺物が自然環境の一部として出土したのではなく、二次的に持ち込まれ、意図的に土坑内に入れられたということである。また、多量のイネの存在は、この時期の農耕生活において、水田耕作が行われていたことを裏付けている。そこで海綿骨針の分析結果を収集したところ、関東、東北北部で検出例が報告されていた。しかし、それらの海綿骨針は土器の胎土中に含まれており、粘土自体に含まれた自然の遺物であった。石川県七尾市奥原跡遺跡の住居跡の埴土、床面から多量の海綿骨針が出土していたが、土壌自体に海綿骨針が含まれているということであった。広島県三原城跡の報告書でも分析が行われていたが、これも土壌の分析結果であり、当時の環境を探る手段であった。同様のことは九州の佐賀県栗原森遺跡で検出された海綿骨針にもいえることである。ここでは土器の胎土中にも海綿骨針は含まれていた。このように海綿骨針は至るところで時期を逆通してみられるが、すべて自然環境の一部としての出土である。今回の下田門敷町第3次調査のように海綿が二次的に持ち込まれ使用されたという状況ではなかった。

第3次調査では弥生時代中期の遺構は他にも検出されたが、海綿骨針が出土した遺構は3基のみであった。共通していえることは木質、炭化物が混在している点、土器の破片が出土する点、床面に堆積し、まともって出土している点である。このような状況とイネ葉が多量に検出されていることから、土坑は貯蔵穴的な性格をもつものではないかと推察される。「海綿骨針」は貯蔵の際、イネ葉とともに穀物等に利用されたのではないかと考えられる。

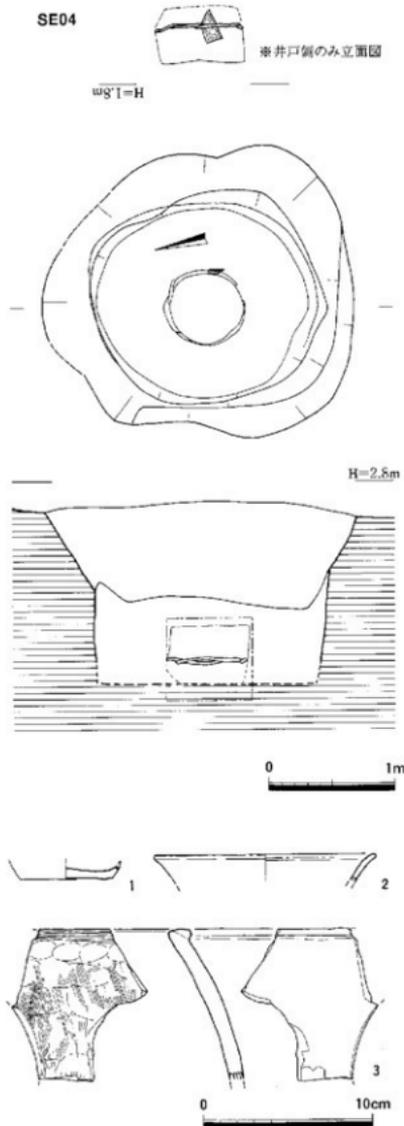
IV. 下山門乙女田遺跡第2次調査の記録

1. 調査の概要

第2次調査地点は下山門乙女田遺跡の最南に位置し、下山門敷町遺跡第3次調査地点の37m北側にあたる。調査前の標高は3.1mを測り、現況は水田であった。遺構面は標高2.7mを測り、ほぼ平坦で



第51図 第2次調査遺構配置図(1/300)・調査区東壁土層図(1/80)



第52図 SE04実測図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)

ある。東壁で層序をみると、表土の下に明赤褐色土の床土、耕作土の灰褐色土、明黄褐色土の床土が堆積し、灰白色砂・灰白色シルト・にぶい黄褐色土・浅黄色シルトの河川堆積土に至る。遺構はこの面から掘削される。12世紀後半から16世紀までの遺構、遺物を確認した。主な遺構は井戸2基、溝、土坑、ピットである。調査区全体に遺構が重複した状態で検出した。

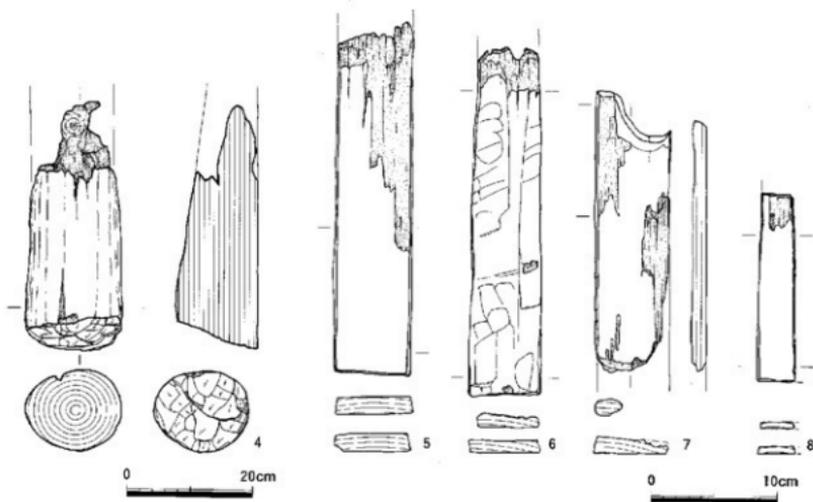
調査は平成12年1月6日に、重機による表土剥ぎ作業を開始した。遺構の切り合いが不明な部分は人力で一部下げ、切り合いを確認した。その際出土した遺物は包含層出土遺物として扱った。遺構の重複が著しく、検出面で確認できなかった遺構がある可能性が大きいため、再度重機で掘り下げた。その結果、井戸1基、溝1条、ピットを確認した。掘り残しの遺構を掘削し、平成12年2月26日に調査を終了した。

2. 遺構と遺物

①井戸

SE04 (第52図、図版23)

調査区の東側に位置している。掘方は検出面で径2.4m、深さは1.5mを測り、標高2.0m地点で傾斜を変える。井戸側は板材と竹のタガが出土していることから木桶と考えられる。板材は4枚出土するが、大半は井戸の中に入り込んでいた。タガは原位置での出土である。井戸側には粘質土の土が入り込み、復元すると径55~60cm、高さ55cmを測る。湧水したため、掘方の壁は挟れて崩落した。井戸側の最下面は標高1.2m前後と考えられる。上層から土師皿、土師質土器の破片が出土する。井戸側内から土師皿、白磁、瓦質土器が出土した。他に鉄滓が3点出土する。



第53図 SE04出土遺物実測図② (1/8・1/4)

出土遺物 (第52・53図、図版30)

1～4は井戸側内から出土した。1は土師器で回転糸切り底の小皿である。口縁部を欠損し、内面に煤が付着する。胎土に金雲母、赤褐色粒を含む。2は口先の白磁碗で、口縁部は緩く外反する。復元口径は13cmを測る。胎土は淡灰色の緻密な胎上に淡オリーブ色の透明釉が施される。3は瓦質土器の風炉である。口縁部の破片で、円形透かしの一部が残る。口縁は内傾し、上面に平直面をもつ。内面は縦方向の刷毛目、口縁付近は指押さえ、口縁は横方向の研磨、外面は研磨で調整される。4は柱材と思われる。芯持材で残存長40cm、最大厚13cm、最大幅15cmを測る。下端部は丁寧に面取りされている。スギかと思われる。5～8は木桶の板材である。長さは全て欠損しているため不明である。現存長15.1～28.3cmを測る。厚さは0.6～1.4cmとややばらつきがある。幅は概ね6cmである。6は細かい縛り痕が横方向に残っている。他の板材では見られなかった。木材はヒノキかと思われる。

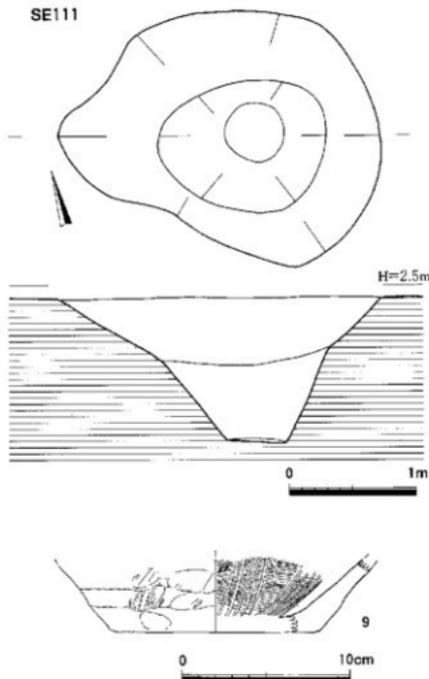
SE111 (第54図、図版23)

調査区の東側SE04の南東に位置している。他の遺構と同じ面で検出できず、重機で掘り下げた段階で検出した。掘方は検出面で長軸2.5m、短軸1.9mを測る。掘方はSE04と同様、標高2.0m地点で傾斜を変える。井戸側は検出できなかった。井戸の最下層は標高1.2mである。上層から土師質土器の小破片が出土する。最下層から播鉢の破片が出土する。

出土遺物 (第54図)

9は土師質の播鉢の底部片である。5条の播目を有する。内面には横方向の刷毛目が、外面下半部には指押さえによる凸凹がみられる。

SE111



第54図 SE111実測図 (1/40) および出土遺物実測図 (1/3)

呈する。11は復元口径12.2cm、器高2.05cmを測る。口縁部は内傾気味に立ち上がる。ともに赤褐色粒、金雲母を含む。12は瓦質土器の火鉢である。口縁が内側に折れ、口縁外下には菊花文とほとんど欠損しているが、梅花文をスタンプする。内面は刷毛目で調整する。灰黒色を呈し、外面には一部煤が付着している。13は土師質土器の鍋である。口縁部外面に突帯を巡らし、上面は平坦に仕上げている。内面は刷毛目調整をする。外面には煤が付着する。14は土師質の撞鉢の底部片である。6条の撞目を有する。内面の撞目、横方向の刷毛目は磨滅によりやや不鮮明である。外面は器壁が荒れているが、下半部には指押さえによる凸凹、刷毛目がみられる。15・16は白磁の口縁部片である。15はIV類の碗で、大きな玉縁の口縁をもつ。復元口径16cmを測り、砂粒混じりの胎土に淡く青味がかった透明釉を施す。16はV類の碗で、復元口径16.4cmを測る。口縁外面には釉が厚く垂れている。灰白色の胎土に淡灰色の釉が施される。17・18は龍泉窯系青磁碗である。17は碗IV類の口縁部片で、外面には雷文帯、内面には草花文をもつ。灰色の胎土にオリーブ灰色の釉を厚く施す。18は底部片で、見込みに花文をもつようである。釉は壘付を越えて高台内面途中まで、かかっている。砂粒混じりの灰色の胎土に、オリーブ灰色の釉を厚くかける。19は同安窯系の青磁皿である。撞鉢の工具による施文が見込みに施される。施粧後に外底部の釉はカキ取られる。20は染付碗Cの口縁部片である。外面口縁部には2条の靑線、下に芭蕉葉文、内面口縁部にも2条の靑線が描かれる。砂粒を少量含んだ白色の胎土に極淡い水色の釉を施す。文様は藍色の濃淡である。21は李朝粉青砂器の碗の胴部片である。胴部下半で屈

②溝

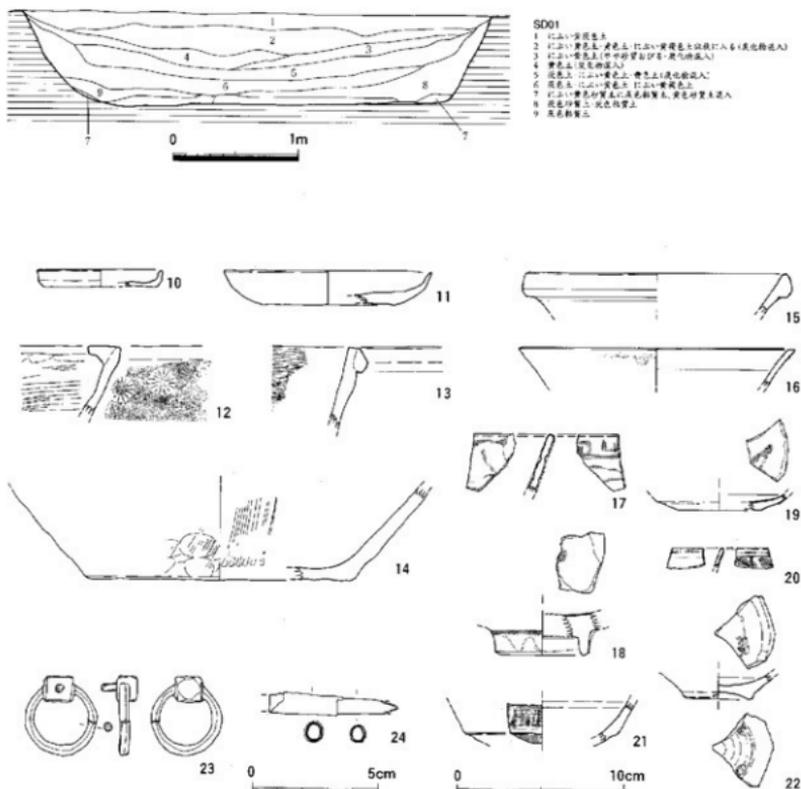
多数の溝を検出した。重機で掘削後検出したSD112を除けば、南北方向、東西方向の溝である。直角に曲がる溝も2条 (SD02・SD104) 検出している。敷地を区画する溝、雨落ち溝が大半であると思われる。

SD01 (第55図、図版24)

調査区の東側に位置し、北側のSD104を切っている溝である。ほぼ南北方向に走り、北側では溝の立ち上がりを確認した。長さ約10mを検出したが、南は調査区外に延びる。幅は北側4m、南側3.5m、深さ75cmを測る。溝の断面は逆台形である。覆土は自然堆積の様相を呈し、下層には砂質土、粘質土が層になっている。水が常時流れた状況ではない。炭化物が少量入り、北西隅の底からは下駄、漆器皿、鉄滓がまともに出て土した。

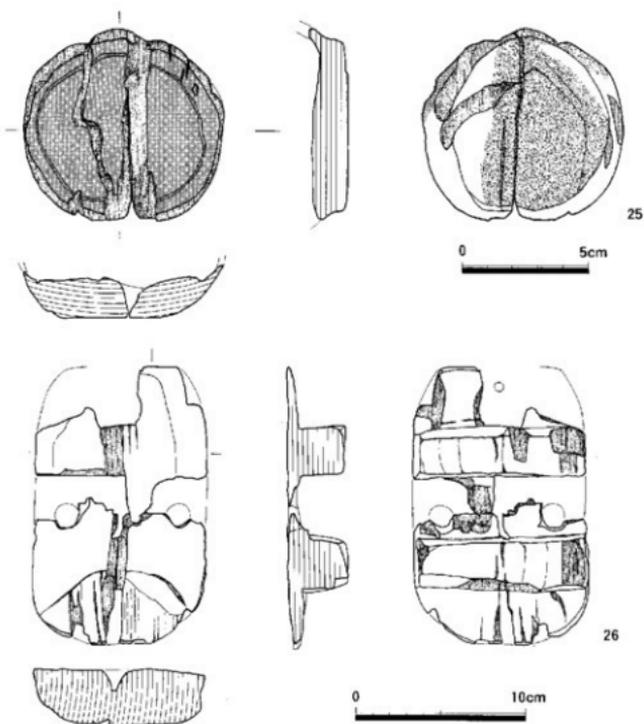
出土遺物 (第55・56図、図版30)

10・11は土師器で、回転糸切り底の小皿である。10は復元口径7.2cm、器高1cmを測る。胎土は精良で浅黄褐色を



第55図 SD01土層図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3・1/2)

曲し、胴部は白い化粧土で象嵌されている。内面にも1条の沈線が巡る。胎土は灰色で灰緑色の釉がかかる。22は李朝陶器の底部片である。全面に灰色の釉が施軸される。畳付、見込みに目跡が残る。23は青銅製の環状金具である。断面3.5mmの円形のを径2.8cmの環状にしている。留め金には隅丸方形の鋸がつく。24は鋼製のキセルで、1mm程の青銅板を円形に捲いている。中は空洞である。25・26は木製品である。25は漆器皿の底部片である。底部径は約7.8cmを測る。黒漆が塗布される。外底部には炭化した痕跡がある。26は下駄で、木材はキリと思われる。全長16.7cm、幅10.2cm、台の最大厚1cm、歯の高さ2.6cmを測る。他にウマの歯が2点出土した。1点は下顎左のI1で歯冠のみの遺存である。歯冠高4.01cmを測る。咬合面の残りは悪いが黒窩の確みは消失し、歯星が現れ始めている。7歳前後であると思われる。2点目は下顎左の白歯(M1か)で周縁エナメル質は剥落している。歯冠はほぼ残っていると思われ、現状で5.97cmを測る。5、6歳前後と思われる。鉄滓が9点出土する。



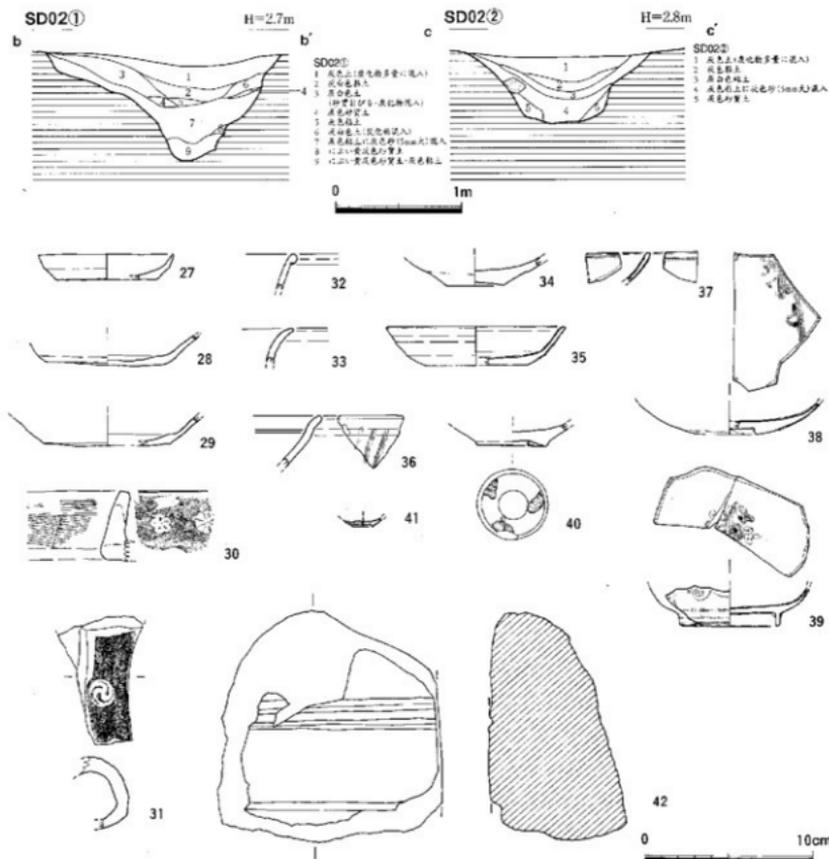
第56図 SD01出土遺物実測図② (1/2・1/3)

SD02 (第57図、図版24)

調査区の東側に位置し、SD01から約1m西側で検出した。SD01とはほぼ平行に走り、南側は調査区外に延びる。北側は直角に西へ曲がり、約5m延びて立ち上がる。南北方向は幅2.2m、深さ約90cm、東西方向は幅1.5m、深さ約80cmを測り、東西方向の方が幅が狭く、浅くなっている。最下層では砂と粘土、シルトが互層になり、水が何度も流れた様相を呈している。覆土には炭化物が大量に含まれている。また、東西方向の溝では再度掘削した状況がうかがえる。西側の立ち上がり部分には焼けた石が投げ込まれている。焼けた拳大の石は溝の底で点々と検出された。

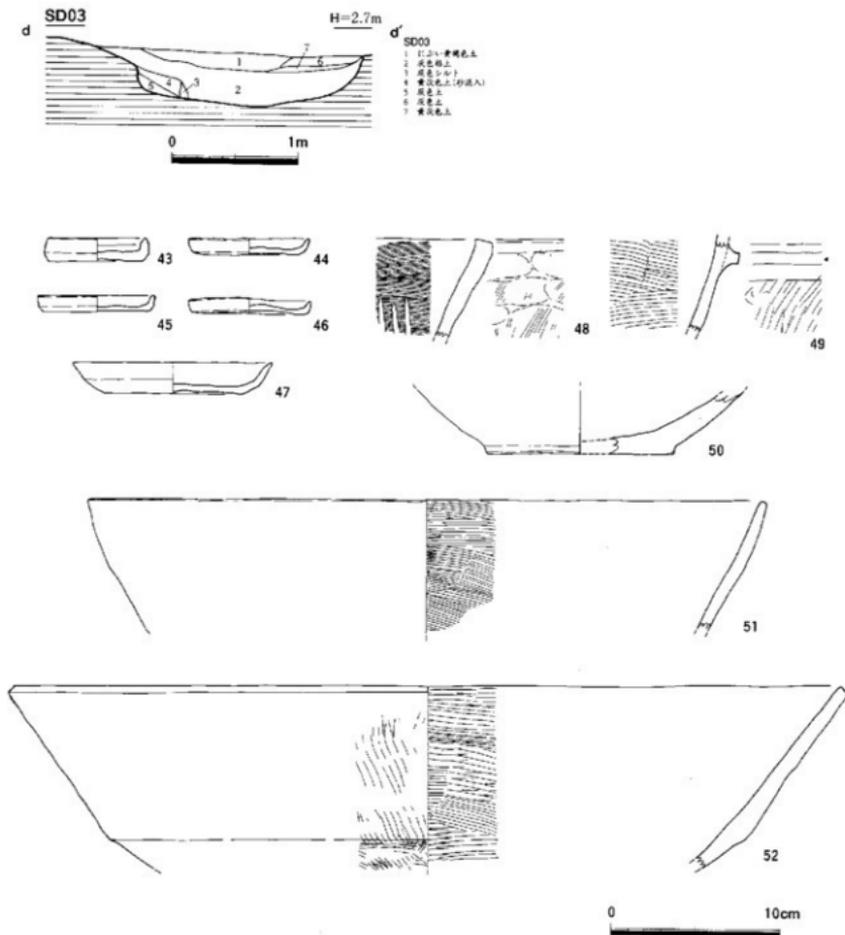
出土遺物 (第57図、図版30)

27~29は土師器で、27は回転系切り底の小皿である。口径7.9cm、器高1.5cmを測る。胎土は精良で黒褐色を呈する。金雲母を多く含む。28・29は坏で底部は回転系切りである。ともに胎土は精良で金雲母を多量に含む。浅黄褐色を呈し、28の底部は灰黒色、29は明橙色を呈する。30・31は瓦質土器の火鉢である。30は直立する口縁で、肩が張る器形をなすと考えられる。口縁外面には菊花文と梅花文をスタンプする。内面は刷毛目、端部はナデで調整する。橙色を呈し、内面に煤が付着している。31



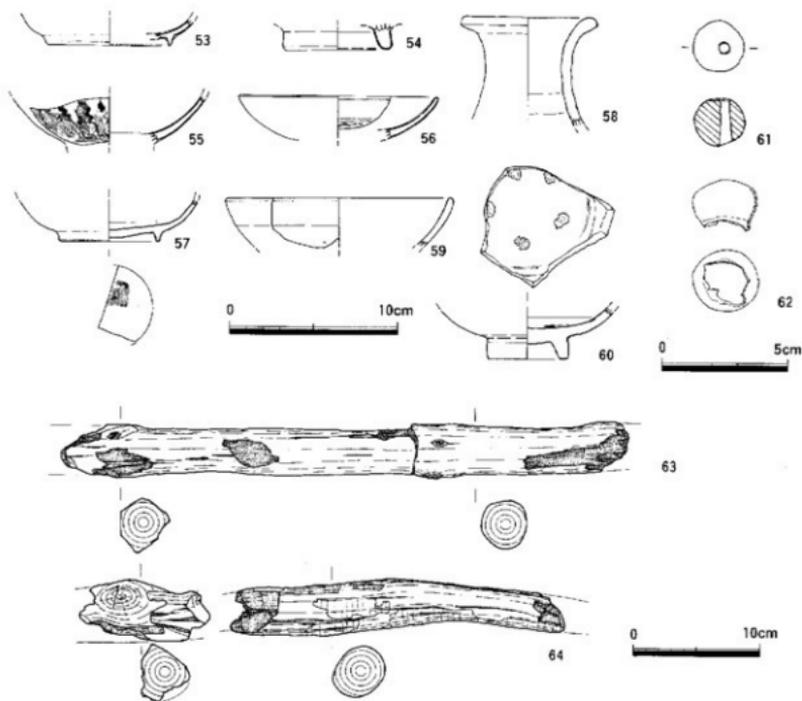
第57図 SD02土層図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

は火鉢の足の破片である。筒状をなし、縦方向に丁寧にケズリを施し、巴文のスタンプを有する。胎土には金雲母、白色砂粒を多く含み、明褐色を呈する。32は碗で、玉縁の口縁をもつ破片である。砂粒混じりの白色の胎土に、淡黄色の透明釉を施す。33は外反する口縁をもつ碗の口縁部片である。白色の胎土に淡灰色の透明釉が施される。34は平底皿の底部片で、外底部と胴部下半は露胎である。淡灰色の胎土に緑灰色の釉が施される。35は口禿の平底皿である。復元口径10.6cm、器高2.35cmを測る。見込みには圈線が1条巡る。砂粒混じりの淡灰色の胎土に青味がかった淡灰色の透明釉をかける。36は同安楽系の青磁碗である。口縁部は外反し、外面にはへら状の施文具で片影り風の沈線入れる。口縁部内面にも1条の沈線を巡らす。灰色の胎土にオリーブ灰色の釉を施す。37～39は染付である。37は染付皿Cの口縁部片である。口縁部内外面に1条の圈線を巡らす。白濁色の胎



第58図 SD03土層図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)

土に黄味がかつた釉を施す。文様は藍色である。38は染付皿Cの底部片である。萁筋底をもち、見込みには草花文が描かれる。白色の胎土に淡い水色の釉である。文様は藍色、底部露胎は橙褐色を呈する。39は碗の底部片である。高台径5.9cmを測り、細く高い高台をもつ。壘付は露胎である。高台外面に2条、胴部下半部に1条の圈線、見込みに文様を描く。胎土は白色を呈し、不透明の水色の釉が施され、文様は淡い藍色である。外底部に多くピンホールがみられる。40は李朝の陶器皿の底部片である。全面に灰色の釉が施される。壘付に目跡が残る。41は紅皿の底部片である。外面は露胎で縦方向の沈線が密に入る。白色の胎土に透明釉が施される。42は砂岩製板碑の頭部片で、鈍い「V」字形を呈する2条の横線彫りを施す。二次的に火を受けた痕跡がみられる。他に須恵器の甕、土師質の鍋、播鉢、鉢、鉄滓8点が出土している。



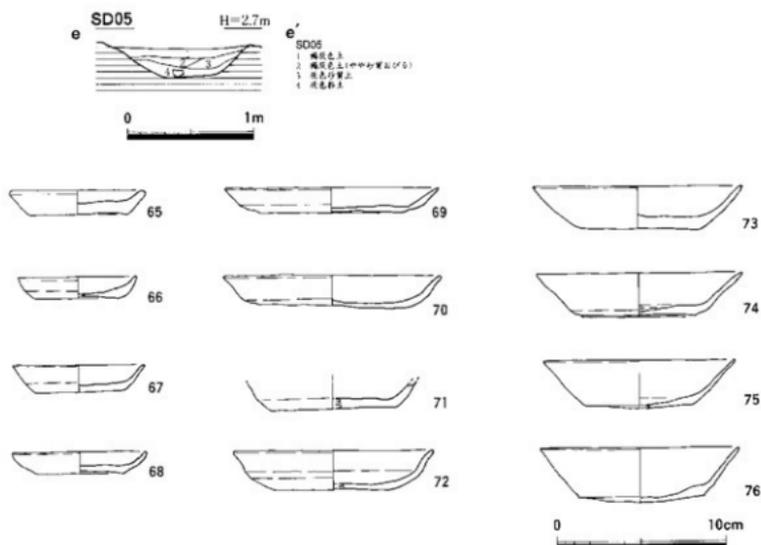
第59図 SD03出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/4)

SD03 (第58図、図版25)

調査区の東側に位置し、SD01の北側をほぼ直角に東西方向に走る溝である。SD104、SD74を切っている。長さ約5mを検出し、東側は調査区外に延びる。幅は2m、深さは西側が32cm、東側が60cmと深くなっている。溝の底からは土師器、瓦質土器、陶磁器、木片、鉄滓、青銅製品がまぎって出土している。また、SD104との境には幅5cm程の木杭が3本打ち込まれている。

出土遺物 (第58・59図、図版30)

43～47は回転系切り底の土師器である。43は口径5.65cm、器高1.4cmを測り、内面は丁寧なナデ調整である。4.5～7mmと器壁が厚く、端部は丸く仕上げる。蓋の可能性もある。内底部と外面に煤が付着する。44～46は小皿で、口径6.7～7.1cm、器高1cmを測る。胎土は精良で金雲母を多く含み、淡橙色を呈する。46は底部に板目圧痕を有し、内面に煤が付着する。47は坏で口径11.6cm、器高1.85cmを測る。胎土は精良で金雲母を多く含み、浅黄色を呈する。48は土師質の擋鉢の口縁部片である。口縁部はやや内傾し、上面は平坦である。3条以上の擋目を有する。内面は横方向、外面は縦方向の刷毛目とナデ調整である。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含み、褐色を呈する。外面には煤が全面付

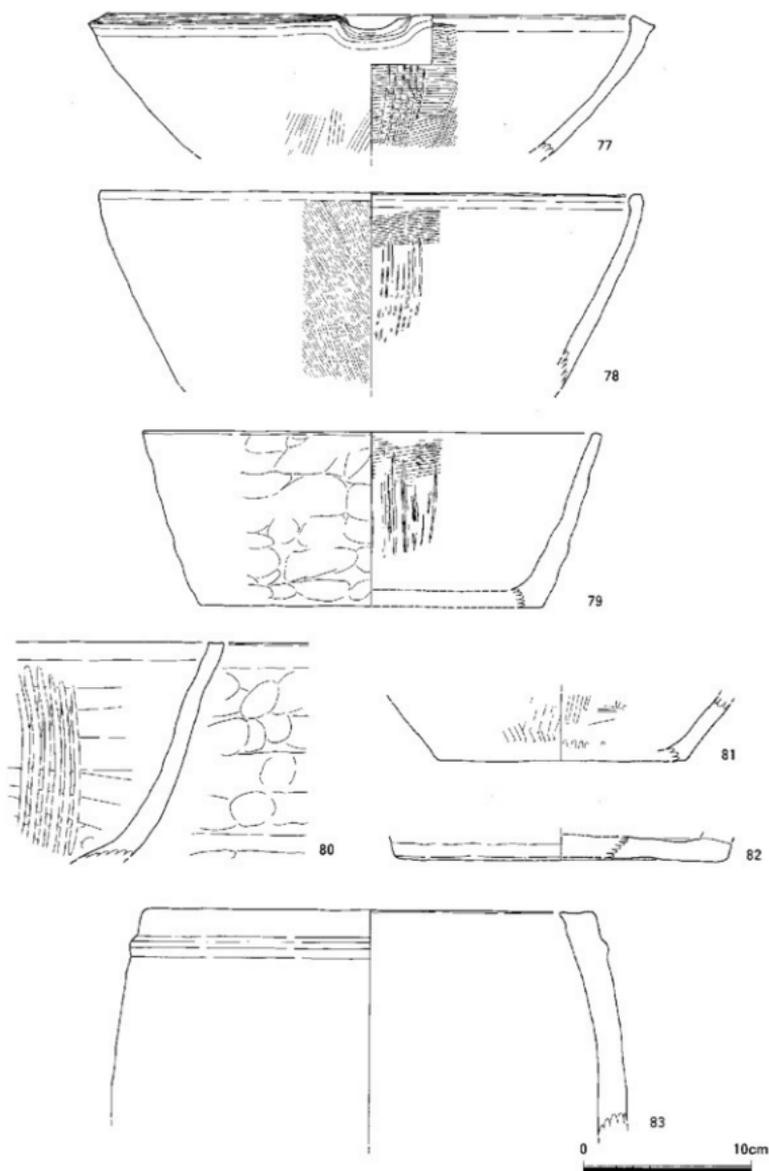


第60図 SD05土層図 (1/40) および出土遺物実測図① (1/3)

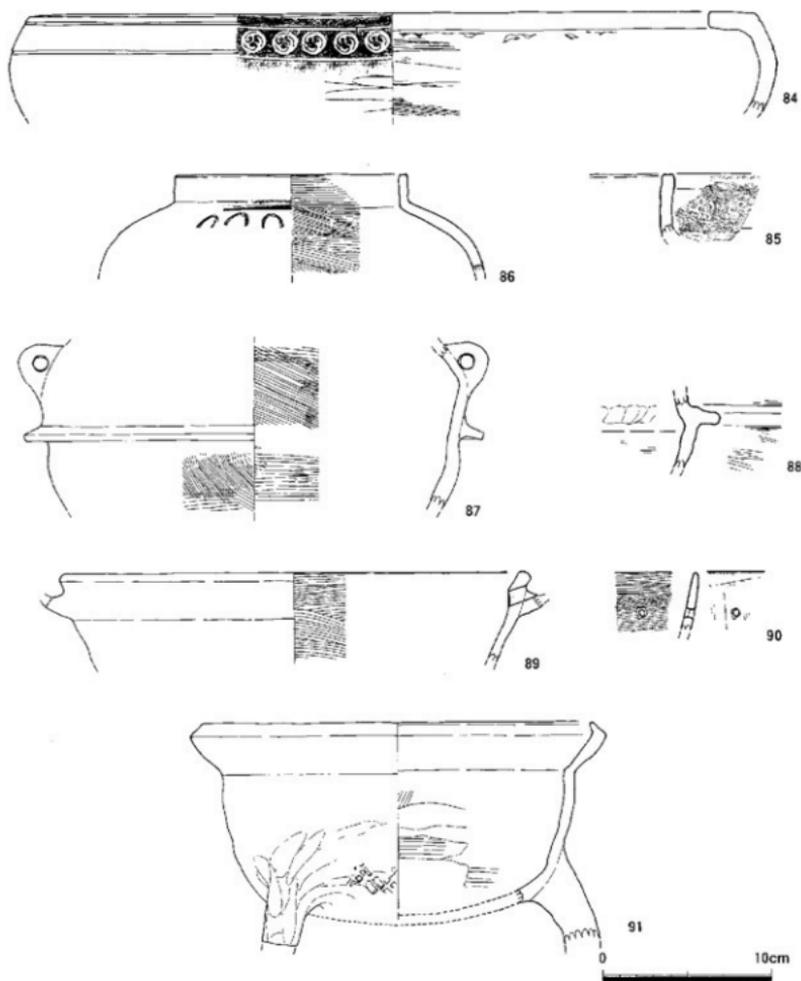
着する。49は瓦質土器の釜である。体部の破片で、鏝を有する。内面は横方向の刷毛目、外面は粗い刷毛目で鏝部分は横ナデする。外面には煤が全面附着する。50は須恵器の壺の底部片である。外面は二次焼成をうける。51・52は土師質土器の浅鉢で、ともに底部を欠損する。51は復元口径38cm、52は48.4cmを測る。51は内面横方向の刷毛目を施すが、外面は煤の附着が著しい。52は内面刷毛目、外面も部分的に刷毛目がみられる。外面に少量の煤が附着する。53は白磁碗の底部片である。底径7.2cmを測り、壘付は露胎である。灰白色の胎土に白色の釉を施す。54は龍泉窯系青磁碗の底部片である。釉は壘付を越えて高台内面途中までかかる。砂粒混じりの灰色の胎土にオリブ灰色の釉を厚くかける。55~57は染付である。55は染付碗Cの胴部片である。外面には芭蕉葉文が描かれる。灰白色の胎土に淡い水色の釉を施す。56は染付皿Cの口縁部片である。口縁部内面に1条の圏線、内面見込みに2条の圏線を巡らし、見込内に花文を描く。57は底部片で、壘付は露胎である。砂粒を多く含んだ灰白色の胎土に白色の釉を施す。全体にピンホールが多い。外底部にもスタンプを有する。58は褐釉陶器の壺の口縁部である。口径7.2cmを測り、白色砂粒を多く含む灰色の胎土である。59・60は李朝の白磁である。59は口縁部片で、胴部外面に1条の圏線を巡らす。砂粒を含む白色の胎土に緑がかる黄灰色の釉を施す。60は皿の底部片である。全面施釉し、壘付の釉を掻き取る。見込みに圏線が1条巡り、5ヶ所目跡が残る。砂粒を多く含む白濁色の胎土に緑味を帯びた灰白色の釉を施す。61は球状土錘である。白色砂粒を含み、橙色を呈する。火を受けた痕跡がみられる。重さは23.62gを測る。62は銅製品である。蓋のつまみで、擬宝珠である。高さは2cm、径は2.5cmを測る。1mm程の薄さで、中空である。63・64は木材である。63はシイの木で樹皮が遺存する。64は芯持で、削りの痕跡がみられる。他に鉄滓が5点出土する。

SD05 (第60図、図版26)

調査区の北側をほぼ東西方向に走る溝である。西側は調査区外に延びており、長さ46mを検出した。



第61図 SD05州土遺物実測図② (1/3)

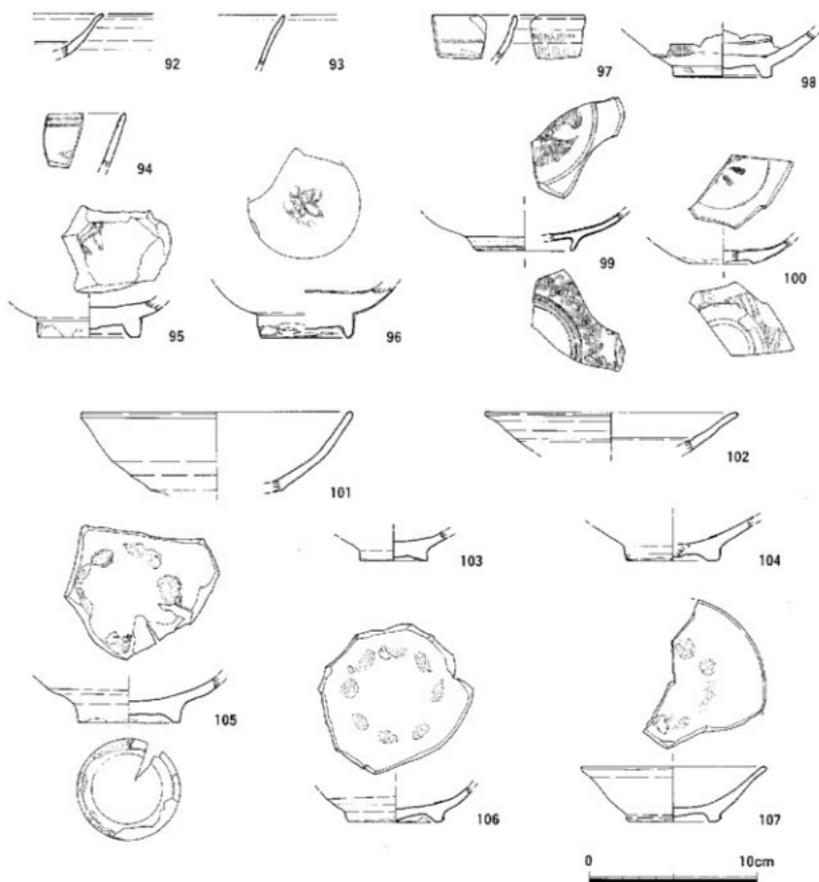


第62図 SD05出土遺物実測図③ (1/3)

東側から10mの部分で方向を北寄りに変えている。この部分では焼けた石がまとまって検出された。幅は1.2~1.8m、深さも一定ではなく、中央部分が最も深く70cmを測る。土層は上から灰褐色土、灰色砂質土、灰色粘質土が基本となっている。試掘トレンチより東側では溝の両岸に、幅5cm程の杭がまとまって検出された。但し、溝に伴うかは不明である。

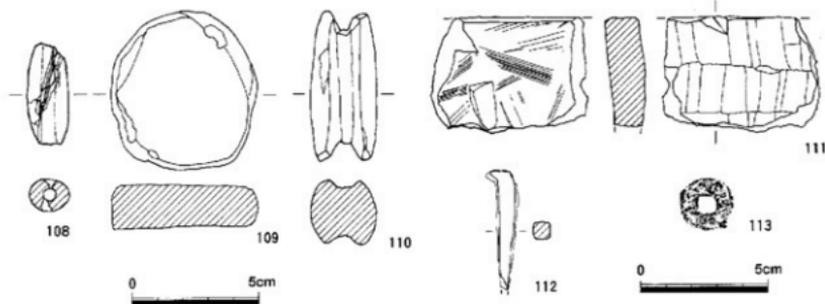
出土遺物 (第60~65図、図版31・32)

65~76は回転糸切り底の土師器である。65~68は小皿で口径6.9~7.8cm、器高1.3~1.65cmを測る。



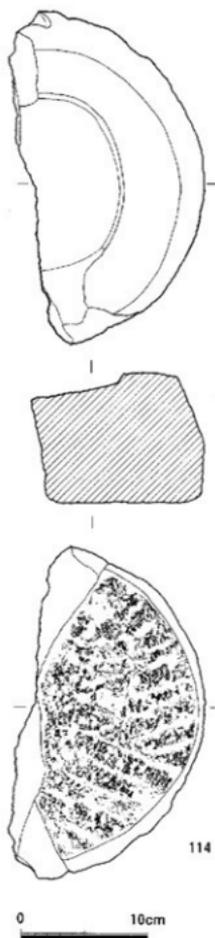
第63図 SD05出土遺物実測図④ (1/3)

65は内外面に煤が付着する。金雲母、白色砂粒を含み、明橙色を呈する。66は金雲母、白色砂粒を含み、淡橙色を呈する。67は灰白色を呈し、外面に煤が付着する。胎土は精良で金雲母を多く含む。69～76は坏で口径11.1～12.7cm、器高1.5～3.3cmを測る。71は赤褐色粒、金雲母を大量に含み、にぶい橙色を呈する。72の口縁は胴部で屈曲し、外反する。金雲母を多く含み、内面、外面の一部は黒褐色を呈し、二次焼成を受けた痕跡がみられる。75、76は深めの坏で、口縁部は引き延ばし、わずかに外反する。75は灰白色を呈し、一部分内外面に煤が付着する。76の底部はやや丸みをもち、橙色を呈し、内底面は黒色化する。ともに胎土は精良である。77は瓦質土器の擂鉢である。片口が遺存し、口径31cmを測り、口縁部の内面は鈍く突出する。6条の擂目を有する。口唇部、内面には横方向の別毛目で調整する。外面上半はナゲ、下半は縦方向の別毛目で調整する。白色砂粒を多く含み、褐色を呈する。78～82は土師質の擂鉢である。78は復元口径30.5cm、口縁部の内面は鈍く突出する。8条の擂目を有



第64図 SD05出土遺物実測図⑤(1/2)

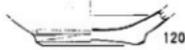
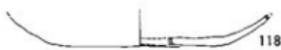
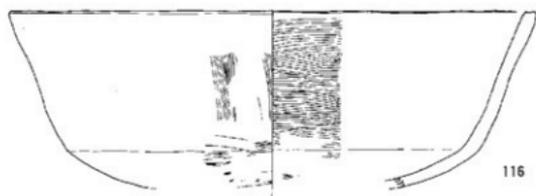
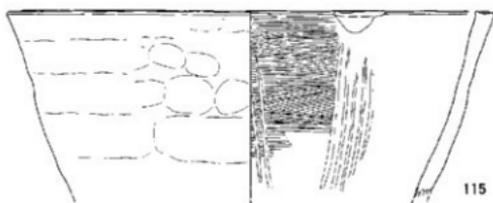
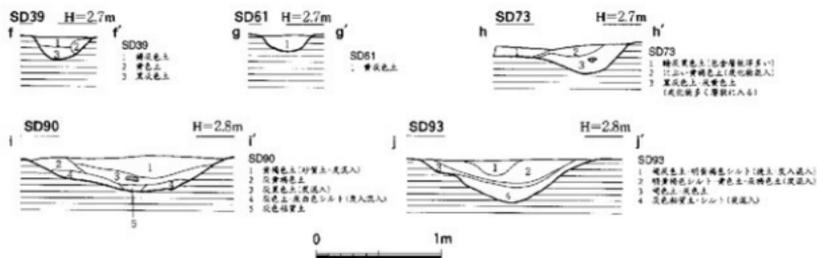
する。上半部は刷毛目も遺存するが、下半は磨滅により不鮮明で、撞目も浅くなっている。外面は刷毛目調整が施される。白色砂粒を多く含み、橙色を呈する。79は胴部が底部から直立し、そのまま口縁に至る。5条の撞目を有し、撞目と撞目の間にも撞目状の沈線が施される。内面上部には横方向の刷毛目が遺存するが、下半はナデ調整、他は磨滅により不鮮明である。内底部にも一部撞目が残る。外面は指押さえて調整する。復元口径26cm、底径20.3cm、器高10.5cmを測る。金雲母、白色砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。80は6条の撞目を有する。内面は丁寧なナデ、外面はナデで調整する。にぶい橙色を呈し、部分的に黒色となり、二次焼成を受けている。81・82は底部片である。83は甕の上部片である。口縁部は内傾し、上面は横ナデで「凹」状を呈する。口縁部外面下には1条の束帯を巡らす。内面には煤が付着する。掛口の径は26.2cmを測る。84は瓦質土器の火鉢である。口縁部片で復元口径42.4cmを測り、口縁部は内側に明瞭に折れている。口縁部下には2条の沈線が巡り、その間に巴文がスタンプされる。外面はいぶし、丁寧に磨いている。内面は横方向の刷毛目、ナデ調整である。白色砂粒を多く含み、外面は黒色、内面は灰黒色を呈する。85は土師質土器の火鉢の口縁部片で、口縁部は直立する。内外面ナデ調整で、外面には梅花文がスタンプされる。金雲母を多く含む。86～88は瓦質土器の釜である。86は口縁部片で復元口径13.2cmを測り、口縁部は直立し、体部は丸味をもつ。肩部上位に横方向の刷毛目を文様状に巡らし、その下には印花を施す。内面は全面横方向の刷毛目、外面は丁寧なナデで調整される。色調は灰黒色で、胴部下半には煤の付着がみられる。87は胴部片で、丸味のある体部の肩に耳を一对有し、体部中位に銕を巡らす。体部上半は横方向の丁寧なナデ、下半は横方向、斜方向の刷毛目、内面は刷毛目で調整される。耳と銕の張り付け部分の内面には指押さえ痕が残る。色調は灰黒色を呈し、胴部下半には煤が付着する。88は銕部分の破片で、下半には大量の煤が付着する。89・90は土師質土器の鍋である。89は口縁直下に1対の半円形の銕製の把手が付くもので、直上に2ヶ所の穿孔がある。外面から内面に向かって下方に穿孔している。赤褐色粒、白色砂粒を含み、明褐色を呈する。外面には大量の煤の付着がみられる。90は口縁部片で、口縁は直立し、端部は丸くおさめる。内面は刷毛目調整、外面は大量の煤が付着する。口縁下に穿孔が1ヶ所残る。91は瓦質土器の足鍋で、復元口径24.4cmを測る。口縁部は内湾気味に外反し、端部を内側へ折り曲げている。口縁部内外面は横ナデ、外面体部の上半は刷毛目と強いナデ、下半は格子目叩きを施す。内面は刷毛目で、部分的になで消している。支脚は指押さえて整形する。外面には煤が付着する。白色砂粒を少量含み、褐色を呈する。92・93は白磁である。92はV型の碗で、口縁部は外反し、内面見込みに段を有する。灰白色の胎土に白色の釉がかかる。93は口壳碗の口縁部片である。砂粒混じり



114

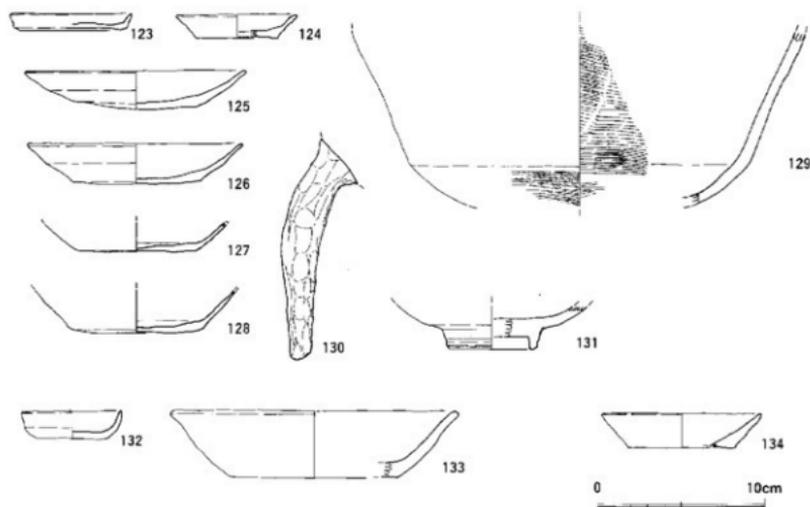
第65図 SD05出土遺物実測図⑥(1/4)

の淡灰色の胎土に青味がかった淡灰色の透明釉をかける。94～96は龍泉窯系青磁碗である。94はI類の口縁部片で、口縁部内面には2条の沈線が巡り、飛雲文が描かれている。砂粒混じりの灰色の胎土にオリーブ灰色の釉が薄くかかる。95は底部片で高台外面にまで釉は垂れている。壘付、高台内面、外底部には施釉されない。外底部はケズリのままで、雑なつくりである。見込みに花文をもつ。灰色の胎土にオリーブ灰色の釉を厚くかける。96も底部片で釉は壘付を越えて高台内面途中まで厚くかかる。高台のつくりは雑で、部分的に釉がかからず、露胎となっている。見込みに花文をもつ。灰色の胎土に明緑灰色の釉がかかる。97・98は同安窯系の青磁碗である。97は口縁部片で、外面には櫛状の施文具で沈線を入れる。口縁部内面にも1条の沈線を巡らす。灰色の胎土にオリーブ灰色の釉を施す。98は底部片で、外面には櫛状の施文具で沈線を入れる。内面にも櫛状の工具で施文される。精良な淡灰色の胎土に明オリーブ灰色の釉を施す。99・100は明の染付である。99は碗C群の底部片で、高台は低く、壘付はヘラで面取りされる。白色の胎土に淡い水色の釉が全面施釉される。100は皿C群の底部片である。碁笥底を持ち、体部下半、外底部に釉はかからない。橙色の胎土に半透明の緑灰色の釉がかかる。101・102は李朝の白磁碗の口縁部片である。101は口径16cmを測る。口縁部外面は強いナデにより段を有する。砂粒を多く含んだ灰白色の胎土に灰白色の釉を施す。102は口径15cmを測り、内面中位に段を有し、口縁部はやや外反する。灰白色の胎土に灰白色の釉が薄くかかる。103～107は李朝の陶器碗の底部片である。103は全面施釉され、壘付部に砂目を3ヶ所有する。灰白色の胎土である。釉はオリーブ灰色に灰白色の釉が噴粘する。また、灰白色の釉が帯状になる。104は全面施釉したのち、壘付の釉を掻きとっている。見込み、壘付に砂目を有する。砂粒を多く含んだ灰色の胎土に緑灰色の釉がかかる。105は見込みに目跡を有し、壘付にも目跡がある。白色砂粒を多く含む灰色の胎土に灰色、部分的に白色の釉を施す。二次焼成を受けている。106は見込みに8ヶ所砂目を有する。壘付にも目跡があるが、ほとんど掻き取っている。灰色の胎土に褐灰オリーブ色と灰白色の釉がマーブル状になっている。内面には全面に貫入がある。107は皿で、見込み、壘付に目跡が残る。胎土は灰色で灰緑色の釉を施す。口径11cm、器高3.35cmを測る。二次焼成を受ける。108は管状土鍾で、重さは6.99gである。109は土器片使用の円盤である。110は滑石製の石鍾である。長さ6cm、幅2.6cm、厚さ2.5cmを測り、重さは54.48gである。溝は中央部を一周して刻まれる。側面はよく磨かれている。111は滑石製石鍾の破片である。外面は全面にケズリ痕が残る。112は鉄釘である。角釘で頭部を曲げている。長さ4.8cmを測る。113は銅銭で、遺存状況は悪い。銘は不明で、孔の形状も不整である。114は石臼である。凝灰岩製の土臼で、半分欠損する。上縁復元径27cm、上縁



第66図 SD39・61・73・90・93土層図 (1/40) およびSD28・30・39・40出土遺物実測図 (1/3)

幅1.1~3cm、高さ10.5cmを測る。白の目は磨滅が著しく、不明瞭であるが、八分面六溝式とみられる。挽木の打込孔は大半が欠損するが、一辺が2.2cm、深さ3.6+ α cmである。他に須恵器壺の胴部片、瓦



第67図 SD73・74・75出土遺物実測図 (1/3)

の小破片、鉄滓47点、炉壁271.2gが出土する。

SD28 (第51図)

調査区東側、S D02の西側で検出した溝である。幅40cm、深さ10cm程の窪み状を呈している。

出土遺物 (第66図)

115は土師質土器の播鉢である。体部が直立気味に立ち、そのまま口縁に至る。口縁部上面は強いナデにより窪む。5条の播目を有する。内面上部には横方向の刷毛目が遺存するが、下半は磨滅により不鮮明である。外面はナデ、指押さえて調整する。復元口径26.4cmを測る。片口が遺存する。116は土師質土器の鍋である。ともに金雲母、白色砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。

SD30 (第51図)

調査区中央、SD05のすぐ南側を東西方向に走る溝である。SD28・SD29と一連の可能性もある。幅は20~40cm、深さは5cm前後と窪み状である。屋敷等の雨落ち溝の可能性が考えられる。

出土遺物 (第66図)

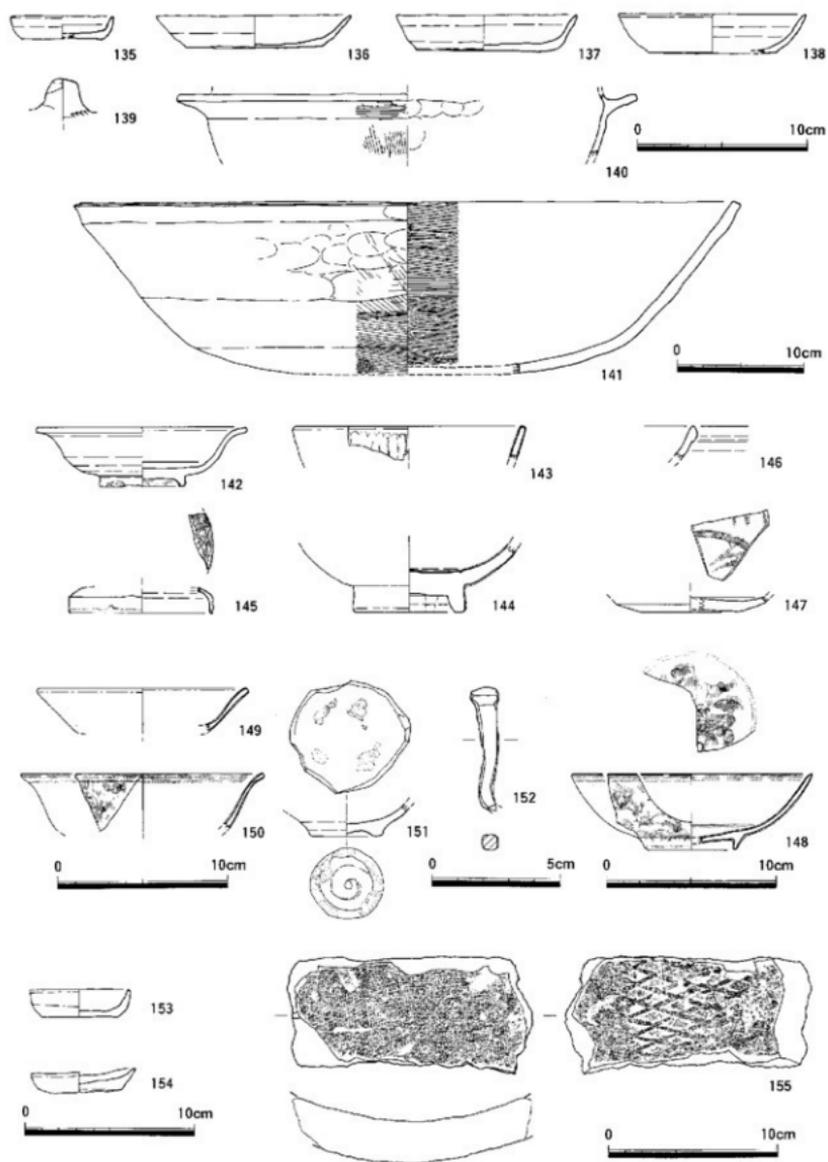
117は明の染付碗C群の口縁部片である。口径14cmを測る。口縁内面に2条の圈線、外面も施文する。白色の胎土に淡い水色の釉が全面施軸される。他に土師器片、土師質土器の鍋の破片が出土する。

SD39 (第51・66図、図版26)

調査区中央を南北方向に走る溝である。北側はSD05を切り、南側は調査区外に延びている。幅は40~70cm、最も深いところでも20cmを測る。覆土は主に褐灰色土、黒灰色土の2層である。

出土遺物 (第66図)

118は土師器の坏である。金雲母を含み、橙色を呈する。119は須恵器の高台付坏である。復元口径12.3cm、器高3.8cmを測る。金雲母を多く含む。120・121は白磁である。120は碗IV類の底部片である。高台は幅広く、削り出しが浅い。内面見込みには沈線状の段を有する。灰白色の胎土に緑味を帯びた灰白色の釉を厚く施す。釉は体部下半と外底面にはかからない。121は口縁部片で、口縁部は外反し、



第68図 SD90・91・93・98・99出土遺物実測図 (1/3・1/4・1/2)

丸くおさめる。灰白色の胎土に白色の釉を施軸する。他に土師質土器の鍋、平瓦の破片が出土する。

SD40 (第51図)

調査区中央、SD39の西側を平行して走る溝である。SD05に切られている。幅は30~70cmと北側が広くなり、深さは5cm程である。溝の底には焼けた石が転がっている。

出土遺物 (第66図)

122は土師質土器の火鉢である。直立する口縁で、口縁直下に1条の突帯、その下に渦巻き文をスタンピングする。金雲母を多く含み、橙色を呈する。他に土師器の破片が出土する。

SD47 (第51図)

調査区中央、SD39の東側を平行して走る溝である。SD39、SK69に切られている。幅は20~80cmと北側が広くなり、深さは北で10cm程である。土師器、土師質土器の小破片が出土する。

SD61 (第51・66図)

調査区西側を南北方向に走る溝である。長さ8m、幅40cm、深さは北側がやや深く10cmを測る。黄灰色上の1層である。須恵器、土師器、土師質土器の小破片、鉄滓1点が出土する。

SD73 (第51・66図、図版27)

調査区東側、北壁部分で検出した溝である。東西方向に走り、長さ10m、幅90~120cm、深さ30~50cmを測る。覆土は上からにぶい黄褐色土、黒灰色土と灰黄色土の2層である。炭化物を大量に含む。

出土遺物 (第67図、図版32)

123~128は回転糸切り底の土師器である。123・124は小皿で、123は口径7.05cm、器高1cm、124は口径7cm、器高1.4cmを測る。ともに胎土は精良で金雲母を含み、橙色を呈する。125~128は坏で、125は口径12.9cm、器高2.3cm、126は口径12.5cm、器高2.4cmを測る。ともに金雲母を含み胎土は精良で、橙色、部分的に黒色、明橙色を呈する。127・128は底部片で内面に一部煤が付着する。灰黄褐色を呈し、金雲母を含む。129は土師質土器の鍋である。口縁部、底部は欠損する。内面は丁寧な横方向の刷毛目、外面体部はナデ、底部は刷毛目で調整する。白色砂粒、金雲母を含み、灰黄褐色を呈する。外面には煤が大量に付着する。130は瓦質土器の足鍋の支脚である。指押さえて整形する。煤が付着する。131は青磁碗Ⅳ類の底部片である。高台下部外面が大きく面取りされる。高台下半から外底部にかけては施軸されていない。灰白色の胎土にオリブ灰色の釉がかかる。他に瓦質土器の火鉢、須恵器、白磁、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類、李朝の磁器、褐釉陶器の破片、鉄滓1点、炉壁24.94gが出土する。

SD74 (第51図)

調査区東側に位置し、SD03、SD104に切られた遺溝である。不定形の溝で西側は急激に細くなっている。深さは中央部が最も深く、40cmを測る。この溝には多くの杭が不規則に打ち込まれている。但し、他の溝の杭と同様、この溝に伴うかは不明である。覆土は上から黄褐色土、灰色砂質土で、下層の灰色砂質土に炭化物、焼けた石が多く混入していた。

出土遺物 (第67図、図版32)

132・133は回転糸切り底の土師器である。132は小皿で口径5.7cm、器高1.65cmを測る。胎土は精良で金雲母を含み、灰黄白色を呈する。灯明皿で、口縁部3ヶ所に煤の付着と二次焼成の跡がある。133は坏で、器壁が厚く、口径16.5cm、器高4cmを測る。金雲母を含み胎土は精良で、橙色を呈する。他に土師器、須恵器、土師質土器の鉢、挿鉢、瓦質土器、龍泉窯系青磁、李朝陶器の細片、鉄滓1点が出土する。

SD75 (第51図)

調査区東側で検出された、SD01・SD05に切られた溝である。溝は蛇行しながら、東西方向に走る。

深さは5cmと窪み状である。

出土遺物 (第67図)

134は土師器の坏である。回転系切り底をもち、口径9.3cm、器高2.1cmを測る。赤褐色粒、金雲母を大量に含み、にぶい褐色を呈する。他に土師質土器の鉢の細片が出土する。

SD90 (第51・66図、図版27)

調査区西側を南北方向に走る溝で、南側は調査区外へ延びる。幅は1.3m、中央部分が最も深くなり37cmを測る。土層からは再度掘削された状況がうかがえる。覆土には大量の炭化物が含まれていた。また、南側では焼けた石が多くみられた。鉄滓が11点出土する。

出土遺物 (第68図、図版32)

135～138は回転系切り底の土師器である。135は小皿で口径5.8cm、器高1.4cmを測る。胎土は精良で金雲母を含み、淡褐色を呈する。口縁部に煤の付着、二次焼成の痕跡がみられる。灯明皿である。136～138は坏で、口径10.7～11.5cm、器高1.95～2.35cmを測る。ともに金雲母、白色砂粒を含む。136は褐色を呈し、内外面に煤の付着がみられる。137は明褐色を呈する。138は灰褐色を呈し、内底面に煤の付着がみられる。139は土師器の蓋のつまみである。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含み、灰褐色を呈する。内面には多量の砂粒が付着する。140は瓦質土器の蓋の体部片である。体部中位に銚を巡らす。外面は刷毛目、内面はナデで調整する。暗灰色を呈し、外面には大量の煤が付着する。141は土師質土器で底部を欠損する。口縁上面は強い横ナデで「凹」状となる。復元口径51.1cmを測る。金雲母、白色砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。内面は横方向の丁寧な刷毛目、外面体部下半は刷毛目、上半はナデで整形する。外面には煤の付着がみられ、特に体部中位から口縁部にかけては大量の煤が付着する。142は端反りの白磁皿で、乳白色の胎土に白色の釉がかかる。二次焼成を受け、釉がとんでいる。高台底部には胎土目が付着する。143・144は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類である。143はヘラによる細線の線描蓮弁文である。144は見込みに沈線が1条巡る。釉は高台畳付を越えて高台内面にまで付着する。二次焼成を受け、釉はとんでいる。145は合子の蓋である。天井部に草花文を型押しする。灰白色の胎土にオリブ灰色の釉がかかる。輪花を有する。他に褐釉陶器、須恵器、染付の破片、鉄釘が出土する。

SD91 (第51図)

調査区西側に位置し、SD92に切られている溝である。南北方向に走り、北側で最も深く10cmを測る。

出土遺物 (第68図、図版32)

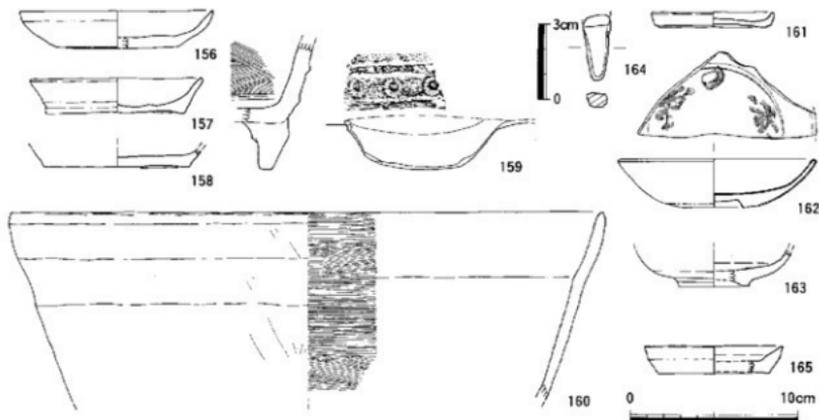
146は白磁Ⅳ類の口縁部片である。浅黄褐色の胎土に灰白色の釉がかかる。147は同安窯系青磁皿Ⅰ類の底部片である。見込み内にはヘラによる片彫りと櫛状の施文具で花文を描く。底部の釉は掻き取る。灰白色の胎土に明オリブ灰色の釉がかかる。148は明の染付碗C群のⅤ類である。体部外面に唐草文、腰に略化した蓮弁文、見込みに花卉文を描く。146・147は上層の出土遺物で混入の可能性がある。他に土師器、瓦質土器の足筒、土師質土器の鍋、褐釉陶器、鉄滓2点が出土する。

SD93 (第51・66図、図版27)

調査区西側に位置し、SD90の西側を南北方向に走る溝である。幅は70～110cmと南側にかけて広くなる。深さも10～50cmと南側が深くなっている。覆土には大量の炭化物が含まれていた。

出土遺物 (第68図、図版32)

149は口禿の白磁皿である。復元口径12.4cmを測る。150は明の染付碗B群のⅪ類である。端反りの口縁部をもち、体部外面には唐草文を描く。151は李朝陶器碗の底部片である。畳付、見込みに砂目が残る。釉はまだらにかかり、部分的に露胎を呈する。二次焼成を受ける。152は鉄釘である。角釘で頭部を曲けている。先端は曲がっている。他に土師器、須恵器、土師質土器の破片、鉄滓1点が出土する。



第69図 SD101・104・113出土遺物実測図 (1/3・1/2)

SD98 (第51図)

調査区東側に位置し、SD74に切られている溝である。幅35cm、深さ4cmを測り、窪み状を呈する。

出土遺物 (第68図、図版32)

153は底部系切りの土師皿である。灯明皿で、口縁部に2ヶ所二次焼成の跡が残る。胎土は精良で金雲母を含み、白橙色を呈する。他に鉄滓が1点出土する。

SD99 (第51図)

調査区東側に位置し、SD73・SD74に切られている溝である。深さは20cmを測る。

出土遺物 (第68図)

154は底部系切りの土師皿で、板目圧痕が残る。内面は強い指ナデで整形する。赤褐色粒、金雲母を含み、明橙色を呈する。155は平瓦で凹面には布目が残る。凸面には中央部に格子目叩きがみられ、両側はナデで整形する。須恵器、土師質土器の鍋、瓦質土器の足鍋、李朝陶器、鉄滓2点が出土する。

SD101 (第51図、図版27)

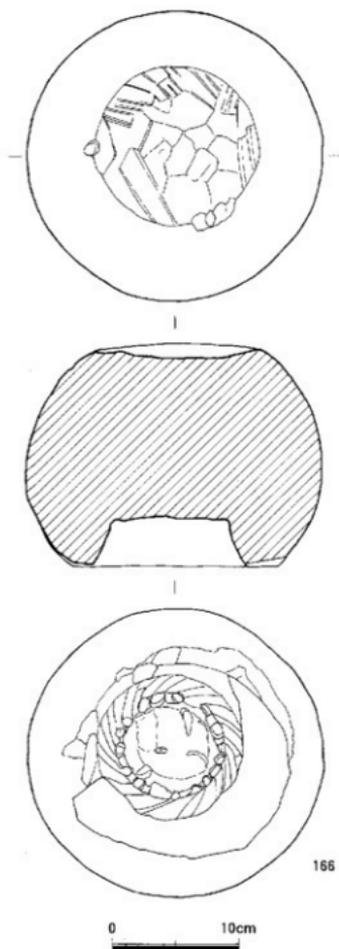
調査区中央、北壁で検出し、北側は調査区外へ延びている。北側から延びてきた溝は細くなり、西側へと直角に曲がっている。深さは20cmを測る。

出土遺物 (第69・70図、図版33)

156～158は回転系切り底の土師器の坏である。金雲母、白色砂粒を含み、156は橙色、157・158は灰褐色を呈する。159は土師質土器の火鉢である。半円状の短い脚をもつ。底部に2条の断面薄針状の突起を貼り付け、間に菊花文がスタンプされる。白色砂粒を多く含み、体部の内外面は明橙色、脚は黒色を呈する。160は土師質土器の鍋である。体部中位から口縁にかけてわずかに煤の付着がある。166は五輪帯の水輪である。全高18cm、最大径23.2cm、上部径16.2cm、下部径13cmを測る。上部は窪みが彫り込まれ、下部は浅く窪んでいる。のみの痕跡が残る。石材は砂岩である。鉄滓が5点出土する。

SD104 (第51図)

調査区東側で検出した溝である。SD01・SD03に切られている。溝は北側部分で東側に曲がり、SD03の下で検出された。本来、SD03に切られた部分で直角に曲がっていた溝と考えられる。



第70図 SD101出土遺物実測図 (1/4)

SK11 (第71図)

調査区東側に位置し、SK10に切られている土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈し、幅1.0m、深さ33cmを測る。断面は逆台形を呈する。覆土は黄灰色土、灰褐色土上の斑状である。

出土遺物 (第71図)

167は回転糸切り底をもつ土師器の小皿である。胎土は精良で、橙色を呈する。168は白磁皿Ⅲ類の底部片である。白色の胎上にやや緑味を帯びた白色釉を施す。

出土遺物 (第69図、図版33)

161は回転糸切り底をもつ土師器の小皿である。褐色粒、金雲母を含み、橙色を呈する。162は明の染付皿C群である。碁笥底をもち、口縁は内湾気味に収まる。163は李朝陶器の底部片である。壘付、見込みには砂目が残る。164は鉄製のたがねである。上部は欠損する。他に龍泉窯系青磁碗Ⅳ類の破片が出土する。

SD112 (第51図、図版27)

検出面で確認できず、重機で掘削後確認した遺構である。調査区中央を北東から南西にかけて走る。幅は1.1m、深さは検出面で10cmを測る。他の遺構面と同じ面から掘削されていれば、深さは40cmと推定される。出土遺物は土師器、須恵器、越州窯系青磁碗、同安窯系青磁皿、褐釉陶器の細片である。

SD113 (第51図)

SD112と同様、重機で掘削後確認した遺構である。調査区東側を東西方向にかけて走る。幅は1.7m、深さは検出面で5cmを測る。他の遺構面と同じ面から掘削されていれば、深さは25cmと推定される。

出土遺物 (第69図)

165は回転糸切り底をもつ土師器の小皿である。褐色粒、金雲母を含み、明橙色を呈する。他に須恵器片が出土する。

③土坑

SK10 (第71図)

調査区東側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ1.35m、幅1.1m、深さ45cmを測る。断面は逆台形を呈する。覆土上層は灰色土、下層は黄灰色土、灰褐色土上の斑状である。土師器、須恵器、李朝陶器の破片、鉄滓3点が出土する。

SK17 (第71図)

調査区中央に位置する。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.7m、幅1.0m、深さ54cmを測る。断面は逆台形を呈する。覆土は黄灰色土、灰褐色土の底状である。覆土中からガラス玉2点が出土する。

出土遺物 (第71図、図版33)

169・170は回転糸切り底をもつ土師器の小皿である。ともに金雲母を含み、169は明橙色、170は灰褐色、橙色を呈する。173・174は緑色を呈するガラス小玉である。175は管状土錘である。欠損しているが、残存部で14.51gを量る。他に明の染付碗C群の破片、鉄滓10点、炉壁7.61gが出土する。

SK20 (第51図)

調査区東側に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.9m、幅60cm、深さ10cmを測る。覆土は黄色土である。

出土遺物 (第71図、図版33)

171は白磁碗V類の口縁破片である。淡灰色の胎土に淡灰色の釉が薄くかかる。172は李朝の粉青沙器である。体部中位に刷毛目をみせた白化粧を施す。他に土師器、土師質土器の埴輪、銅の破片、鉄滓2点が出土する。

SK21 (第71図)

調査区中央に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.5m、幅45cm、深さ30cmを測る。中央が最も深くなっており、柱穴の可能性が大きい。土層では柱痕は確認できなかった。土師器、李朝の陶器片、鉄滓3点が出土する。銅銭が1点出土しているが、錆で彫れ詳細は不明である。

SK25 (第71図)

調査区中央に位置する。平面プランは東西方向に長い楕円形を呈し、長さ1.4m、幅35cm、深さは中央が1段深くなっており、22cmを測る。柱穴の可能性が大きい。

出土遺物 (第71図、図版33)

176は砂岩(天草石)の仕上げ砥石である。端部には溝が1条遺存する。他に糸切り底の土師皿、褐釉陶器の破片、鉄滓1点が出土する。

SK31 (第71図)

調査区中央に位置し、多くのピットに切られている土坑である。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ1.2m、幅0.85m、深さ45cmを測る。覆土は上から、灰色土・黒褐色土、浅黄色シルトの堆積で、焼土・炭化物を大量に含んでいた。土師器、同安窯系青磁皿の小破片、炉壁29.67gが出土している。

SK32 (第71図)

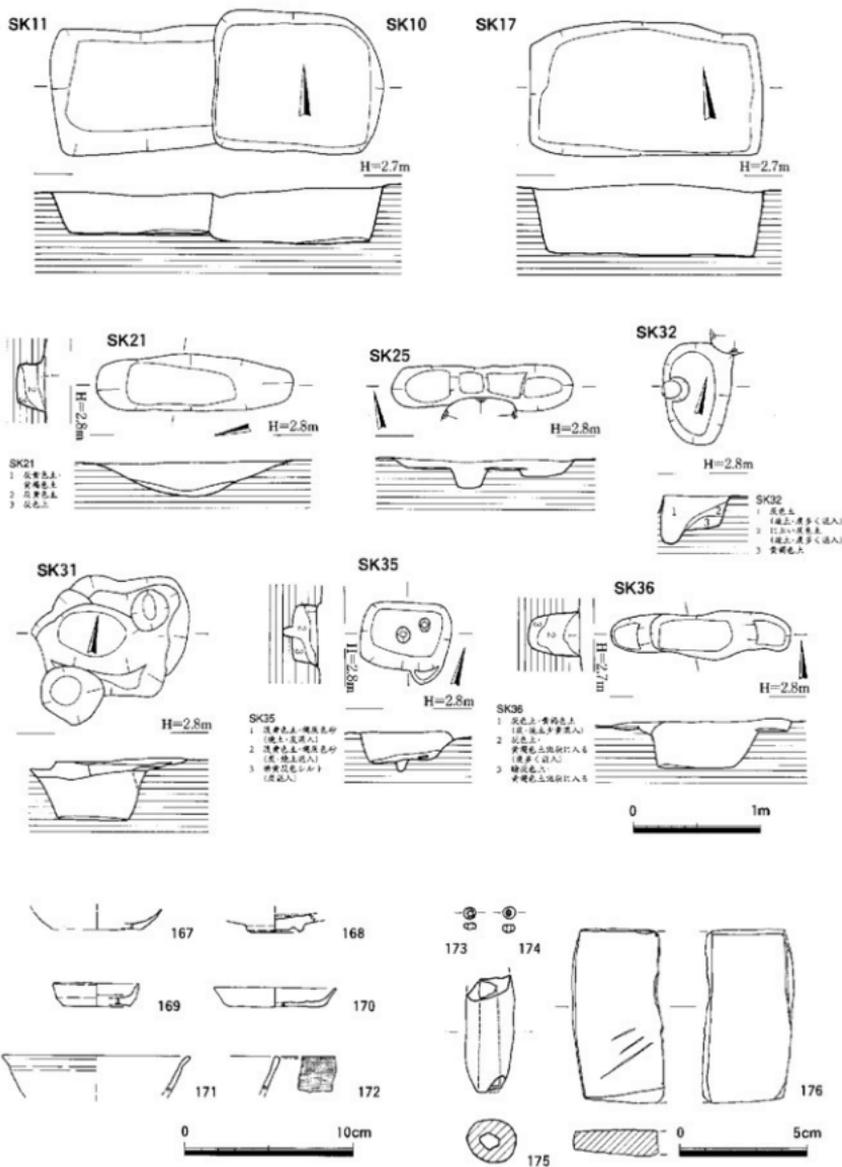
調査区中央に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長さ85cm、幅55cm、深さ25cmを測る。中央西側寄りに柱の痕跡があり、径15cmで、深さ40cmを測る。柱痕跡は灰色土を呈し、焼土、炭化物が大量に入る。また、掘方の埋土と考えられるにぶい灰色土、黄褐色土にも焼土、炭化物が多く入る。土師器片、大量の炉壁257.81gが出土している。

SK35 (第71図)

調査区中央南壁寄りで検出した。平面プランは隅丸長方形を呈し、長さ70cm、幅55cm、深さ20cmを測る。中央が1段深く、30cmを測る。柱穴と考えられる。土師器、須恵器の破片、鉄滓1点、炉壁18gが出土している。

SK36 (第71図)

調査区中央に位置する。平面プランは東西方向に長い楕円形を呈し、長さ1.4m、幅35cm、深さは中央が1段深くなり、38cmを測る。柱穴の可能性が大きい。土師器、須恵器の破片が出土している。



第71図 SK11・17・21・25・31・32・35・36実測図(1/40)およびSK11・17・20・25出土遺物実測図(1/3・1/2)

SK38 (第72図)

調査区中央に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.3m、幅80cm、深さは1mと深い。断面はU字形を呈する。土師器、須恵器、土師質土器の鍋の破片、鉄滓2点が出土する。

SK41 (第72図)

調査区東側に検出した。平面プランは楕円形を呈し、長さ1m、幅0.9m、深さ38cm、柱穴部分がやや深くなり45cmを測る。土師器、須恵器の破片、鉄滓2点が出土している。

SK45 (第72図)

調査区中央で検出した。多くのビットに切られる。平面プランは楕円形と考えられ、長さ1.2m、深さ12cmを測る。中央が1段深くなっており、20cmを測る。柱穴と考えられる。覆土は上から暗褐色土、灰黄色シルト、黄色シルトを呈し、焼土、炭化物を多く含んでいた。鉄滓1点、炉壁6.45gが出土する。

SK48 (第72図)

調査区中央に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.3m、幅50cm、深さは33cmと中央部が1段深くなる。土師器、白磁、同安窯系青磁の破片が出土する。

SK49 (第72図)

調査区中央に位置する。平面プランは東西方向に長い楕円形を呈し、長さ1.1m、幅30cm、深さは18cmを測る。2ヶ所柱の痕跡が見られ、22cm、28cmと深くなっている。土師器の破片が出上している。

SK50 (第72図)

調査区中央に位置し、北側はビットに切られている。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、幅40cm、深さは38cmと中央部が1段深くなっている。土師器、須恵器の破片が出土する。

SK51 (第72図)

調査区西側に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ75cm、幅25cm、深さは28cmと中央部が1段深くなる。柱痕と考えられる。土師器小皿の破片が出土している。

SK52 (第72図)

調査区西側に位置する。平面プランは東西方向に長い楕円形を呈し、長さ90cm、幅32cm、深さは18cmを測る。2ヶ所柱の痕跡が見られ、20cm、22cmと深くなっている。覆土は上から黄灰色土、灰色土で炭化物を少量含んでいる。土師器の破片、炉壁4.33gが出土する。

SK57 (第72図)

調査区西側に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.1m、幅55cm、深さは45cmを測る。覆土は灰色土、灰褐色土、明黄褐色土を呈する。

出土遺物 (第73図)

177は白磁皿Ⅱ類の口縁部片である。口縁は断面三角形を呈する。灰白色の胎土に淡灰色の釉を施軸する。178は龍泉窯系青磁坏Ⅲ-4類である。外面に蓮弁が描かれる。他に土師器片、鉄滓2点、炉壁33.31gが出土する。

SK60 (第72図)

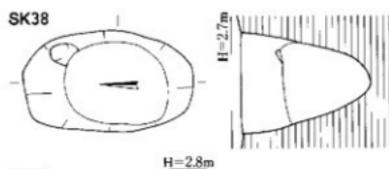
調査区西側に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.5m、幅65cm、深さは8～16cmと浅い。覆土は上から褐灰色土、暗灰黄色土である。

出土遺物 (第73図)

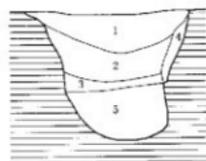
179は回転系切り底をもつ土師器の小皿である。金雲母を含み、橙色を呈する。鉄滓が1点出土する。

SK64 (第73図)

調査区西側に位置し、SK87に切られる土坑である。深さは33cmを測り、覆土は灰褐色土を呈する。

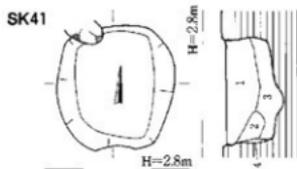


H=2.8m



SK38

- 1 黒褐色砂 灰褐色土・黄褐色土
- 2 黒褐色砂 灰褐色土
- 3 黒褐色砂 黄褐色土
- 4 黄褐色土
- 5 黄褐色砂三・灰色砂・イリブ灰色粘質土

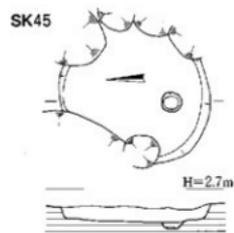


H=2.8m

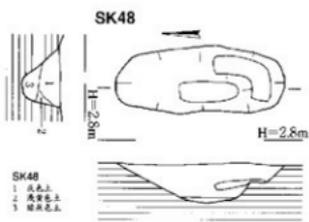


SK41

- 1 黒褐色土・黄褐色土
- 2 砂質土
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色土

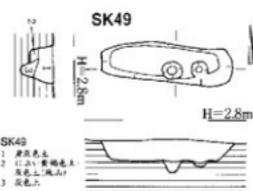


H=2.7m



H=2.8m

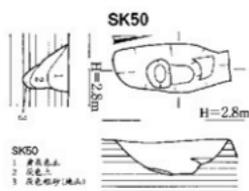
- SK48
- 1 灰褐色土
 - 2 黄褐色土
 - 3 黄褐色土



H=2.8m

SK49

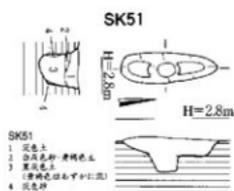
- 1 黄褐色土
- 2 (1) 黄褐色土
- 3 灰褐色土



H=2.8m

SK50

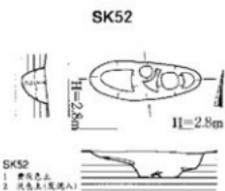
- 1 黄褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 黄褐色砂(塊状)



H=2.8m

SK51

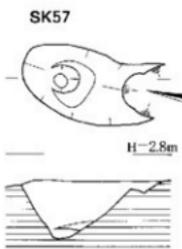
- 1 灰褐色土
- 2 黄褐色砂 黄褐色土
- 3 黄褐色土
- 4 (黄褐色砂土中イリブ)



H=2.8m

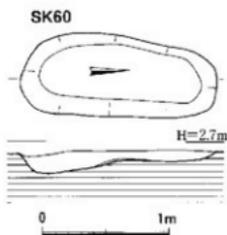
SK52

- 1 黄褐色土
- 2 灰褐色土(塊状)



H=2.8m

SK57



H=2.7m

SK60

0 1m

第72図 SK38・41・45・48~52・57・60実測図 (1/40)

出土遺物 (第73図)

192は北宋代の銅銭で、「治平通寶」(初鑄年:1064年)である。他に出土した遺物は土師器、青磁の破片、炉壁10.56gである。

SK65 (第73図)

調査区西側に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長さ85cm、幅65cm、深さは17cmを測る。覆土は灰褐色土を呈する。

出土遺物 (第73図)

193は北宋代の銅銭で、「治平元寶」(初鑄年:1064年)である。他に出土した遺物は土師器の破片、炉壁8.88gである。

SK66 (第73図、図版28)

調査区西側に位置する。平面プランは南北方向に長い楕円形を呈し、長さ1.15m、幅60cm、深さは30cmを測る。覆土は褐灰色土、黄褐色シルトを呈し、炭化物が少量入る。

出土遺物 (第73図)

180は回転系切り底をもつ土師器の小皿である。赤褐色粒、金雲母を多く含み、灰褐色を呈する。

SK69 (第51図)

調査区中央に位置し、不定形を呈する。SD05に切られ、最も深い部分で15cmを測る。覆土は灰色粘土、黄灰色土、明黄褐色シルトで、炭化物が層状に入る。

出土遺物 (第73図、図版33)

181は回転系切り底をもつ土師器の小皿である。明赤褐色粒、金雲母を少量含み、橙色を呈する。182は土師質土器の鍋の口縁部片である。外面に煤が付着する。183は龍泉窯青磁碗Ⅳ類の底部片である。高台底部、外底部の釉は掻き取っている。灰色の胎土にオリブ灰色の釉を施す。184は平瓦で、側面が遺存する。凹面には布目が残る、凸面には縄目叩きが見られる。他に明の染付、李明白磁の破片、鉄滓2点、炉壁16.82gが出土する。

SK70 (第73図)

調査区中央に位置し、平面プランは略方形を呈する。一辺1mを測り、2本の柱痕を確認した。

出土遺物 (第73図)

185は回転系切り底をもつ土師器の小皿片である。灯明皿で、口縁部に1ヶ所、二次焼成の跡が残る。他に須恵器片、鉄滓2点が出土する。

SK71 (第73図、図版28)

調査区中央南壁に位置する。楕円形を呈し、長さ75cm、幅60cm、深さ45cmを測る。完形の土師皿2枚が覆土中で出土した。

出土遺物 (第73図、図版33)

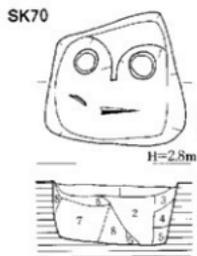
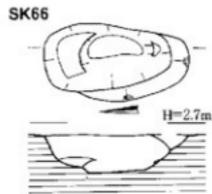
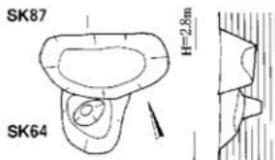
186・187は回転系切り底をもつ土師器の小皿である。186は口径4.15cm、器高1.7cmを測る。胎土は精良で、明橙色を呈する。187は口径4.2cm、器高1.55cmを測り、白橙色を呈する。灯明皿で、口縁部に焦げた痕跡がある。

SK72 (第73図、図版28)

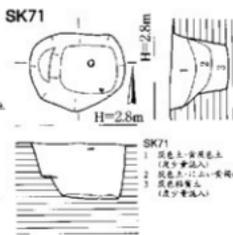
調査区東側に位置する。楕円形を呈し、長さ1m、幅80cm、深さ17cmを測る。上層には炭化物がまとまって出土した。土師器、土師質土器の鉢、炉壁20.58gが出土する。

SK77 (第74図、図版28)

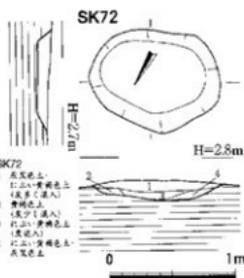
調査区中央に位置する。隅丸方形を呈し、長さ1.45m、幅1.05m、深さ35cmを測る。上層には炭化



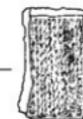
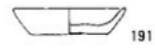
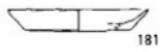
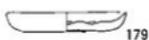
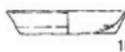
- SK70
- 1 黄褐色土、焼酎色土
 - 2 赤褐色土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 灰褐色土
 - 7 灰褐色土
 - 8 灰褐色土



- SK71
- 1 赤褐色土、黄褐色土
 - 2 灰褐色土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 灰褐色土
 - 7 灰褐色土
 - 8 灰褐色土



- SK72
- 1 灰褐色土
 - 2 赤褐色土
 - 3 灰褐色土
 - 4 灰褐色土
 - 5 灰褐色土
 - 6 灰褐色土
 - 7 灰褐色土
 - 8 灰褐色土



184

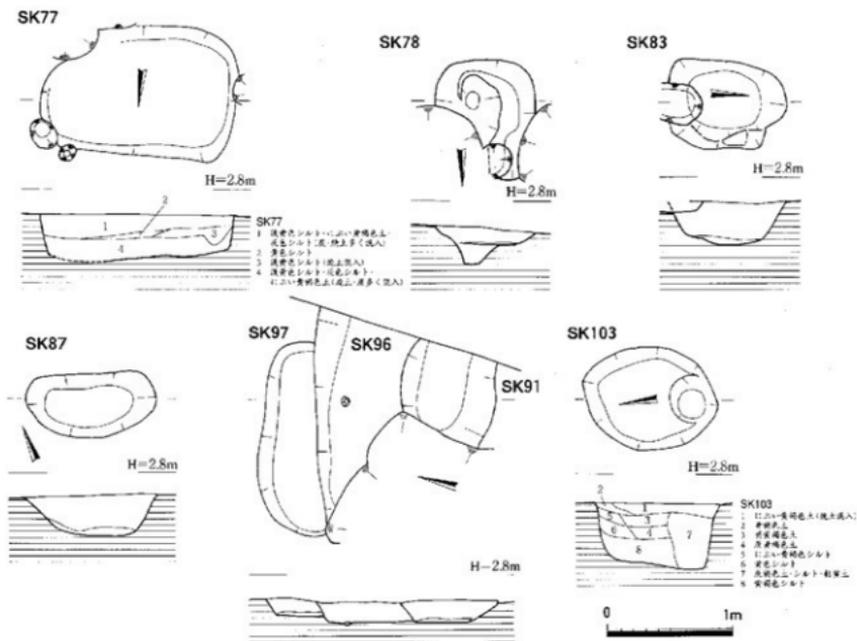


192



193

第73図 SK64~66・70~72実測図 (1/40) および
SK57・60・64~66・69~71・78・83・87・96出土遺物実測図 (1/3・1/1)



第74図 SK77・78・83・87・96・103実測図 (1/40)

物、焼土が大量に含まれる。土師器、須恵器の破片、鉄滓5点、多量の炉壁149.36gが出土する。

SK78 (第74図)

調査区中央に位置し、東側をSK77、西側をピットに切られている土坑である。中央が1段深くなり30cmを測る。柱痕と考えられる。

出土遺物 (第73図)

188は回転糸切り底をもつ土師器の坏である。赤褐色粒、金雲母を含み、にぶい褐色を呈する。

SK83 (第74図)

調査区西側に位置する。楕円形で、長さ95cm、幅70cm、深さ35cmを測る。覆土は灰褐色土である。

出土遺物 (第73図)

189は回転糸切り底をもつ土師器の小皿である。赤褐色粒、金雲母を含み、橙色を呈する。他に青磁、李朝の陶器片が出土する。

SK87 (第74図)

調査区西側に位置する。平面プランは東西方向に長い楕円形を呈し、長さ1m、幅50cm、深さは32cmを測る。覆土は灰褐色土である。

出土遺物 (第73図)

190は回転糸切り底をもつ土師器の坏である。赤褐色粒、金雲母を多く含み、明褐色を呈する。他に土師器、須恵器の小片が出土する。

SK91 (第74図、図版28)

調査区東側に位置し、東側は調査区外へ延び、西側はSD19に切られている。楕円形を呈し、幅75cm、深さ18cmを測る。上層には炭化物がまとまって出土した。遺物は出土していない。

SK96 (第74図、図版28)

調査区東側に位置する。楕円形を呈すると考えられるが東側は調査区外へ延び、南側はSK91に切られる。深さは16cmを測る。覆土は灰黄褐色土を呈し、炭化物を多く含む。

出土遺物 (第73図、図版33)

191は回転系切り底をもつ土師器の小皿である。金雲母を含み、にぶい黄褐色を呈する。口縁部内外面に煤の付着がみられ、灯明皿と思われる。青磁、土師器の破片、鉄滓1点、炉壁190.86gが出土する。

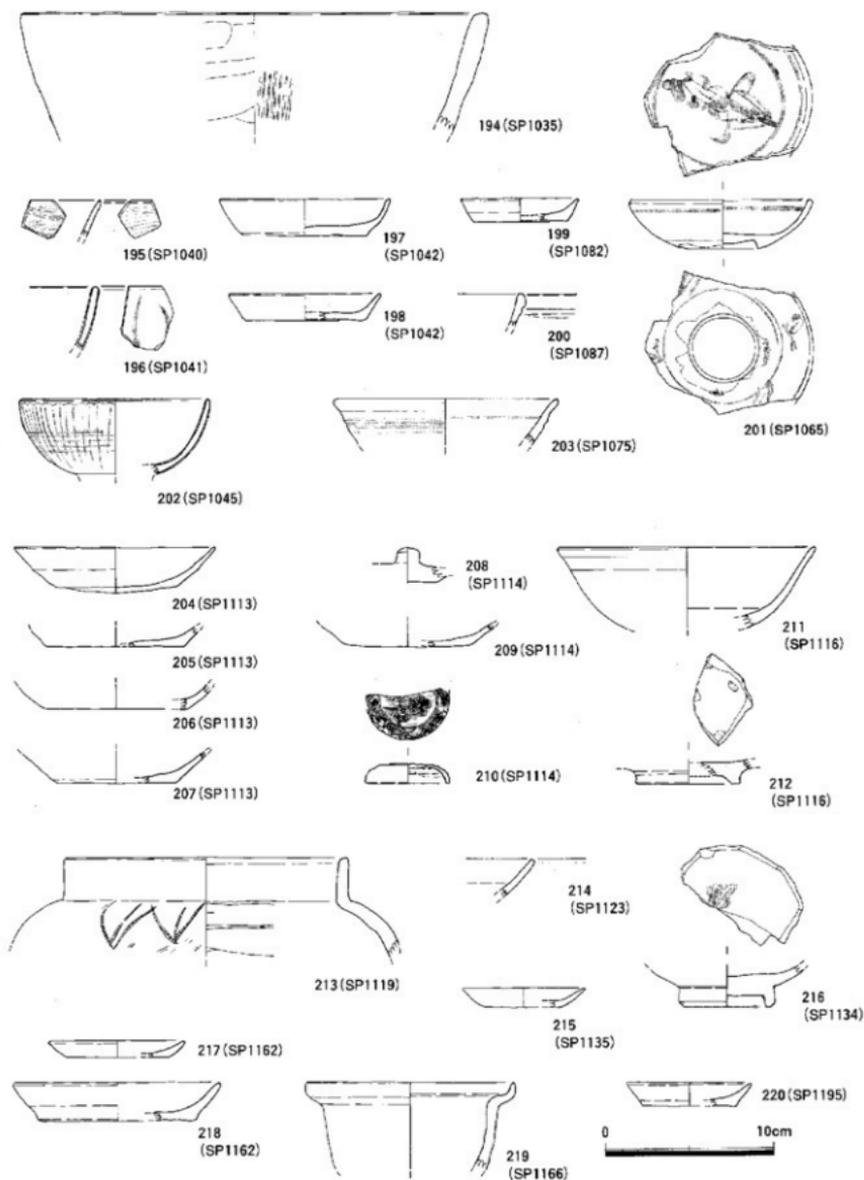
SK103 (第74図)

調査区中央に位置する。楕円形を呈し、長さ1.1m、幅80cm、深さは53cmを測る。土層で柱の痕跡を確認できる。土師器、須恵器の破片が出土する。

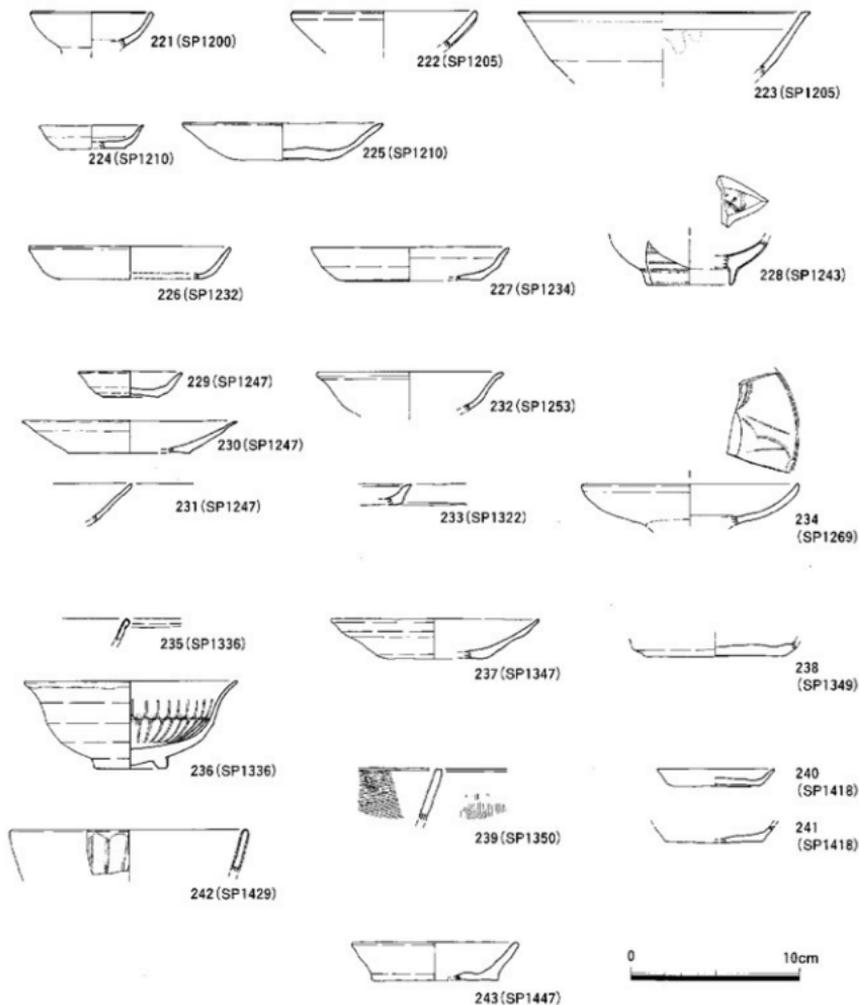
④その他の遺物

(1) ビット出土遺物 (第75～78図、図版29・33・34)

500あまりのビットを検出した。いずれも建物の柱であると思われるが、建物の復元には至らなかった。また、土坑とした遺構にも柱の痕跡がみられる。主な遺物のみを掲載した。194はSP1035出土遺物で土師質土器の播鉢である。7条の播目を有し、内面はナデで調整される。外面には煤が付着する。195はSP1040出土で李朝の粉青沙器である。刷毛目をみせた白化粧を施す。196はSP1041出土で龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5類である。197・198はSP1042出土で回転系切り底をもつ土師器の杯、皿である。ともに赤褐色粒を多く含み、橙色を呈する。199はSP1082出土で回転系切り底をもつ土師器の皿である。赤褐色粒、金雲母を多く含み、明褐色を呈する。200はSP1087出土で白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。201はSP1065出土で明の染付皿C群である。菖蒲底をもち、外底部は露胎である。202はSP1045出土で、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類である。復元口径11cmを測り、輪花を有する。外面にはヘラによる細線の線描蓮弁文を描く。203はSP1075出土で、李朝の白磁碗である。砂粒が多く入る白濁色の胎土に緑灰色の釉を施す。204～207はSP1113出土の回転系切り底をもつ土師器の坏である。ともに金雲母を多く含み、206は赤褐色粒も混入する。204・206は橙色、205は明褐色、207は灰褐色を呈する。208～210はSP1114出土である。208は土師器の蓋のつまみ部分である。指押さえて丁座につくられる。209は回転系切り底をもつ土師器の坏である。ともに胎土は精良で明褐色を呈する。210は白磁の合子蓋である。型押しによる陽刻の草花文が天井部、外面に施文される。灰白色の胎土に白灰色の釉が施される。釉は外面と内面天井部にかかる。211・212はSP1116出土で、李朝の陶器碗である。211は口径15.3cmを測り、淡灰色の胎土に灰色から淡灰色の釉が施される。212は底部片で、見込みに目跡が残る。二次焼成を受ける。213はSP1119出土で、土師質土器の釜である。肩部には貝殻で施文する。外面に煤の付着はみられないが、内面には煤が付着する。214はSP1123出土で、李朝の白磁碗の口縁部片である。にぶい黄褐色の胎土に灰褐色の釉が施される。215はSP1135出土で、回転系切り底をもつ土師器皿である。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を含み、明褐色を呈する。口縁部に一部煤が付着し、灯明皿と思われる。216はSP1134出土で、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類の底部片である。底部はにぶい橙色、他は灰色の胎土にオリブ灰色の釉がかかる。釉は全面に施釉される。217・218はSP1162出土である。217は回転系切り底をもつ土師器皿である。218は土師器の坏で、底部は磨滅し、不明である。ともに金雲母、白色砂粒を含み、217は明褐色、218は橙色を呈する。219はSP1166出土の土師器で、口縁部は体部から

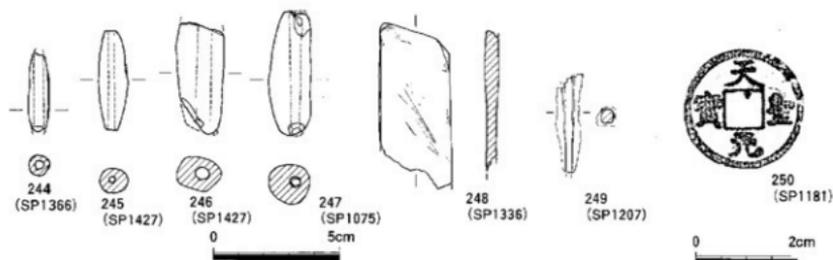


第75図 SP出土遺物実測図① (1/3)



第76図 SP出土遺物実測図② (1/3)

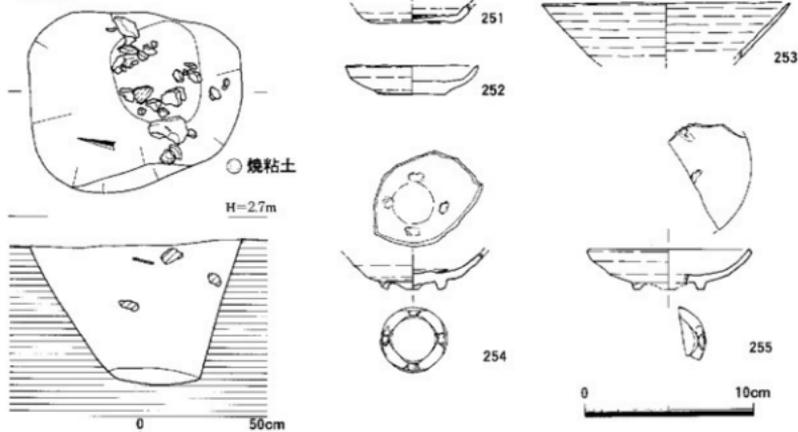
強く外反し、端部は内湾気味に立ち上がる。胎土は精良で金雲母をわずかに含み、橙色、淡橙色を呈する。脚の可能性もある。220はSP1195出土で、回転糸切り底をもつ土師器皿の底部片である。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。221はSP1200出土で白磁皿である。底部には高台の痕跡が残り、口縁は丸く引き出される、見込み部分の釉は掻き取られている。白色の胎土に灰白色の釉が施され、二次焼成を受ける。222・223はSP1205出土で、222は龍泉窯系青磁の口縁部片で



第77図 SP出土遺物実測図③ (1/2・1/1)

ある。223は白磁碗V-4類である。灰色の胎土に灰白色の釉を施す。224・225はSP1210出土の回転糸切り底をもつ土師器である。224は小皿、225は坏である。ともに金雲母を含む精良な胎土に、224は白橙色、225は橙色を呈する。226はSP1232出土で、回転糸切り底をもつ土師器の坏である。胎土は精良で、淡橙色を呈する。227はSP1234出土で、回転糸切り底をもつ土師器の坏である。胎土は精良で、淡橙色を呈する。228はSP1243出土で、明の染付の底部片である。墨付はヘラで面取りされる。他に李朝陶器の破片が出土する。229～231はSP1247出土である。229・230は回転糸切り底をもつ土師器である。229は小皿で金雲母を大量に含み、にぶい橙色を呈する。口縁部外面に煤が付着する。230は坏で灰白色を呈する。231は土師器碗の口縁部片である。胎土は精良で白橙色を呈する。232はSP1253出土で白磁の口縁部片である。口縁部は緩やかに外反する。灰白色の胎土に白灰色の釉がかかる。233はSP1322出土で、糸切り回転底をもつ土師器の小皿である。赤褐色粒、金雲母を含み、にぶい橙色を呈する。234はSP1269出土で、白磁皿VI類である。内面全体に花文を配している。白色の胎土に灰白色の釉がかかり、底部は露胎である。235・236はSP1336出土である。235は白磁碗の口縁部片である。236は白磁碗である。体部下位が膨らみ、口縁は外反する。体部内面には花卉の型押しが施される。胎土は白色で灰白色の釉がかかる。高台内面は露胎である。237はSP1347出土で、土師器の坏である。底部は磨滅により不明である。金雲母を多く含み、底部は灰黒色、他は灰白色を呈する。238はSP1349出土で、回転糸切り底をもつ土師器の坏である。赤褐色粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。239はSP1350出土で、土師質土器の口縁部片である。240・241はSP1418出土の回転糸切り底をもつ土師器の小皿である。ともに金雲母を含み胎土は精良で、240は橙色、241は明橙色を呈する。242はSP1429出土で、龍泉窯系青磁碗IV類の口縁部片である。片切彫の線描蓮弁文をもつ。243はSP1447出土で、回転糸切り底をもつ土師器の坏である。赤褐色粒、金雲母を多く含み、褐色を呈する。244～247は管状土錐である。244はSP1366出土で、1.72gを量る。245・246はSP1427出土で245は4g、246は9.08gを量る。247はSP1075出土で12.63gを量る。248はSP1336出土で細粒砂岩製の仕上げ砥石である。よく使用され中央部は凹状に窪んでいる。砥面全体に細い研磨痕が入る。249はSP1207出土の鉄釘である。断面方形で、頭部は欠損する。250はSP1181出土の北宋代の銅銭で、「天聖元寶」（初鑄年：1023年）である。251～255はSP1371出土である。SP1371は調査区中央南壁で検出したビットである。遺物と一緒に大量の焼けた粘土が出土した。251～253は土師器である。金雲母、白色砂粒を含み、251は灰褐色、252は明橙色を呈する。253は碗で体部に回転ナゲが残る。胎土は精良でにぶい橙色を呈する。254・255は白磁の高台付皿である。254は高台に4ヶ所弧状の挟り込みが入る。見込みに日跡が4ヶ所残る。白灰色の胎土に白灰色の釉が全面施釉される。254も高台に4ヶ所挟り込みが入り、日跡も4ヶ所残ると考えられる。口縁は内湾し、丸くおさめている。淡黄色の胎土に灰白色の釉が全面施釉される。他に鉄滓3点、炉壁24.19gが出土する。

SP1371



第78図 SP1371実測図 (1/20) および出土遺物実測図 (1/3)

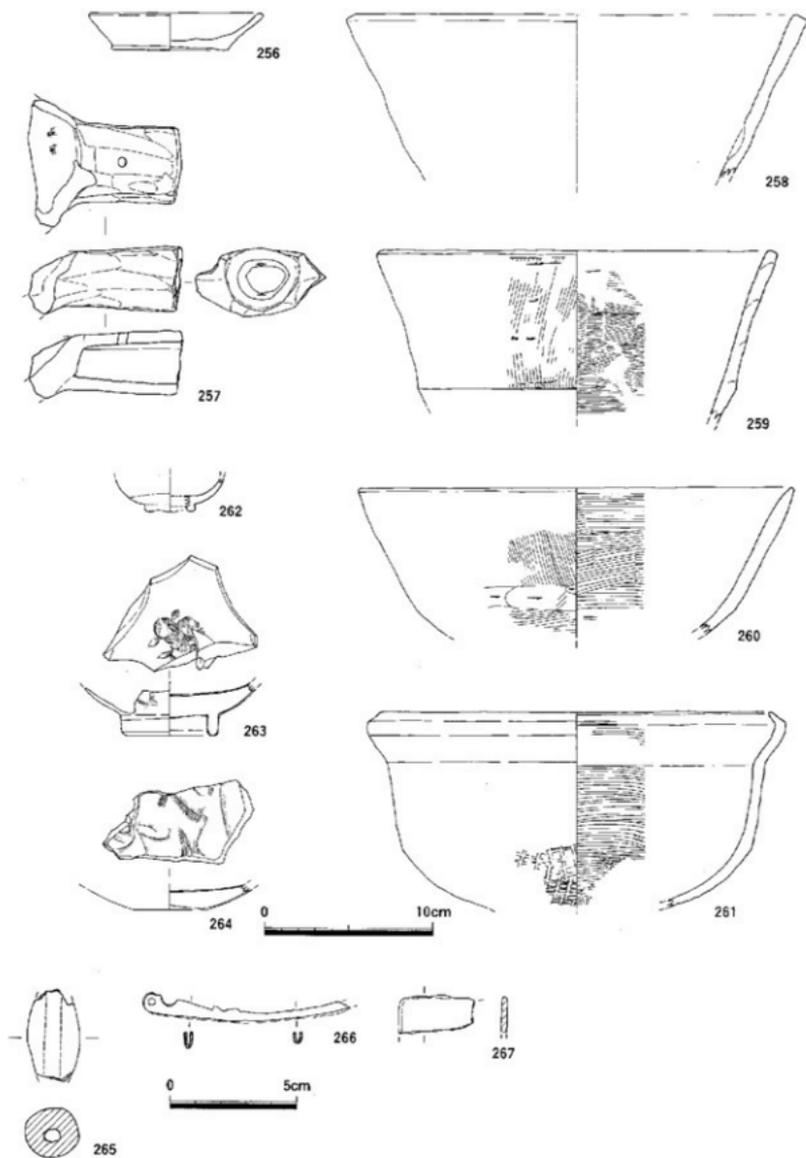
(2) 北側包含層出土遺物 (第79図、図版34)

調査区北壁側は遺構面が北に向かって傾斜し、包含層が堆積している。調査区内ではごく一部であるが、西側部分で検出した。漆塗の細片が出土した。黒漆の地に赤漆を施す。(図版29)

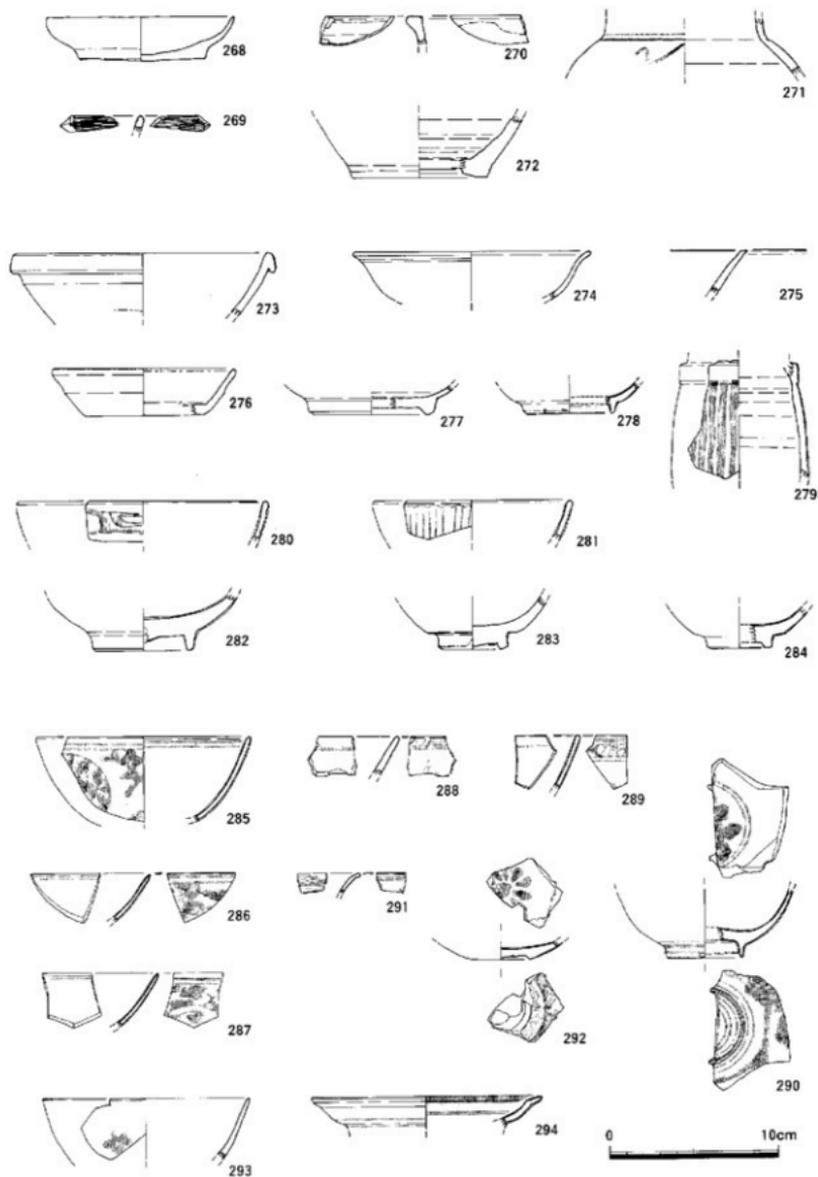
256は糸切り回転底をもつ土師器の坏である。赤褐色粒を多く含み、橙色を呈する。257は土師質土器の把手である。半円状の把手で、上面は平坦である。上面中央に穿孔がある。内外面に大量の煤が付着する。258～260は土師質土器の鉢である。258は内外面ともに器壁が荒れ、調整は不明である。259は外面に刷毛目、内面上半はナデ、下半は刷毛目で調整される。ともに白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。260は鍋で、外面に大量の煤が付着する。内面は刷毛目調整が残り、部分的に煤が付着する。赤褐色粒、白色砂粒を多く含み、にぶい黄褐色を呈する。261は瓦質土器の足銅である。口縁部は内湾気味に外反し、端部を内側へ折り曲げている。口縁部内外面は横ナデ、外面体部の上半は刷毛目と強いナデ、内面は刷毛目で調整する。内外面に煤が付着する。白色砂粒を含み、灰色を呈する。262は白磁の小碗である。高台には浅い抉り込みが入る。淡黄色の胎土に白色釉がかかる。外面下半は露胎である。263は龍泉窯系青磁碗Ⅳ類の底部片である。外底部は輪状に釉を掻き取っている。灰色の胎土に灰オリーブ色の釉がかかる。264は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-1類である。見込みにヘラで片彫りの花文を描く。265は管状土釘で、一部欠損する。残存で12.37gを量る。266は青銅製の縁金具である。成分には亜鉛、鉛、銀等を含む。亜鉛のピークが明瞭に認められることから真鍮製と考えられる。革製品の縁金具と思われる。267は鉄製で板状を呈する。大半が欠損するが、断面は方形を呈する。

(3) 包含層出土遺物 (第80・81図、図版34)

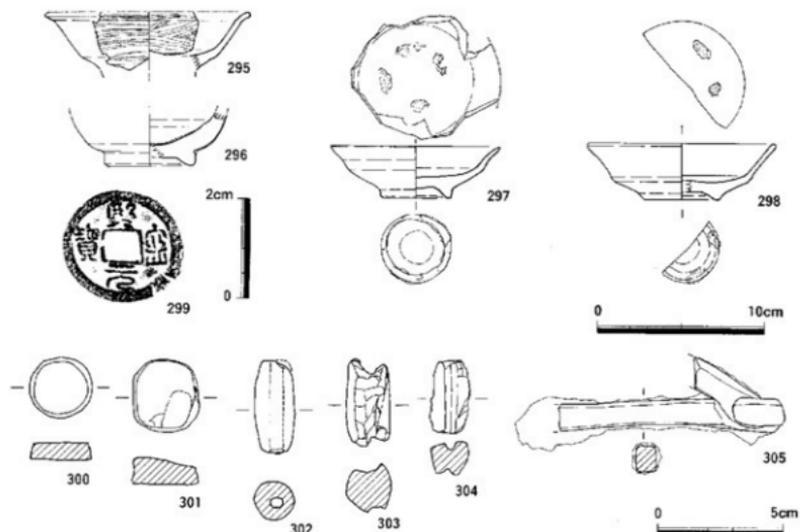
268は土師器の坏である。底部は磨滅のため調整不明である。赤褐色粒、金雲母、白色砂粒を多く含み、にぶい褐色を呈する。269は瓦器碗である。口縁部内面には1条の沈線が巡る。270は陶器の口縁部片である。端部は内側に折り曲げる。口縁部上面には砂目が一部残る。口縁上面から内面は露胎である。砂粒を含む灰色の胎土にオリーブ黄色の釉が外面にかかる。271は褐釉陶器の壺である。赤褐色の胎土に黄褐色の釉が施される。272は中国陶器の底部片である。蛇の目状の底部を有する。胎土は灰色、露胎部は明橙色を呈する。底部、内面は露胎である。外面にはオリーブ色の釉がかかる。273～279



第79図 北側包含層出土遺物実測図 (1/3・1/2)



第80图 包含层出土遗物实测图① (1/3)

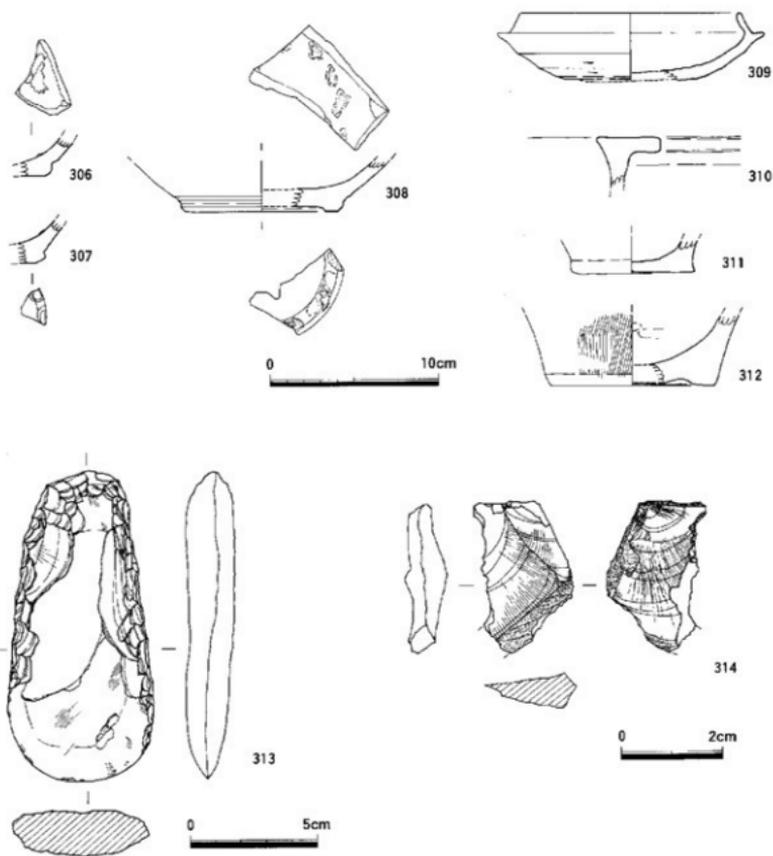


第81図 包含層出土遺物実測図② (1/3・1/2・1/1)

は白磁である。273は碗Ⅳ類の口縁部片である。274は口縁端部で強く外反する。白色の胎土に白色の釉がかかる。275はⅤ類の口縁部片、276は口甕皿である。277は高台内面から外底部にかけては露胎である。高台底部には砂が付着する。白灰色の胎土に白色の釉がかかる。278は甗付が露胎である。白灰色の胎土に白色の釉がかかる。279は白色の胎土にオリーブ灰色の釉を施す。縦方向に幅広の沈線状の文様を入れる。天地不明である。280～284は龍泉窯系青磁である。280～282は碗Ⅳ類である。280は外面に雷文、281は細線による蓮弁を施す。282は底部片で外底部は輪状に釉を掻き取っている。283・284は小碗Ⅰ類の底部片である。甗付から外底部は露胎である。285～292は明の染付である。285～289は碗C群である。外面には芭蕉葉文、唐草文が描かれる。290は碗E群である。291は碗の口縁部片で、口縁部は外反する。292は菴筒底をもつ、皿C群である。293・294は染付の口縁部片である。295は李朝の粉青沙器である。内外面に刷毛目をみせた白化粧を施す。296～298は李朝の陶器である。296は碗の底部片で、底部には大量の砂が付着する。二次焼成をうけ、釉はガラス化している。297・298は皿で、見込み、甗付に砂目が残る。297は二次焼成を受け、釉がとんでいる。298はにぶい橙色の胎土に、灰色から灰褐色、白灰色の釉がかかる。299は北宋代の銅銭で、「聖宗元寶」（初鑄年：1101年）である。SD05付近で出土した。300・301は土器片使用の円盤である。302は管状土鏝で、8.15gを量る。303・304は滑石製の石鏝である。重さは303が14.34g、304が8.6gである。溝は中央部を一周して刻まれる。側面はよく磨かれている。305は鉄製品で馬具の轡と思われる。

(4) 古代以前の遺物 (第82図、図版34)

306～308は越州窯系青磁の底部片である。306はSD03出土である。二次焼成をうけ、釉がとんでいる。見込みに胎土目が残る。甗付、外底部は露胎である。307は遺構検出時の出土である。残存部の外面は露胎である。精良な白灰色の胎土にオリーブ色の釉がかかる。見込み、甗付に胎土目が付着する。308はSD112・SP1144出土である。輪状の高台をもち、見込み、甗付に胎土目が付着する。灰色の胎



第82図 その他の出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

上に、オリーブ灰色の釉を全面施釉する。309は須恵器の坏身で北側包含層出土である。310～312は弥生時代の甕の口縁部、底部片である。310はSD113、311・312はSD03出土である。313は縄文時代の石斧で、SD02出土である。粘板岩製で、基部、側縁は剥離で調整し、刃部は研磨で調整する。刃部には使用痕、細かい擦痕がみられる。長さ12.4cm、幅5.7cm、厚さ1.9cmを測り、重さ204.47gを量る。314はSD19出土で、黒曜石のスクレーパーである。側面と遠端部に自然面を残す。自然面から角礫状の原石が推定でき、腰岳山と思われる。断口の色調は漆黒色を呈する。刃部は腹面右側、背面遠端部につくる。片面からの剥離で、二次調整をおこなっている。長さ3cm、幅1.9cm、厚さ0.8cmを測り、重さ3.6gを量る。

3. まとめ

今回の第2次調査では溝、井戸、多数の柱穴群を検出した。あわせて、輸入陶磁器、土師器、瓦質土器、陶質土器が多数出土している。中世の出土遺物としては12世紀代から17世紀前後のものまで出土しているが、15～16世紀が中心である。遺構は複数の切り合いが存在し、複数の立て替えが行われている。出土遺物に関しては15～16世紀代の遺物に混じって、12世紀代のものが多数含まれていた。何度も行われた立て替え時の混入と思われる。遺物、遺構から大きく3時期に分類し、遺構の説明を行っていく。

- I期 龍泉窯系青磁Ⅰ類、同安窯系青磁、白磁Ⅶ類が出現し、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類が減少傾向にある。13世紀後半から14世紀初頭にかけては龍泉窯系青磁Ⅲ類と白磁Ⅸ類が出現する。鎌倉時代（12世紀後半から14世紀初頭）である。
- Ⅱ期 龍泉窯系青磁Ⅳ類が出現し、白磁Ⅸ類が存続する時期である。白磁は萩府系白磁が出現する。土師器坏、皿では底径が小さく、口縁部が直線的に開く。室町時代前半を中心とした時期（14世紀前半）である。
- Ⅲ期 中国明代の磁器（青磁・白磁・染付）、李朝陶磁器（象嵌青磁・白磁・粉青沙器・陶器）が出土する。土師器坏、皿では口縁部が内湾気味に立ち上がり、小皿は矮小化する。室町時代後半を中心とした時期（15世紀～16世紀）である。

各期の遺物出土状況を見ると、Ⅱ・Ⅲ期の遺物に混じって、Ⅰ期の同安窯系青磁碗、皿、白磁碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類の遺物が多数出土する。これらの遺物がこの時期まで伝世したとは考えがたいため、これは前述したように立て替え時の混入と思われる。また、Ⅰ期とした13世紀中頃から14世紀前後に比定される白磁Ⅸ類は多数出土しているが、龍泉窯系青磁碗Ⅲ類の遺物がほとんどみられない。白磁Ⅸ類は後のⅡ期に伴うと考えられる。Ⅲ期になると、明の染付、李朝陶器・白磁が多数出土している。染付は碗Ⅱ類が2点、E類が1点出土しているが、それ以外はすべてC類である。朝鮮の陶磁器は象嵌青磁が出土するが、大半は李朝の陶磁器である。

I期の遺構は調査区中央を南西から北東にかけて走るSD112、調査区東側で検出したSK11がある。SD113もこの時期に近いと考えられるが、遺物は新しい様相を呈している。上面の遺物が混入した可能性も考えられる。また、この時期後半期に比定した龍泉窯系青磁碗Ⅲ類が、ほとんどみることができない。この時期の遺構は閑散とする状況であり、細々と続いていた集落が、この13世紀中頃～14世紀初頭には一時断絶した可能性も考えられる。Ⅱ期の遺構は出土遺物から井戸2基がこの時期から存在している。遺構等の切り合い状況からSE04はⅢ期の時期も存続していた可能性が大きい。Ⅲ期になると遺構数は激増する。大半の溝、柱穴がこの時期のものであり、立て替えもこの時期に繰り返行われたと考えられる。

次に遺構の規模、性格について考えてみる。南北方向、東西方向に走る規模の大きな溝①（SD01・SD02・SD03・SD05等）は屋敷地を区画する溝と考えられる。調査区中央をほぼ南北方向に走る溝②（SD39・SD40・SD47）、南から約5°程西側に振って走っている溝③（SD61・SD90～93）は屋敷に伴う雨落ち溝の可能性が考えられる。これに伴う建物の柱穴群は多数切り合った状況で検出した。溝③に対応する可能性をもつ溝として、調査区中央を東西方向に走るSD28～30がある。やや湾曲しているが、溝③とは方形を画している。これに伴う柱穴群は遺跡全体に拡がっている。西側に集中している柱穴群には、細長い楕円形を呈した柱穴が多く見られ、比較的、拾いやすい。第83図では薄い網、濃い網ともに、この方向の柱穴群をみつけることができる。溝②に伴う柱穴群は薄い網の部分

である。西側部分ではこれに伴う柱穴群はみられない。溝②と溝③の間、溝②より東側に集中する。建物の軸の違いはあるものの出土する遺物は、ほぼ同時期である。建物を建てた時期の前後はあるが、存続する期間は重複していた可能性が大きい。何度も同じ所で立て替えを行っていることから、地形による制約があった可能性がある。また建物の性格により、軸を描えなかった可能性もある。次に建物を構成している柱穴群であるが、長細い楕円形を呈するもの、楕円形、方形に分類できる。切り合い、出土遺物から、一概にはいえないが、全般的に長細い楕円形を呈するものがやや古めの様相を呈する。次に楕円形、方形へと続く。これらの建物群は溝①によって方形に区画されている。調査区の30m程北側では試掘調査によると柱穴が散見する程度である。北側は溝SD05により区画されている。東側は溝SD02で区画される。溝SD03が東側に続くことから東側部分にはSD03とSD01で区画された構造物があることも予測される。南側に関しては45m南側は下山門敷町第3次調査区がひろがり、ここからは下山門乙女田遺跡の時期に伴うと考えられる墓8基を確認したのみである。建物跡は南北方向50m以内におさまると考えられる。西側は不明である。

第1次調査区は第2次調査区の北東方向に位置し、同時期である平安時代後期の遺構、遺物が出土している。方形に区画された集落も確認されている。規模は南北方向約30m、東西方向約13mである。その西側、南側には水田が広がっている。今回検出した遺構群は溝の規模、建物群、出土遺物からみても、周辺の村落とは異なり、日常生活を営んだ居館の様相を充分備えているといえる。

下山門乙女田遺跡の居館は溝によって区画され、14世紀前半から16世紀にかけて存続する。館内からは多数の柱穴が検出され、複数の立て替えが行われている。雨落ち溝と考えられる溝が館内を南北方向に走る。遺物では在土器のほかには中国陶磁器、李朝陶磁器が多く出土している。また、漆器製品、五輪塔の一部である水輪、金属製品、ウマの歯が出土している。以上のことから今回検出した遺構は、この周辺に展開する集落をおさめていた領主の屋敷である可能性が大きい。

周辺の遺跡でもこのような居館が見つかっている。下山門乙女田遺跡の南側に位置する拾六町亀田遺跡内には調査は行われていないが、100m四方を土塁で囲んだ町屋敷跡があり、中世の居館と推定されている。この遺跡内には13～14世紀を主体とした集落が確認され、15～16世紀の流路が検出されている。中世前半を主体とした方形区画の大溝を伴った居館はさらに南側に位置する田村遺跡、清末遺跡群、西側に位置する有田遺跡群、柏原遺跡群、粕屋平野に位置する戸原麦尾遺跡で確認されている。今回調査した下山門乙女田遺跡のように中世後半に主体をおいた居館は、西側に位置する原遺跡、福岡平野に位置する諸河遺跡が挙げられる。

出土遺物として上記の他に、溝、柱穴から鉄滓が出土した。鉄滓は大半が鍛冶に伴うものであり、少量の鉄塊系遺物をみることができる。これに関連する遺構は調査区から検出しておらず、このような屋敷地内に鍛冶をおこなう場所を設けるとは考え難い。鍛冶は調査区周辺でおこなわれ、これらの鉄滓は混入の可能性が高いと考えられる。



第83図 下山門乙女田遺跡中世遺構配置図(1/400)

福岡市、下山門敷町遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

I. 下山門敷町遺跡における植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。

2. 試料

分析試料は、弥生時代中期とされるSK49土坑から採取された白色遺物である。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法 (藤原, 1976) をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42kHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10⁻⁵g) をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ (赤米) の換算係数は2.9%、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、ネザサ節は0.48である。

4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型 (おもにススキ属)

[イネ科一タケ亜科]

ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、未分類等

[イネ科-その他]

棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

クスノキ科、その他

[その他]

海綿骨針

5. 考察

弥生時代中期とされるSK49上坑から採取された白色遺物について分析を行った。その結果、海綿動物に由来する海綿骨針 (宇津川ほか, 1979, 1980) が22万個/g以上と極めて多量に検出された。ここで検出された海綿は、尋常海綿の一軸型 (monaxon type) に属するものである。また、白色遺物からはイネの植物珪酸体が多量に検出され、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、ネザサ節型、クスノキ科なども検出された。イネの密度は5900個/gと高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5000個/gを上回っている。

以上のことから、白色遺物はおもに海綿に由来すると考えられ、何らかの形で海綿 (スポンジ) が利用されていた可能性が考えられる。また、イネが多量に検出されることから、白色遺物にはイネ産も混在していたと推定される。

文献

- 宇津川徹・細野衛・杉原重夫 (1979) テフラ中の動物珪酸体 " Opal Sponge Spicules " について、ペドロジスト, 第23巻 第2号, p.134-144.
- 宇津川徹・三條朝宏 (1980) 土器胎土中の動物珪酸体について (1), 考古学ジャーナル, 181, 22-25.
- 宇津川徹・三條朝宏 (1980) 土器胎土中の動物珪酸体について (2), 考古学ジャーナル, 184, 14-17.
- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-, 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

表1 福岡市、下山門敷町遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	地点・試料	SK49 白色遺物
イネ科	Gramineae (Grasses)		
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)		59
キビ族型	Panicaceae type		7
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)		7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type		20
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
ネザザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>		7
未分類等	Others		13
その他のイネ科	Others		
棒状珪酸体	Rod-shaped		7
未分類等	Others		52
樹木起源	Arboreal		
クスノキ科	Lauraceae		7
その他	Others		7
(海綿骨針)	Sponge		2256
植物珪酸体総数	Total		183

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	1.73
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	0.41
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.24
ネザザ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.03

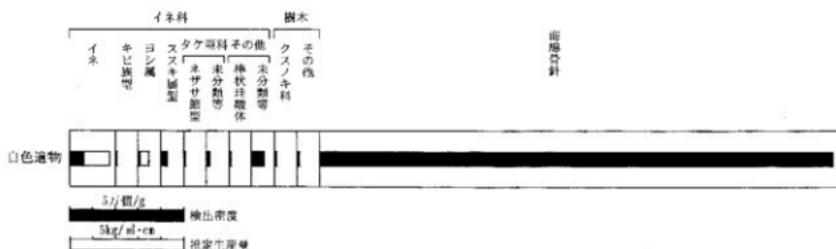
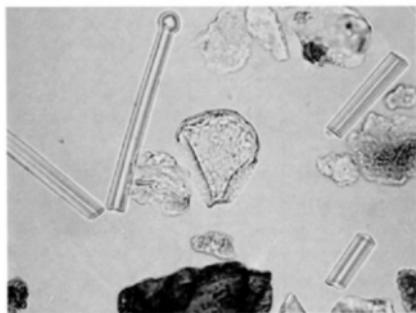
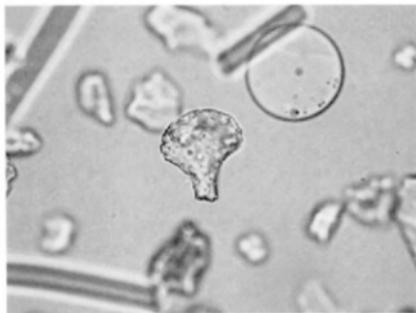


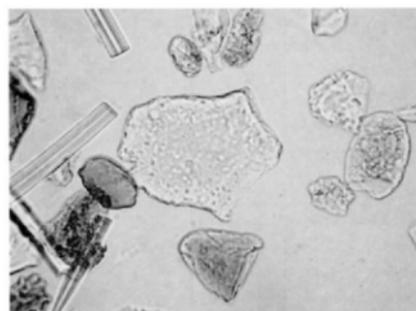
図1 下山門敷町遺跡, SK49における植物珪酸体分析結果



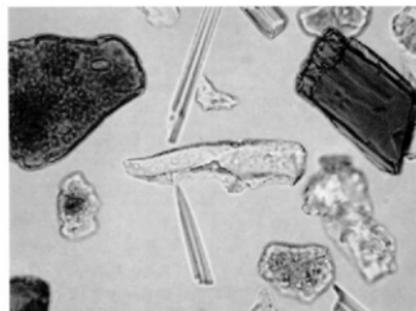
イネ



イネ



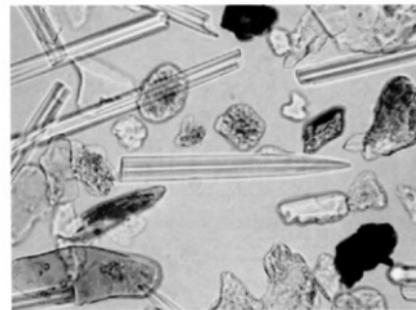
ヨシ属



クスノギ科



海綿骨針



海綿骨針

植物珪酸体(プラント・オパール)などの顕微鏡写真  50μm

II. 下山門敷町遺跡における珪藻分析

1. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、温った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

2. 試料

分析試料は、弥生時代中期とされるSK49十坑から採取された白色遺物である。

3. 方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

- 1) 試料から乾燥重量1gを秤量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温しながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと炭品を水洗
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡・計数

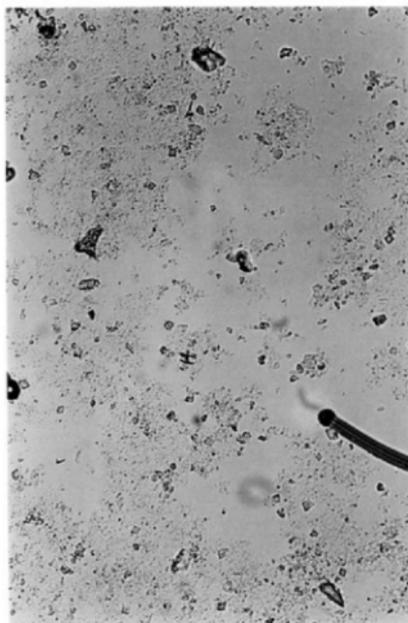
検鏡は、生物顕微鏡によって600~1000倍で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4. 結果および考察

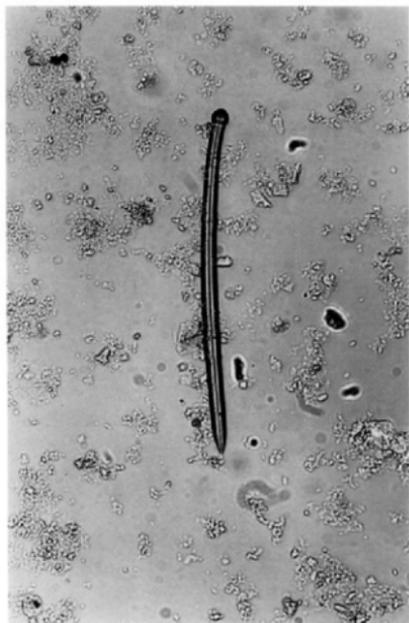
弥生時代中期とされるSK49十坑から採取された白色遺物について分析を行った。その結果、珪藻はまったく検出されなかった。したがって、白色遺物には珪藻は含まれていないと考えられる。

文献

- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義—わが国への導入とその展開—。植生史研究, 第1号, 植生史研究会, p.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用。第四紀研究, 27, p.1-20.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用。東北地理, 42, p.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用。珪藻学会誌, 6, p.23-45.



弱拡大写真



標本中に認められた海綿骨針

— 10 μ m

Ⅲ. 下山門敷町遺跡における樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

分析試料は、SK49土坑から採取された木材（炭化している部分が多い）である。

3. 方法

カミソリを用いて、新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、生物顕微鏡によって60～600倍で観察した。また炭化部分については、割折して新鮮な基本的三断面を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

分析の結果、マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylo* と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真を示す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylo* マツ科

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。

5. 所見

分析の結果、SK49土坑から採取された木材はマツ属複維管束亜属と同定された。マツ属複維管束亜属にはクロマツとアカマツがあり、いずれも北海道南部、本州、四国、九州に分布する常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。クロマツは海岸部に多く生育し、アカマツは土壌の少ない痩せたところに多く生育する。

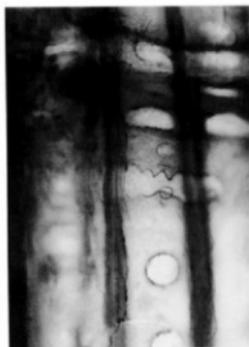
文献

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48。
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100。
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p。

下山門敷町遺跡の木材



横断面 ————— : 0.2mm
木材 マツ属複維管束亜属



放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.2mm

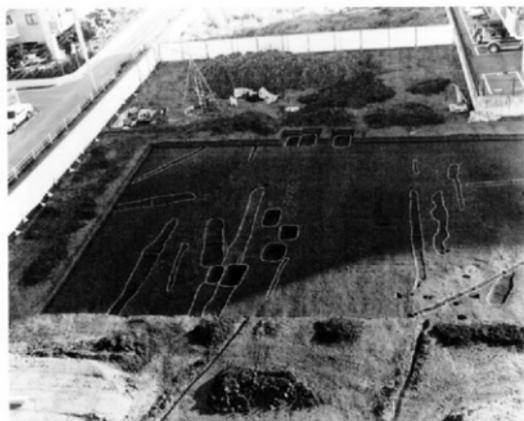
圖 版



(1) 上面調査区全景 (東から)



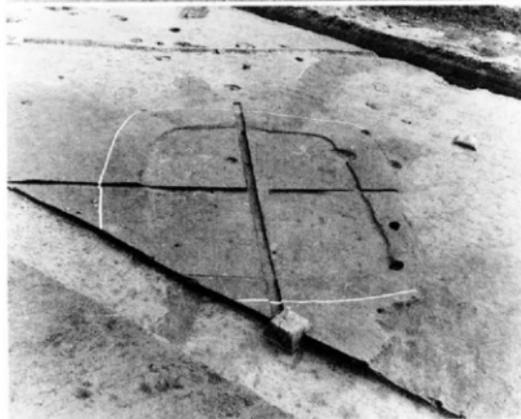
(2) 上面調査区西側全景 (北東から)



(1) SK01~08 (北から)



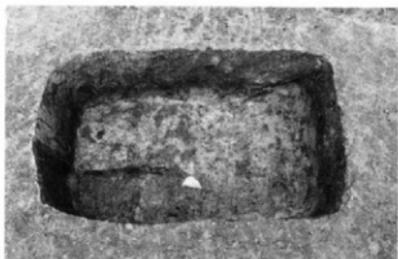
(2) SC41 炭化物出土状況 (東から)



(3) SC41 (北西から)



(1) SK01 (西から)



(2) SK02 (西から)



(3) SK03 (東から)



(4) SK04・05 (北から)



(5) SK06・07 (北から)



(6) SK08 (北から)



(1) SD22~26 (北から)



(2) SD28 (北東から)



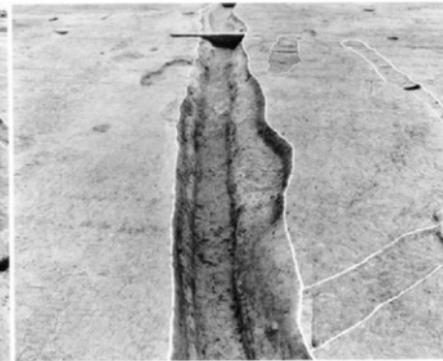
(3) SD30~32 (北東から)



(4) SD33 (北東から)



(5) SD35 (北から)



(6) SD39 (北から)



(1) 下面調査区全景 (東から)



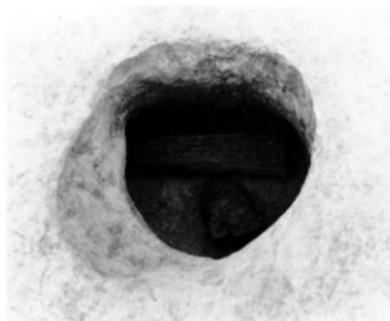
(2) 下面調査区中央全景 (東から)



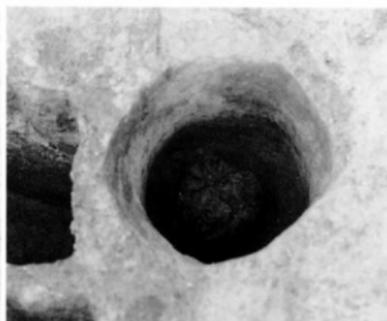
(1) SC64 (西から)



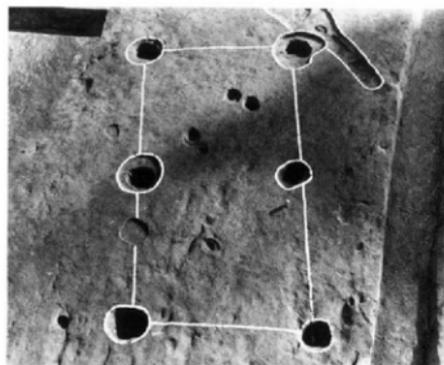
(2) SC78 (北から)



(3) SC78-1 (南から)



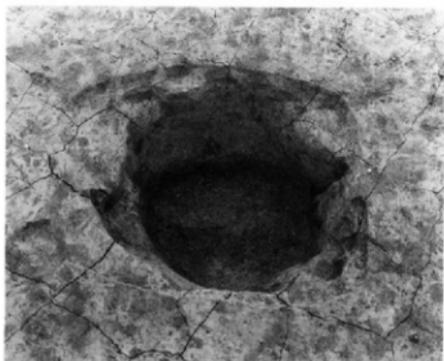
(4) SC78-2-1 (南から)



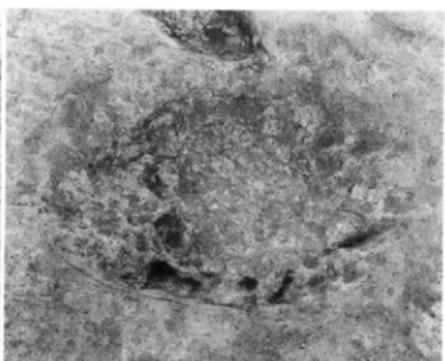
(1) SB58 (北から)



(2) SB77 (北西から)



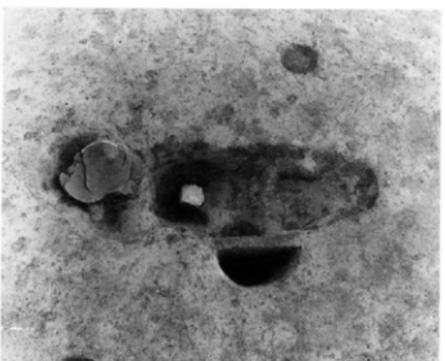
(3) SK42 (北から)



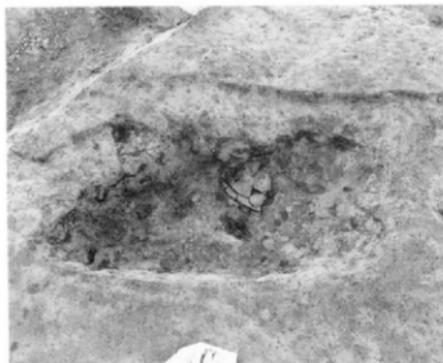
(4) SK43 (西から)



(5) SK44 (南から)



(6) SK45・52 (南から)



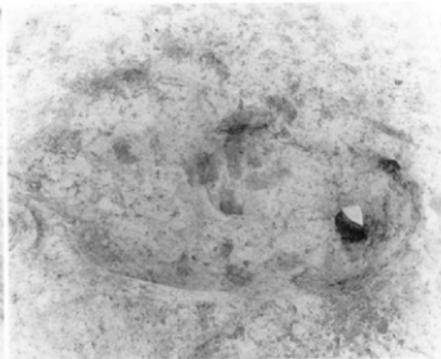
(1) SK46 (南から)



(2) SK47 (北東から)



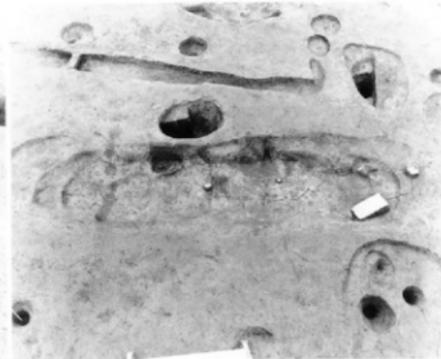
(3) SK48 (東から)



(4) SK50 (南から)



(5) SK51 (北から)



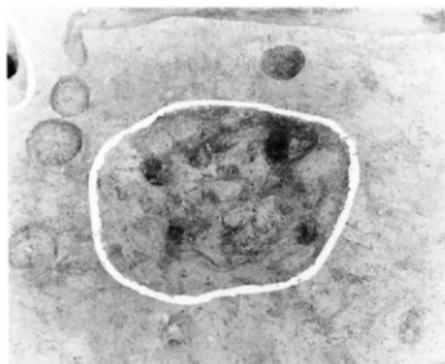
(6) SK53 (東から)



(1) SK49 (東から)



(2) SK49遺物出土状況 (西から)



(1) SK54 (南から)



(2) SK55 (南から)



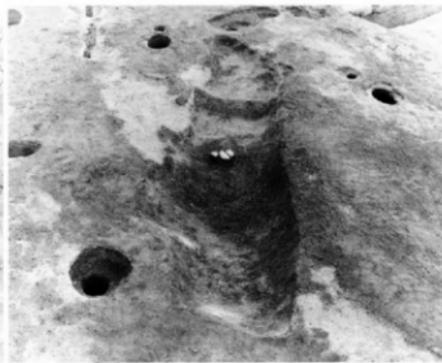
(3) SK56 (南から)



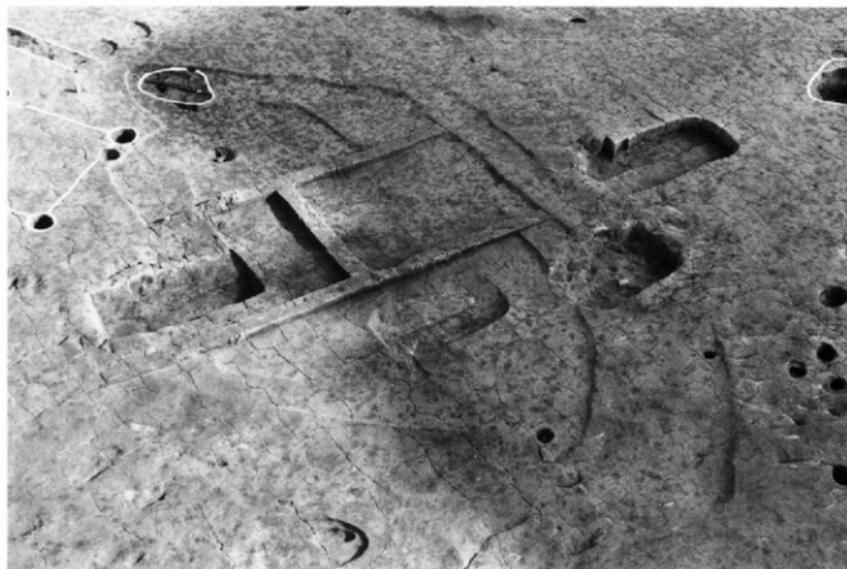
(4) SK57 (北から)



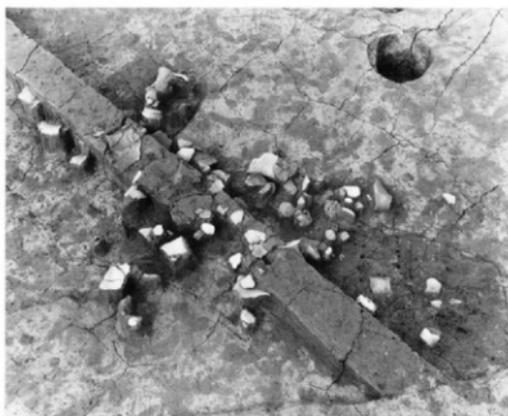
(5) SK63 (南から)



(6) SK67 (東から)



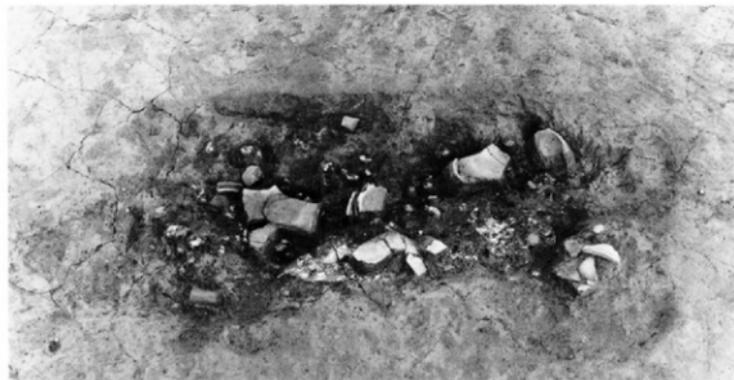
(1) SK59 (北西から)



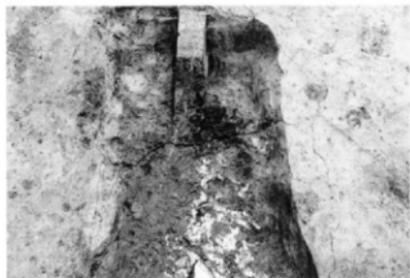
(2) SK59遺物出土状況 (南から)



(1) SK60 (北から)



(2) SK61 (南から)



(3) SK60海綿出土状況 (北東から)



(4) SK61管玉出土状況 (南から)



(1) SK65 (南東から)



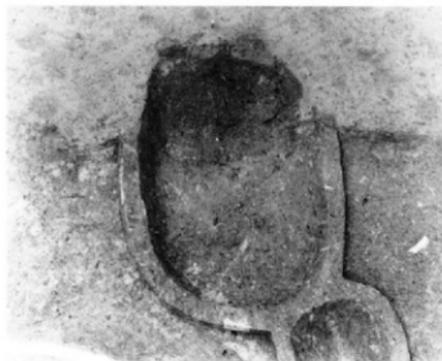
(2) SK65 (北東から)



(1) SK73 (東から)



(2) SK74 (北から)



(3) SK75 (西から)



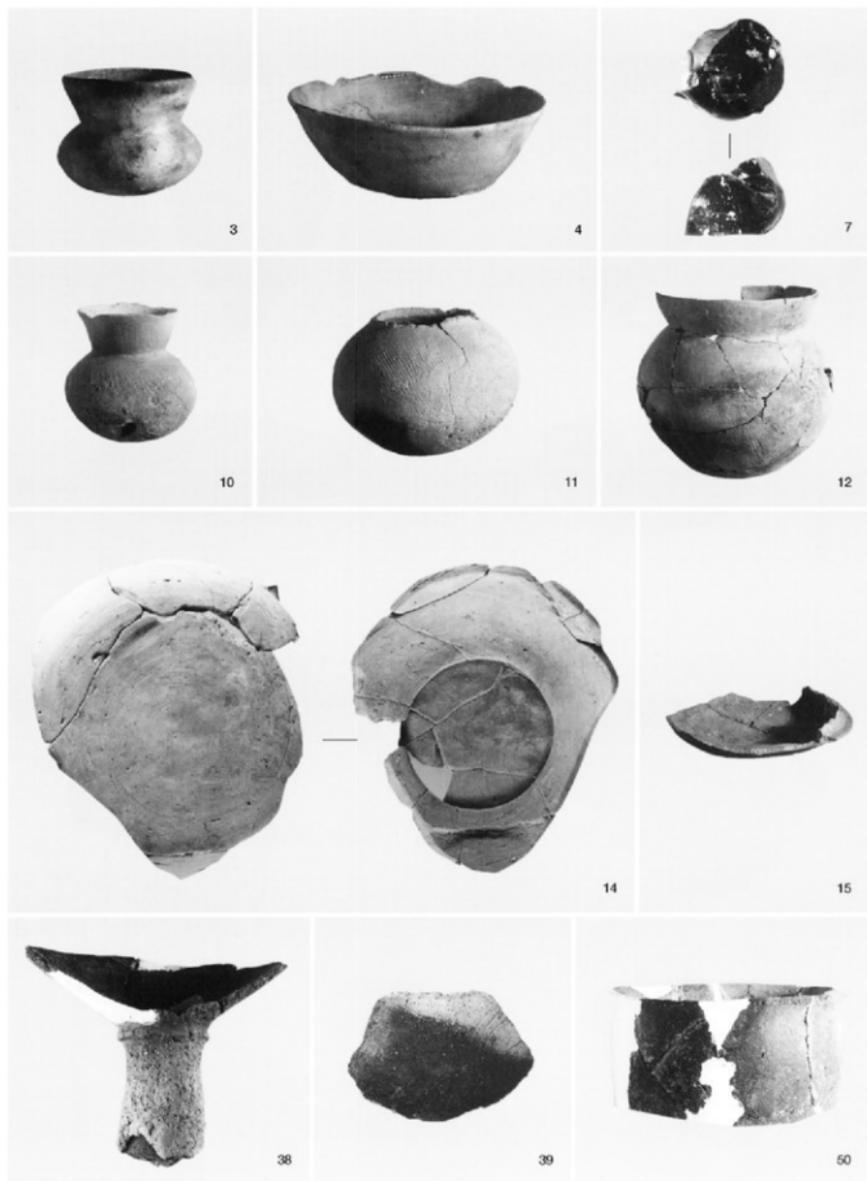
(4) SK74・75・80・81周辺 (北から)

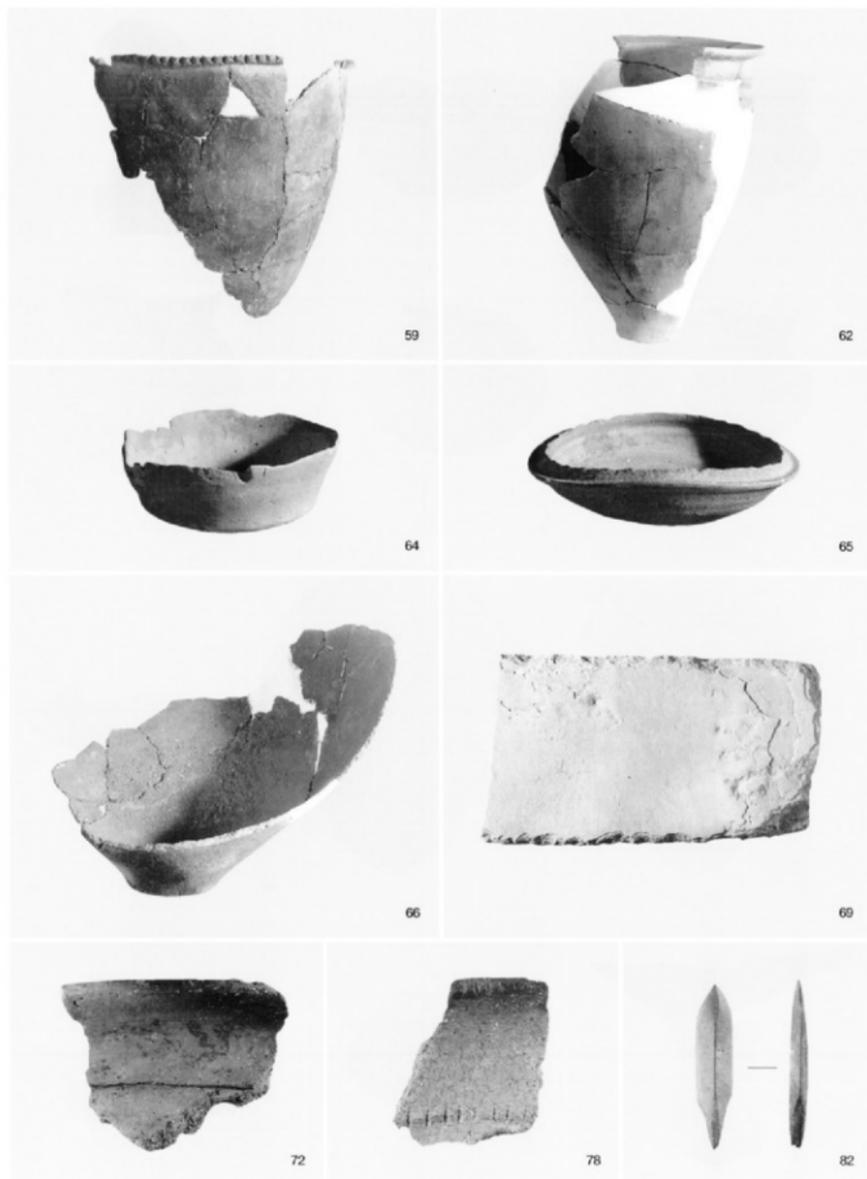


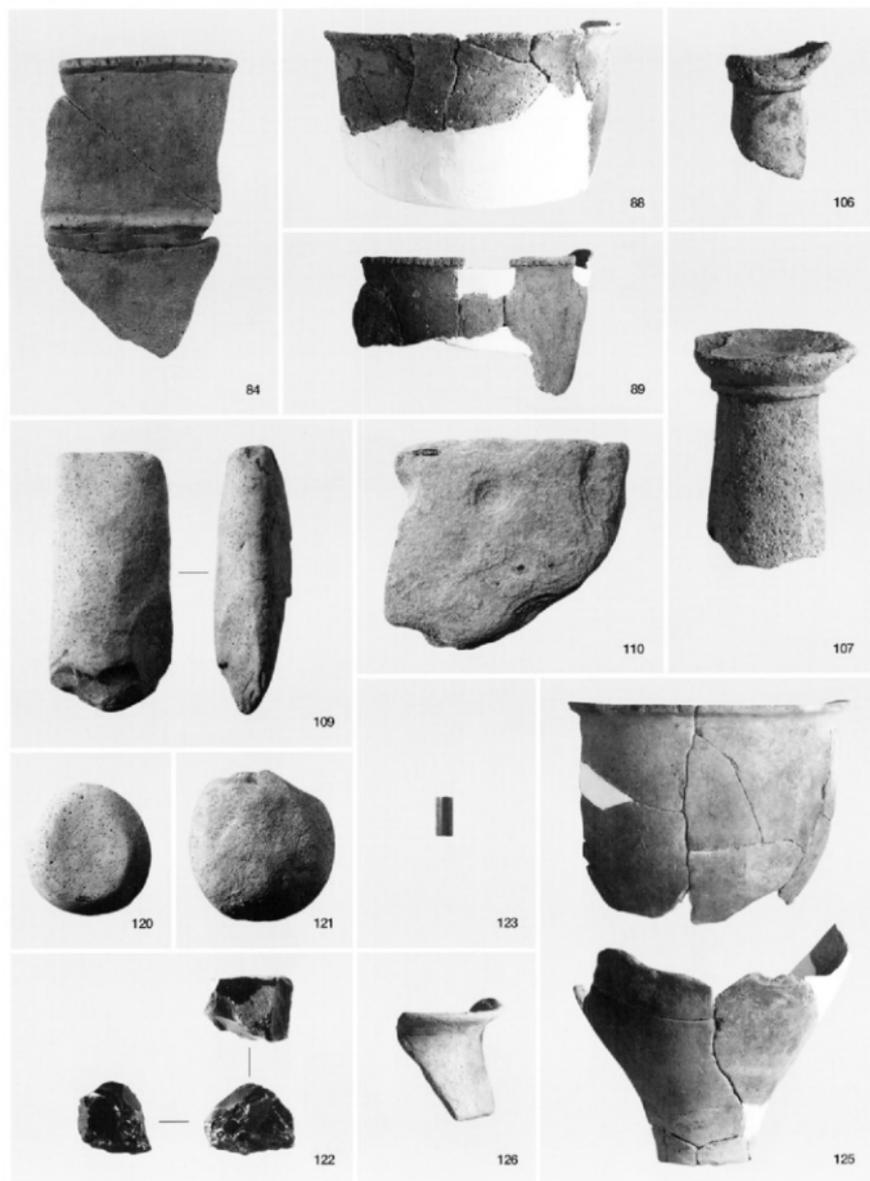
(5) SD72 (北から)



(6) SD72付近足跡出土状況 (北から)









127



128



130



143



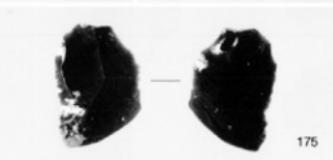
145



146



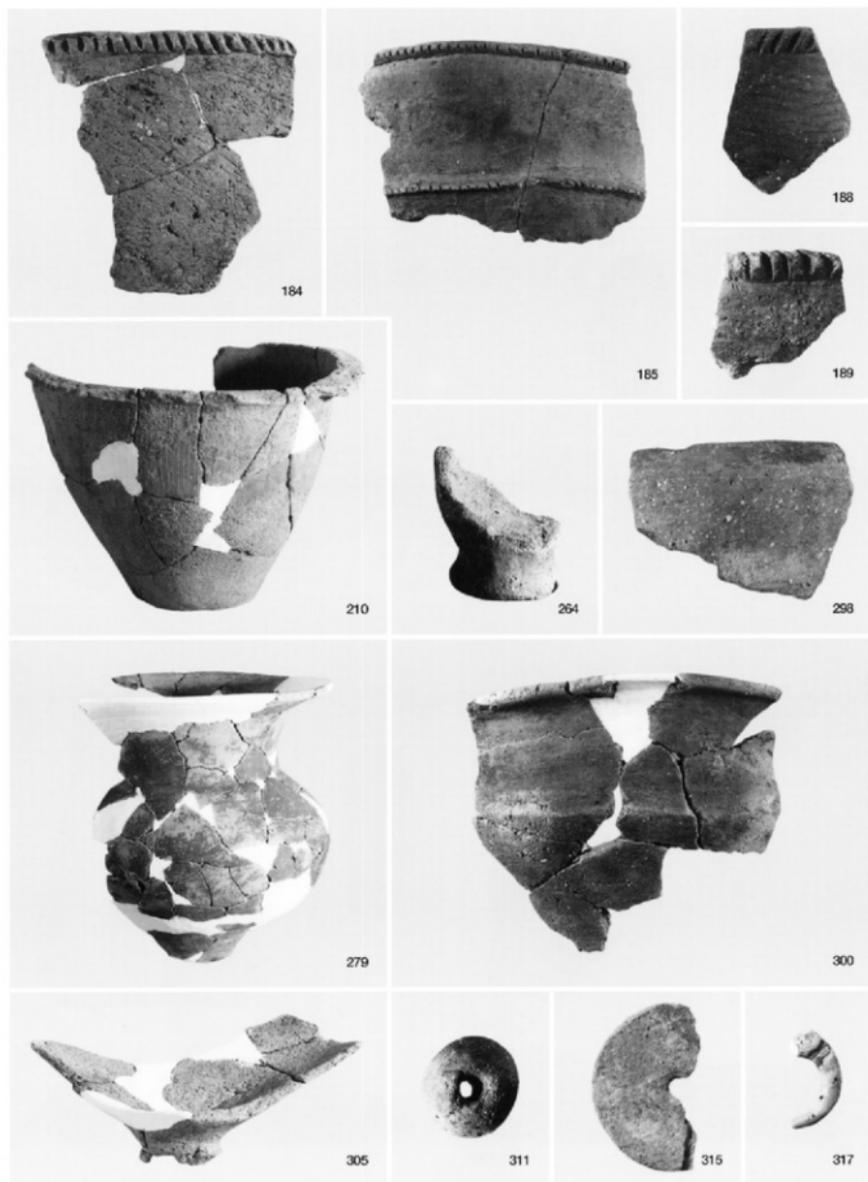
149

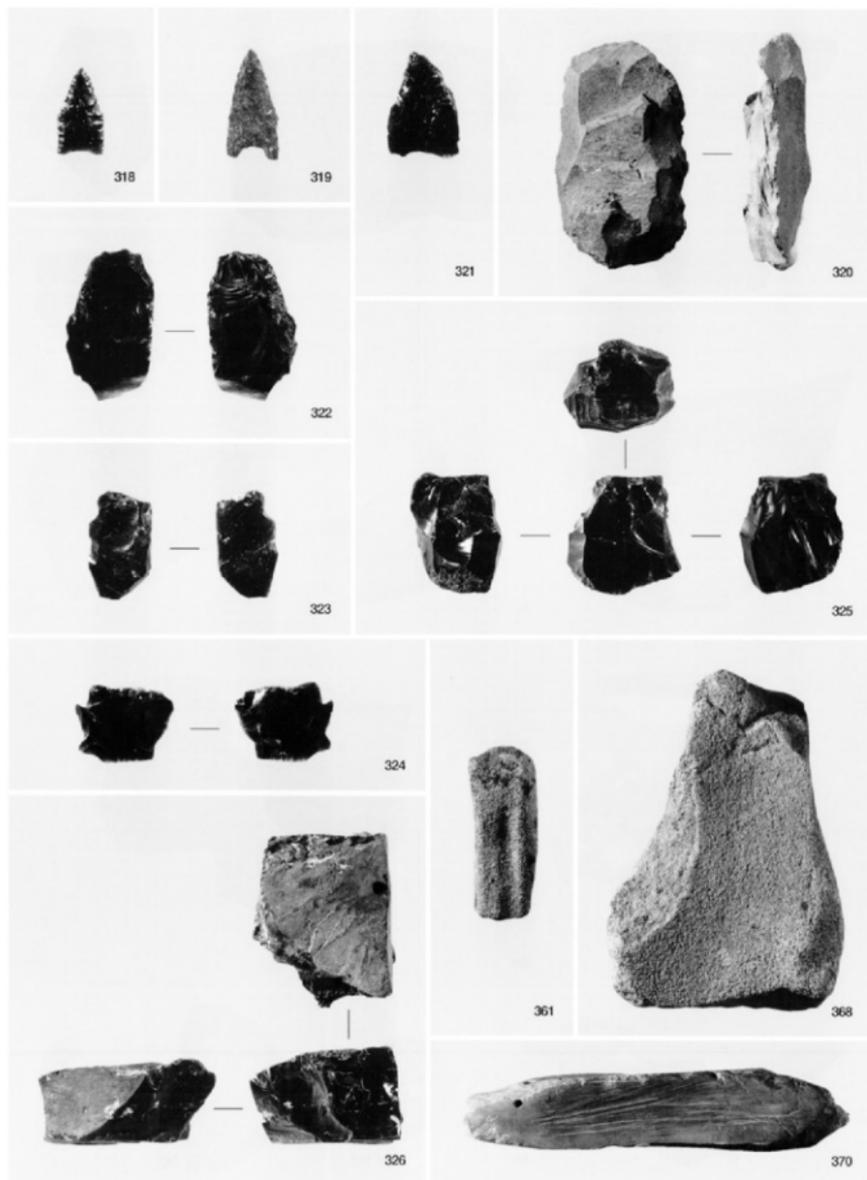


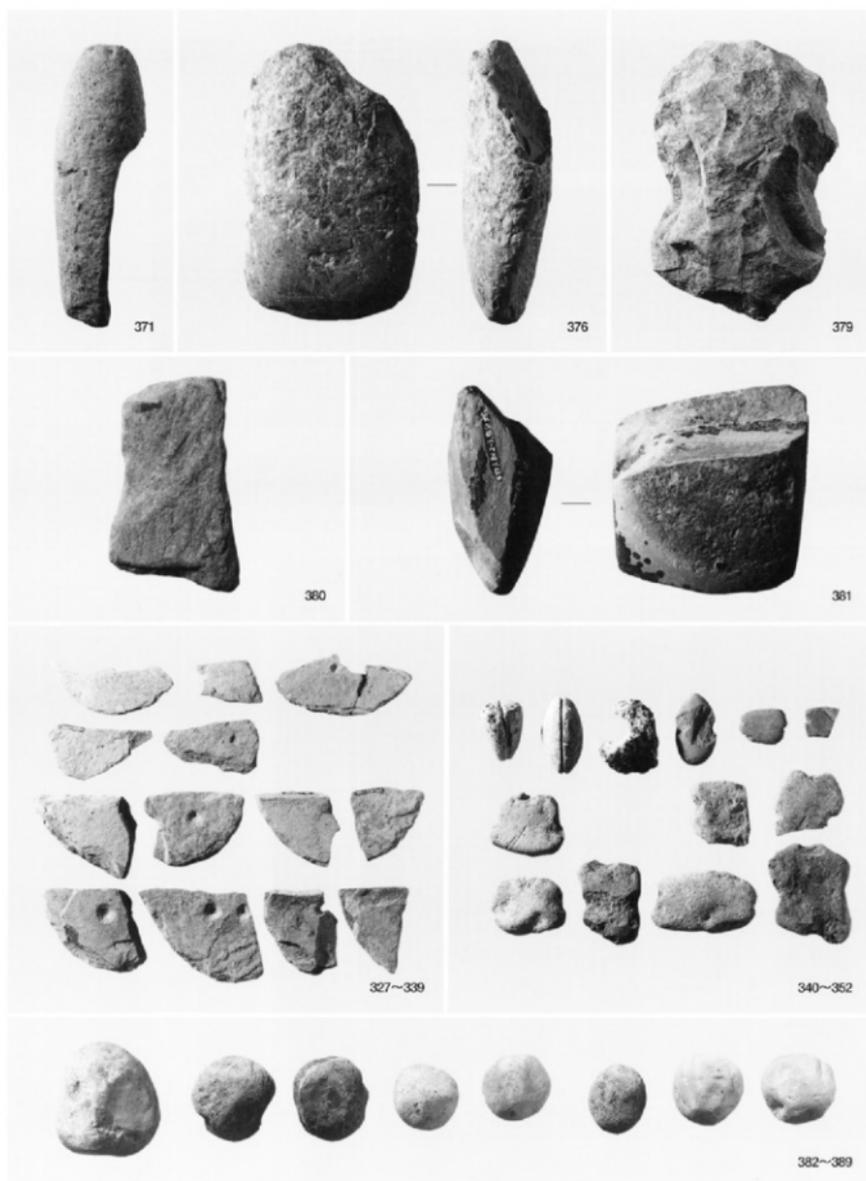
175



178

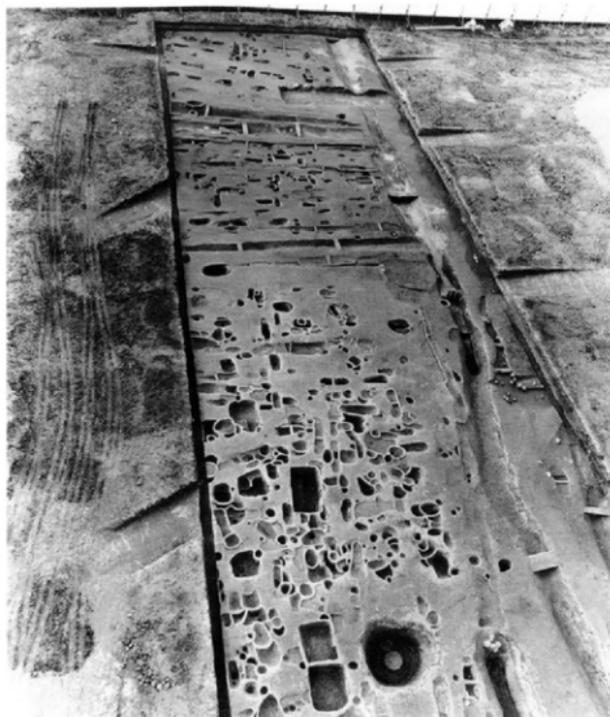




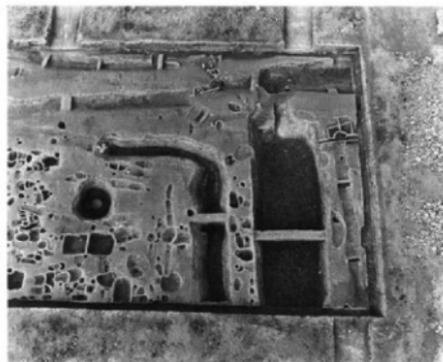




(1) 調査区全景 (南から)



(2) 調査区全景 (東から)



(1) 調査区東側全景 (南から)



(2) 調査区中央東側全景 (南から)



(3) 調査区中央西側全景 (南から)



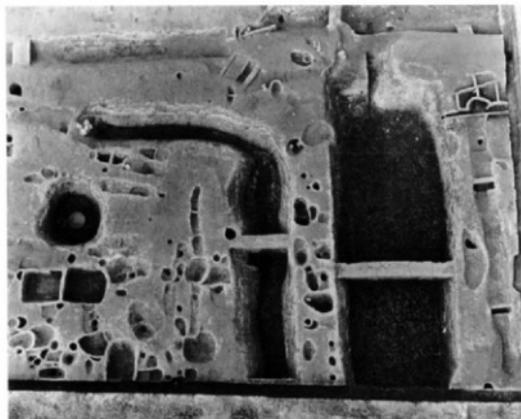
(4) 調査区西側全景 (南東から)



(5) SE04 (北から)



(6) SE111 (南から)



(1) SD01・02全景 (南から)



(2) SD02土層 (南から)



(3) SD01下駄出土状況 (北から)



(1) SD03遺物出土状況（東から）



(2) SD03（東から）



(3) SD03遺物出土状況（北から）



(1) SD05 (南東から)



(2) SD05遺物出土状況(北から)



(3) SD39 (南から)



(1) SD73 (東から)



(2) SD90 (南から)



(3) SD93 (南から)



(4) SD90土層 (南から)



(5) SD101 (東から)



(6) SD112 (北から)



(1) SK66 (東から)



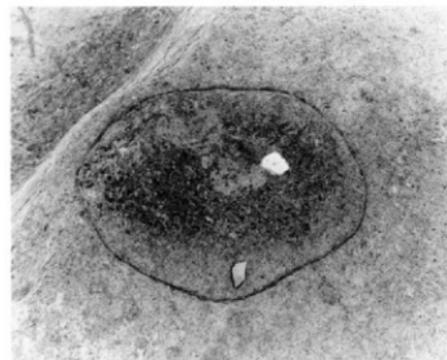
(2) SK71 (西から)



(3) SK72・91・96・97 (北西から)



(4) SK77 (北から)



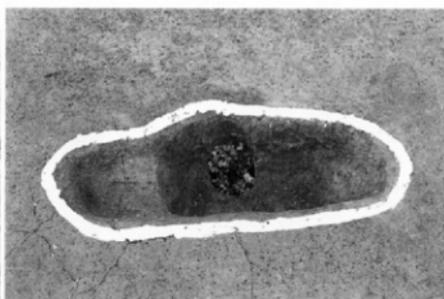
(5) SK72 (北から)



(6) SK91・96・97 (東から)



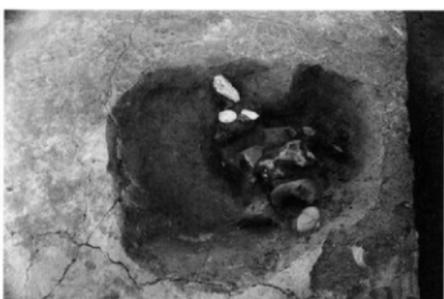
(1) SP1042 (北から)



(2) SP1305柱出土土状況 (西から)



(3) SP1371土層 (西から)



(4) SP1371 (西から)

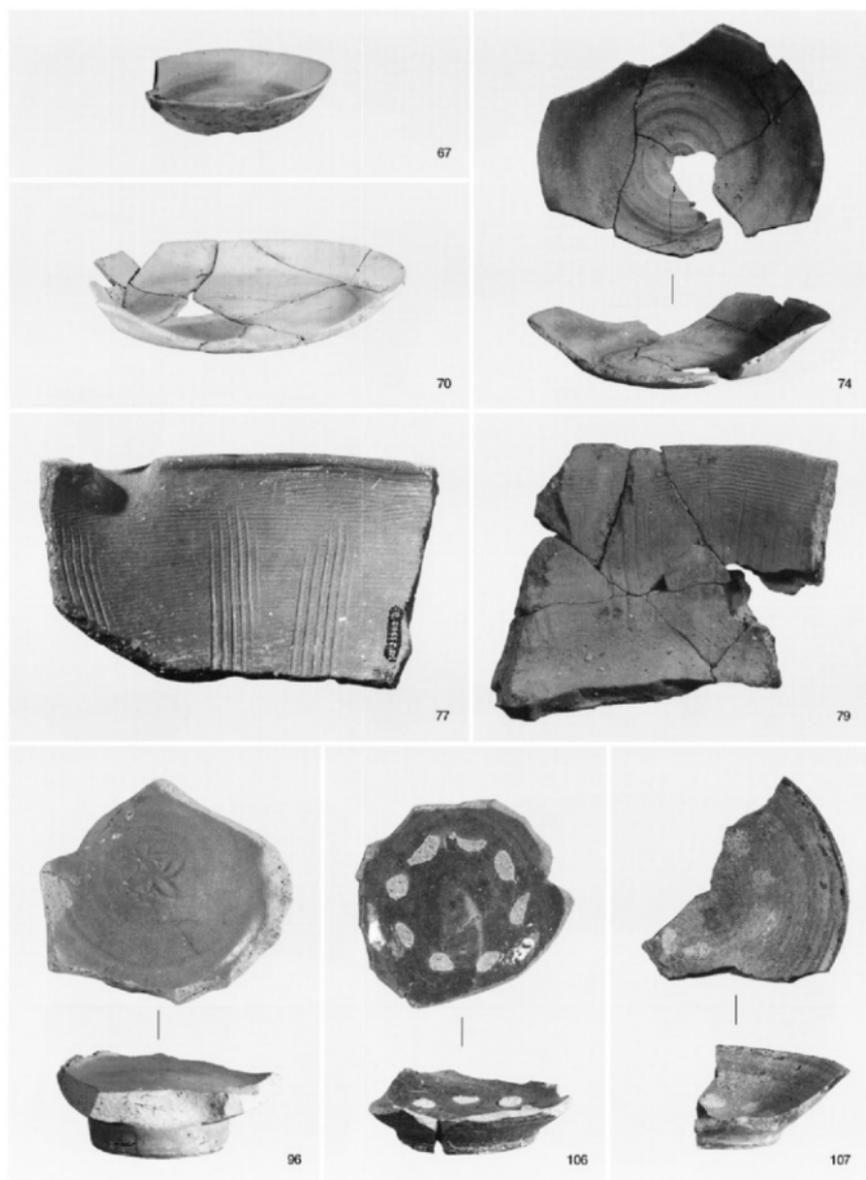


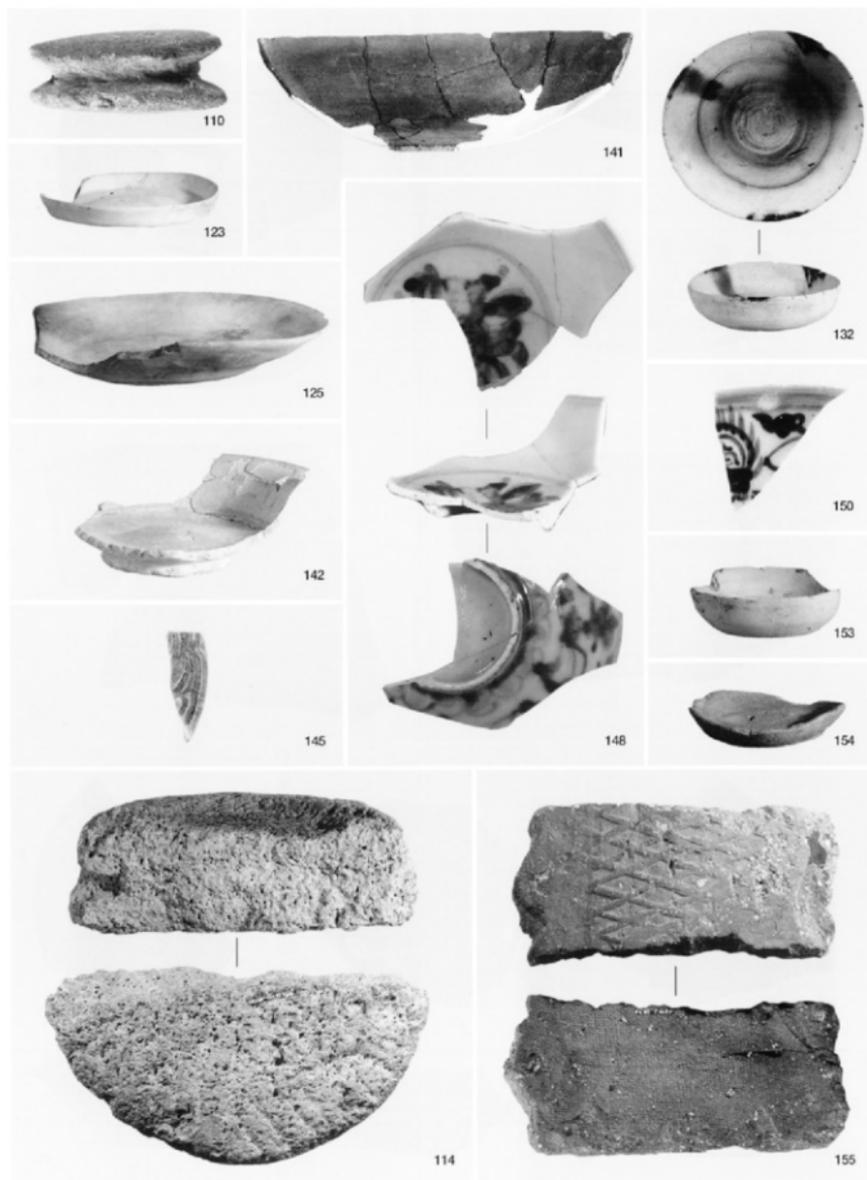
(5) SP1336 (南から)

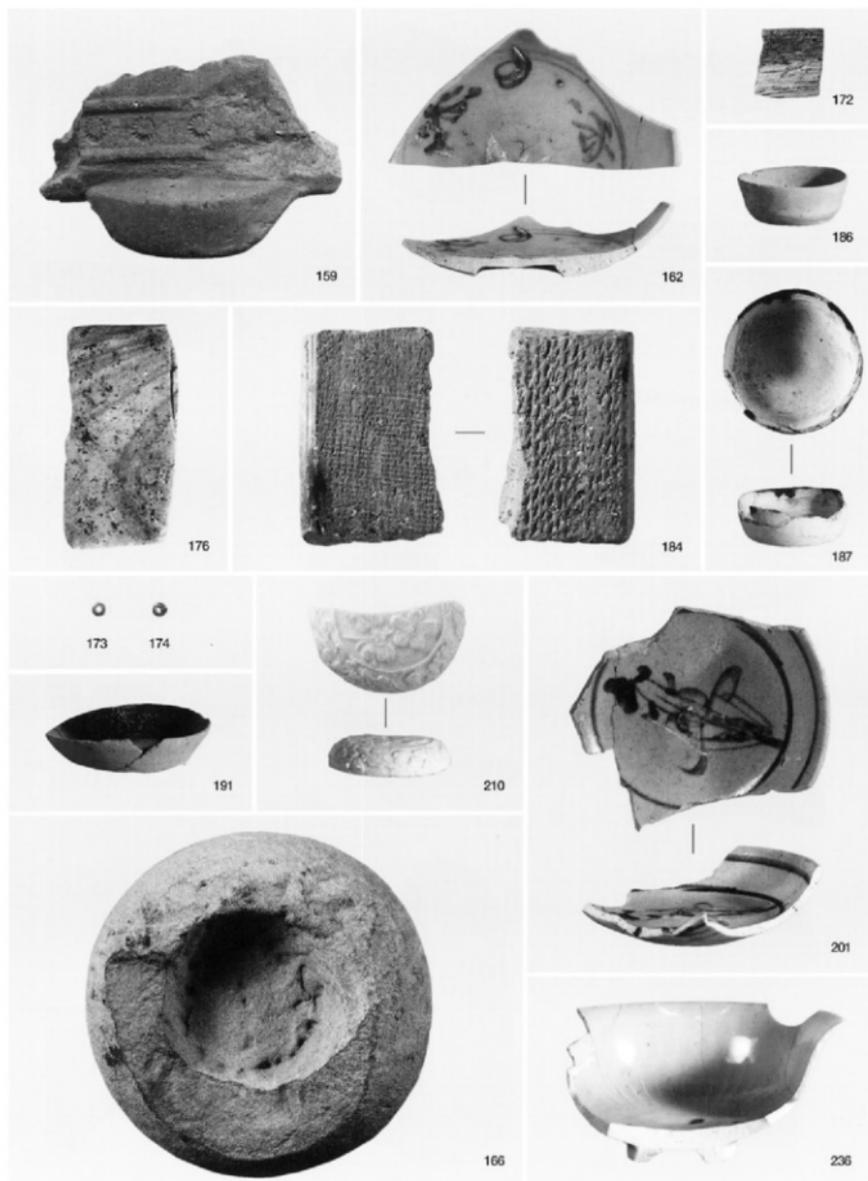


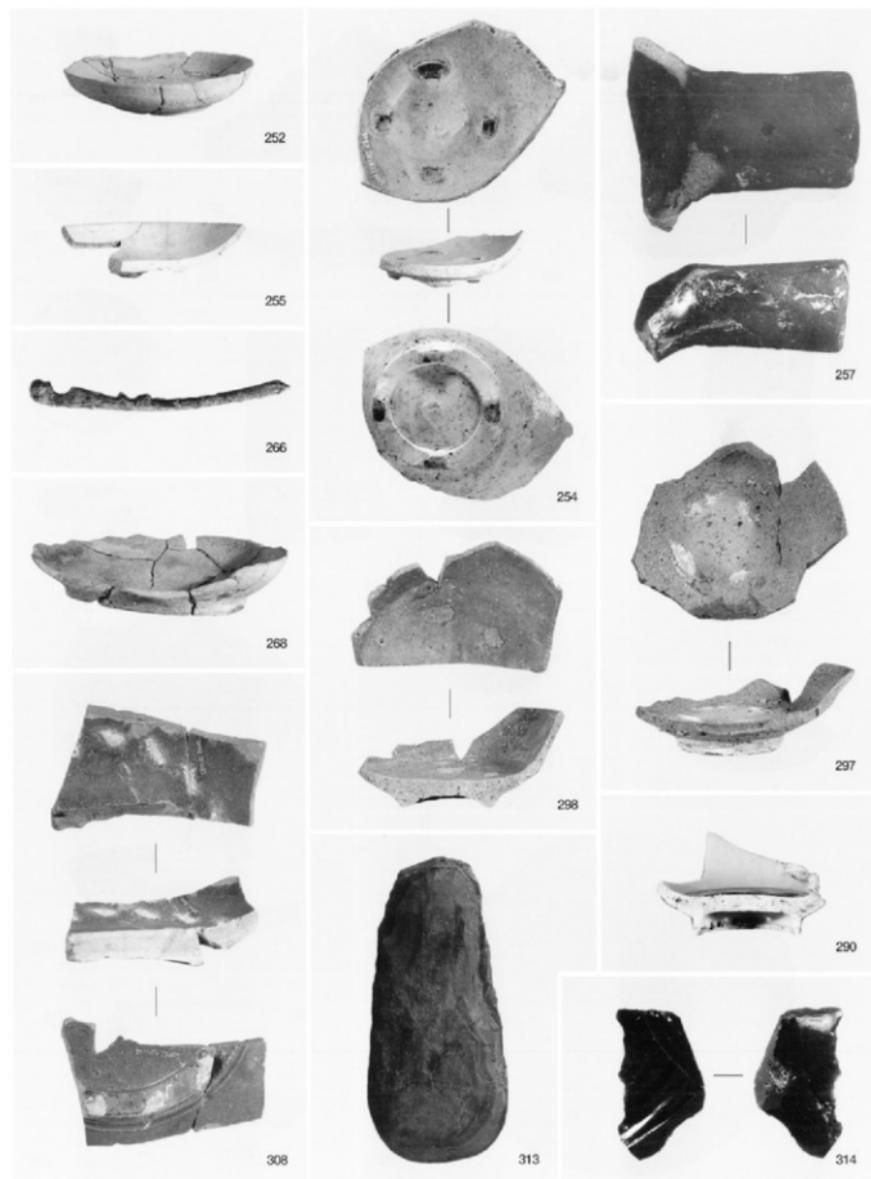
(6) 北側包含層出土漆器碗 (西から)











下山門敷町遺跡・下山門乙女田遺跡

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第727集—

2002年3月29日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 田堀印刷有限会社

福岡市埋蔵文化財調査報告書第727集

『下山門乙女田遺跡』

付 図

下山門乙女田遺跡第2次調査遺構配置図

